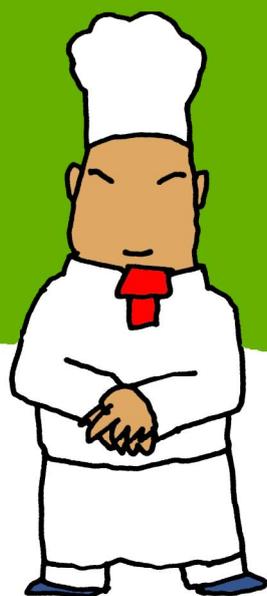


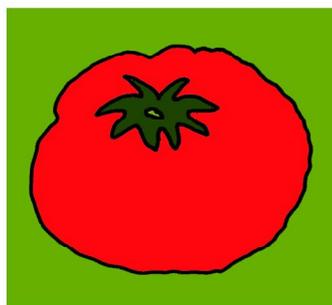
連載専門誌

対人援助学マガジン



創刊号

2010/06/15



対人援助学会

目次

1 工程・1Yen ~知的障害者の労働現場~	千葉 晃央
社会臨床の視界	中村 正
ケアマネの会った家族たち ~家族理解と家族支援~	木村 晃子
街場の就活論	団 遊
心理療法が始まるまで ~コミュニティと病院で~	藤 信子
わたしてき面接の手順	岡田 隆介
映画の中の子どもたち「プレシャス」	川崎 二三彦
子どもと家族と学校と	中島 弘美
蠍の斧 社会システム変化への介入	団 士郎
学校臨床の新展開	浦田 雅夫
場と会う、人と会う~中村先生との対話~	北村 真也
幼稚園の現場から	鶴谷 圭一
福祉系対人援助職養成の現場から	西川友理
我流子育て支援論	河岸 由里子
不妊治療現場の過去・現在・未来	荒木 晃子
対人援助学の里程標	サトウ タツヤ
小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー	尾上 明代
家族造形法の深度	早瀬 一男
旅は道連れ、世は情け	村本 邦子
形づくる人々	柳川 正賢
ちょっと長くてくどい編集後記	編集長&編集員



1 工程・1 Yen

知的障害者の労働現場

第1回 障害者自立支援法で不景気に？！

千葉 晃央

京都国際社会福祉センター

ここで話そうと思う労働現場とは、障害者自立支援法という就労移行支援、就労継続支援といわれるところ。そして、これまで、一般就労ではなく福祉施設での働く場を「福祉的就労」といい、具体的な場としては授産施設、作業所と呼ばれてきたところでのおはなしだ。

上記のいわゆる「就労系」の障害者施設では、新しい時代を迎えたように感じる時がある。就労系施設は、お互いがライバルだ。同業界の他事業者がライバルというのは、どこでもそうだろう。いやあ、待てよ、ライバルという表現が的確ではない。なぜなら「元請・下請け関係」があることだ。仕事を渡す方と渡してもらう方ということだ。

就労系施設は、ひと月、利用者が働いて得た作業工賃を利用者の実習費、つまりお給料というかたちで利用者が持ち帰る。それがいくらになるかが就労系の施設の業績、通信簿のように存在する。就労系の施設の平均は、月 8000～10000 円と少しぐらいが平均というのが、いろいろなところでのデータだ。なので、各施設がいくら利用者の人に実習費をわたしているかは、安易な施設評価に直結しかねないので公開されないというのが業界の慣習であり、いわばタブーのようなところだった。

うちは沢山わたせてないけど...

これは同じ社会福祉法人内の別施設間でも、そのようなことが起こっていることが多かった。職員間で、そのあたりの話になると急に言葉を濁す。対人援助サービスは連携が大事、ネットワークが大事といわれてはいる。が、それとは間逆のことが起こるのだ。そして、その実習費の高低、上下が、当然施設間の力関係や、ねたみ、やっかみの対象というところまで、影響していくことはいうまでもない。

作業が暇な福祉施設は、忙しい福祉施設に仕事をもらいにいく。作業を中心とした施設に仕事がないのは、根幹に関わるピンチだ。こうして、この施設間では、対等な力関係での関係構築というのは難しくなる。

仕事をもらっている側は、どこか相手をうらやみ、仕事を出している側は、自分たちの効率、利益を考え、そこに福祉という側面は薄まる。そんな施設間の関係のなかでは、同じ福祉ニーズに向き合っているもの同士としての連携、協力は生まれにくかった。

ススメッ！！障害者雇用！

しかし、近頃、障害者自立支援法で、一般就労へという流れをつくったことで障害者雇用促進の取り組みが盛んになり状況が変わってきた。これまで、ライバル、元請・下請関係だった施設職員が頭をつき合わせて、障害者雇用に向け

て取り組んだ事例を共に検討する機会もできてきた。

施設、事業所は福祉的就労の場から、一般就労に向けて訓練をする場という機能を強めた。なので、実習費という価値観は二の次とされたのだ。なので、利用者が就労に向けた訓練をする場を選択する際の情報提供として、インターネット、冊子等で、施設の実習費が一般公開され始めたのだ。

そんななか、それでも公開していないところがある。無用な干渉、評価、風評、取材、誤解、ねたみは買いたくないと、半分意図的にアクセスをよくしていないのだ。それは、そこその実習費を出して、これまでの考え方で実績があるところだ。

つまりこうだ。今まであった価値観、文化では、実習費というものをいくら出せているかが施設のランク？格？のような感じであった。しかし、そこでは、勝負できないという施設は、援助の質、今は特にこの障害者雇用、就業支援という機能をウリに勝負となってきているのだ。

やったろうやないけっ！

歴史として、たくさんの実習費を出している施設は、「企業なんかクソ食らえ！」とがんばってきた。一般就労をしても、いじめにあったり、搾取されたり、虐待されたりして、施設に戻ってきた知的障害者をたくさん受け入れてきたからだ。障害者のための労働の場を、わしらがつくってやると！先人たちは歩んできた。

現実、現在もかなりの割合で一般企業の障害者雇用は非正規雇用のようである。障害者雇用の実績を評価され、あちこちに紹介されている一般企業でも「正規雇用は無理です。」と明言していたりもする。そして、企業に障害者雇用を実施していることに対して支払われる助成金制度の期限が切れる頃の退職の頻発。それと、入れ替えで新しい人を入れ満額助成金をゲットする助成金制度寄生企業も古典的ながら存在しているようだ。

障害者雇用の状況は数十年前よりはいくらかは、

ましかもしれない。それでも、知的障害者が安心して働ける場なのか？経済的に本当に楽になったのか？と、たくさんの実習費を出してきた施設たちは思っている。（最低賃金除外の雇用形態もアリデスカラッ）

そんな施設たちは現在も旧法のままでいることが多い。自立支援法の廃案は決まったが、一端、自立支援法に移行してからではないと新法にはいけないそうだ。旧法の施設は、障害者自立支援法への移行で、今までみたいに仕事がバリバリできなくなったからといって、仕事を他の施設に渡したいという動きがあるという。一般就労に向けたプログラム（ビジネスマナー講習、企業訪問、実習先開拓営業活動など）を入れたため、これまでどおりの仕事量がこなせないの、企業に仕事の断りを入れる。

つまり、企業側にとっては、日本のなかにある安い労働市場（＝障害者の作業）の損失となる。新法移行期限が迫るここ数年は、企業にとっては障害者施設ではない下請け先（一般含め）を探ることになっているかもしれない。それも、今までと同じ単価でやってくれるとは限らない。安くても仕事が欲しいという福祉施設相手ではないこともある。一般業者相手なら、コストにシビアであり、単価の交渉、納期の交渉なども、よりタイトなものを求められるだろう。

福祉の前進？景気の後退？

察するに、これからの日本製の商品のコストは、上がる可能性があるのだ。それが値段に反映するか、利幅に反映するかは不明だ。全国約5000箇所（8000箇所とも）の就労系の施設で、この動きが緩やかに、ここ数年をかけて起こっている。日本国内でのローコスト労働力の損失が、影の影で世の中に影響を与えているかもしれない。そして、ひいては障害者施設利用者の実収入も落ちている可能性が高いのだ。

社会臨床の視界

(1) 歴史のなかの臨床課題

中村 正 (立命館大学)

ここで書いていきたいこと

対人援助は臨床的援助を含む広い意味で使われている。何らかの vulnerability (脆弱性) に関わることになるが、単なる個人の適応や同化という意味ではなく、well-being や QOL に力点が置かれる。その人のもつ潜在的な可能性や本来持っている力 strength が十分に周囲の環境、状況そして関係性のなかで活かされていないことを意識して、それをなんとかしていくということだと考える。それはすぐれて社会的行為としてある。それが援助行動 helping behavior であり、その担い手として対人援助専門職 helping profession があり、多職種が連携して援助共同体 helping community をつくる。治療共同体 therapeutic community はその一類型である。この潜在性を開花させるための〈社会〉の責任について、それを制度デザインやコミュニケーション基盤の構築へと向かわせることを社会臨床の視点は重視する。これは権利擁護を志向する対人援助専門職 advocacy-oriented professional である。そこには固有の倫理規範 ethics がある。

また、対人援助はその個別性を記していくことが大切だと思う。しかし、個別性を大切にするとすることは、その個人にだけ適応や同化を強いることではない。そしてまた、狭い意味での客観化された援助 - 被援助という枠に収めることでもない。環境、

状況、関係性、相互作用、文脈を浮かび上がらせることをとおして、潜在化している人の可能性を拓く多様な回路を提示することが重要となる。マクロに言えば、社会性ということになる。社会は個人間の相互作用を連続体なので、臨床性を旋回軸にして社会性と個別性のかかわりあいがか錯綜して表現される。そうだと考えれば、臨床の諸課題はその周囲の環境等に「淀み」ができていくということの表象となり、関係性の変容や相互作用の再構成への示唆となる。ミクロな相互作用をとおしてマクロな構造的問題を見いだすことが権利擁護を志向する援助専門職の実践では重視される。臨床性が生成してくるその場において現出する問題を社会臨床として包括的に捕捉すべき主題が現代社会には多いのではないかとも思っている。社会病理学を専門にする者が、人々の生きづらさに直面し、それを臨床社会学的な視点から読み解きながら、個人や家族への対人援助の実践に取り組み、そのことから社会臨床という視点に至る過程と諸断面のこれまでの経過と現在のもの見方について、備忘録風に記していくこととしたい。

視界を広げる - オーストラリアでのこと

2003年から2004年にかけてシドニー大学で客員をしていた。自然の豊かなオーストラリアは、眩い太陽、コバルトブルーの海、赤茶けた大地が織りなす彩りのある昼

と、それがゆえに感じる漆黒の暗闇と野性の静寂と恐れとでもいえる畏敬の念を醸し出す夜の対比が印象的である。この間を埋める自然との共生感覚を a way of life、つまり文化として営んでいたアボリジニは、オーストラリア大陸の陰翳を象っているように感じる。多様に繰り広げられるアボリジニの各種の表象がなければ、オーストラリアの深さと広さを捕捉できないのではないかと思うほど、その音楽、色彩、知恵、自然観、宗教など、総じてスピリチュアリティは豊かである。

アボリジニの置かれた社会的現実はいかに厳しい。期せずしてシドニーでアボリジニの日常の現実を映し出す事件に遭遇した。後に The Redfern Aboriginal Riot と呼ばれることになるアボリジニと警察官との暴力的な衝突事件である。2004年2月17日のことだった。シドニーの中心部にあるレッドファム駅の周辺にはアボリジニが多く住むコミュニティがある。警察の過剰な介入である追跡がもとになり、バイクに乗った17歳のアボリジニ少年がスピードの出し過ぎで運転操作を誤り、激突して亡くなった。その死を契機にして、かねてよりアボリジニ社会を過剰に監視する警察への不満が爆発した。シドニー中心部で警察隊とアボリジニが対峙して、石や煉瓦や火炎瓶などを投げつけるという事件となり、収束をみるまでに、夜半にかけての長い時間を要することとなった。その間 レッドファム駅は封鎖され、騒然となった様子をテレビが伝えていた。

この背景には、高い自殺率（アボリジニはオーストラリア社会平均の2倍の自殺率を示す。地域によっては4倍。年齢層では

青年男子に多い）収監されているアボリジニの高い比率と刑務所での死亡が多いこと、アルコールと薬物依存の多さ、平均寿命が白人にくらべて20年ほど短いこと、およそ45歳から高齢者向けのケアを受けることができることなど、あげればきりのないアボリジニの現実がある。これら精神衛生、社会生活、心理臨床にかかわる諸問題は、明らかに先住民への暴力、差別、虐待の歴史が反映された社会病理現象の一環である。

さらに、現代社会では虐待ともいえるが、その典型としてアボリジニ親子分離政策があった。これはいわゆる白豪主義政策 White Australian Policy の典型である。英語やキリスト教など白人社会に同化させるための教育を施す収容所にアボリジニの子どもたちが送られた。強制移住であり、有無を言わせない暴力そのものの政策であった。2004年のオリンピック選手であるフリーマンの祖母はこの親子隔離政策の犠牲者の一人であった。この問題を扱った小説と映画がある。西オーストラリア州に住む犠牲者の家族の実話をもとにした『Rabbit-Proof Fence』という映画である（『裸足の1500マイル』という邦題で観ることができる）。アボリジニと白人の間に生まれた混血の少女3人が家族から引き離された。母親に会いたいという思いは強く、彼女たちは収容所を脱出する。1500マイル（2400キロ）をウサギよけのフェンス沿いに歩き続ける。監督はオーストラリア出身のフィリップ・ノイス。ラストには、モデルになった女性たちも登場するドキュメントタッチの映画だ。この白豪主義の政策は1910年から1971年まで続いていた。遠い過去のことではない。「失われた世代」

stolen generation と呼ばれる親子強制隔離政策の犠牲や白人文化への融合政策、根強い人種差別など、負の歴史を傷あととしてもつオーストラリア社会にしばらく暮らしてみても、この問題の深さを実感した。

この政策も含めて、先住民と白人植民者の間の確執は大きく、先にあげたような数々の社会病理現象としてなお傷跡を残している。文化的トラウマ、トラウマの世代間連鎖などとも呼ばれることもある。自殺、殺人、非行、依存症など心理臨床の重要な対象となる問題の山積するアボリジニ社会は、トラウマの世代間連鎖をとおして、社会性を色濃く帯びた社会臨床的なニーズを数多く有しているといえる。アボリジニ問題は、オーストラリア社会にとっての原罪のようでもある。もちろん、多文化社会づくりの駆動力ともなり、競争と戦争ではない和解と平和のための国家のあり方を示す試金石ともなりうる点も看過できない。

暴力と虐待の歴史の結果の民族への負荷は、その社会においては精神衛生と心理臨床の課題として現出し、援助は個人に焦点をあてざるを得ない。それを、アボリジニが多くすむ地域としてみると、剥奪された地域ともいえるので、個人の問題だけではない社会性あるテーマとして確定していくことが重要だろう。そのためにも社会がその関係性の修復に取り組むことも重視されるべきだ。同化に対比していえば異化という側面である。この両者を視野におさめるアプローチが社会臨床といういい方にこめた意味である。

しかし、社会性があるとはいっても、臨床性をもつ援助課題として把握されるべき面もある。かねてより関心をもっていたア

プローチがあり、それを社会臨床の視点から会得したいと思って赴いたオーストラリアである。マイケル・ホワイト Michael White を創始とするナラティブ・セラピー Narrative Therapy あるいはナラティブ・アプローチ Narrative Approach のベースとなっている南オーストラリア州のアデレードにあるダルピッチセンターに出向き、セラピーの研修を受け、加害者・虐待者への脱暴力にむかうための具体的なセラピーの手法を学んだ。ナラティブ・セラピーは暴力や虐待など社会性のあるトラウマを対象にした実践をおこなうことが多く、南オーストラリア州ではアボリジニ社会で活躍するコミュニティセラピストの存在の大きさを知ることができた。場に臨むことで見えてきたナラティブ・セラピーの社会臨床的なアプローチであった。(続く)

なかむら ただし

(専攻 社会臨床論、社会病理学、臨床社会学)

ケアマネの出会った 家族たち

～ 家族理解と家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

介護保険制度とケアマネージャーに

求められる役割

日本で介護保険制度が開始し、早10年が経過しました。介護保険制度の要と言われ、介護を必要とする高齢者と、そのニーズに対応するサービスを調整していく、ケアマネージャーという資格名もようやく世間に浸透しつつある昨今です。とは言っても、まだまだ、「ケアマネージャーって何をしてくれる人なの。」という疑問を持っている人も少なくありません。ケアマネージャーの役割が世間に浸透するには時間を要するようです。

しかし、超高齢社会の日本。年々、要介護高齢者や、介護保険サービスの利用者も増し、その制度は財政面で大きな問題を抱えています。国は、少しでも介護給付費を抑制するために、要介護化の歯止めを狙います。そして、今後続く超高齢社会を見据え、国がケアマネージャー（以下ケアマネ）に求めているのは、適切なアセスメントに基づく適切なサービスの調整。そして、介護予防です。

一方、介護保険サービスを利用する高齢者や、その家族は介護保険制度に何を望んでいるのでしょうか。

少しでも、自分らしく暮らしたい、と願うのは高齢者本人だけでなく、高齢者を取り巻く家族自身も同じ思いです。

親の介護は子供がするものだ、という時代を生き抜いて、当然に親を自宅で介護し、看取りを行っていた高齢者にすれば、自分だって、年をとり体が弱っても最後まで自宅で暮らしたい。病院になんて入院しないで自宅で死にたい、という願いを持っている人は少なくありません。

では、高齢者を支える家族、つまり子世代は親の介護をどのように捉えているのでしょうか。その捉え方は実に様々です。個人の考え方だけではなく、社会の状況に大きく影響され、事情があることも多いのです。介護を担う家族の気持ちがどうであろうと、親の介護をするのは当然という考えの中で、介護をしている家族。できるだけ自宅で介護をしていきたい気持ちはあっても、共働きなど時間的都合により自宅介護が困難な家族。また、介護はするが、在宅看取りはできない、いざという時には病院に入院させたい、という家族や、傍からみれば、自宅介護は大変だろうな、と感じる状況であっても、サービスの利用も消極的で、あくまでも家族の中だけで介護をしていこうという家族。反対に、介護は大変そうに見えなくても、長年の関係性における確執から在宅介護の限界が早々に訪れる家族。本当に、介護を

担う子世代の考え方や、選択しなければならない状況は多種多様です。

そこで話しは少し戻りますが、今、高齢者や家族が望んでいる介護保険制度、ケアマネの役割は何でしょうか。それは、自分たちの思い描く人生脚本の完成のための援助、つまり、自己実現に向けての援助を求めているのではないのでしょうか。と、すると、「介護の必要性」のみに着目しニーズに対応するサービスを結び付け援助するケアマネジメントだけでは、高齢者や家族の求める自己実現に向けての援助には一致しないかもしれません。

誰もが、質の高い介護を受けたいと願っているのではなく、例え介護が必要な状態になったとしても、自分で考え、決定する。自分らしい人生を歩むことへの援助を期待しているのでしょうか。そして、できることなら、人に頼らなくても、自分でなんとかしたい、と思う気持ちも人の心の中には備わっているのだらうと思います。

ケアマネには、介護保険制度という枠組みの中で出会った援助対象者と対象者をとりまく環境を含めて、援助を展開するソーシャルワークが求められているでしょう。

ケアマネになるには、一定の基礎資格と経験年数という条件に基づいて受験資格が与えられ、その条件をクリアし試験に合格すれば（実務講習受講、都道府県への登録などが必要ですが）、ケアマネ業務はできます。それは、ソーシャルワークを展開していくためには少々、いやかなり大雑把な、資格者の養成という印象をめぐえません。ここに、ケアマネ資格のあり方や資質の向上を考える時に大きな疑問を感じますが、今そこをどうこう言っても即解決することにはなりません。

様々な課題を含みながらも、今、ケアマネ資格を持ち、その業務を展開する者として、援助対象者の役に立つ事ができるような実践力を身につけていくことが必要です。

私は、ケアマネとしての日々の業務実践の中で、具体的に役に立つ援助ができるようになるために、援助を「家族理解と家族支援」というキーワードを持って展開しています。

それは、立命館大大学院教授である、団土郎先生の家族療法ワークショップに参加したことが始まり

でした。今、目の前の援助対象が抱えている問題のすべては、家族という土台の上に成り立っている。問題（症状）は、社会や家族との関係性（環境性）の中で発揮され、個人に属する、原因と結果という直線的なことに解決を求めるよりも、家族のシステムに変化をもたらすことによって、事態は良循環へ向かいやすいということが納得できたからです。この、家族システムに対するアプローチについては、まだまだ私自身が学びの途中であります。学びながらにして、日々の業務を実践していく中で、家族が問題を抱えながらも元気になって、「今までよりは少しはマシ」という折り合いをつけながら、暮らし続けている事例にいくつも出会うのです。そして、そんな家族の物語を身近に感じることもできる、このケアマネという仕事が楽しくなっています。

問題を抱えながらも、元気になっていく家族の物語を紹介しながら、ケアマネとしての対人援助について考えていきたいと思います。

ケアマネの出会った家族たち ～自己決定、を支える。～

それは、春とは名ばかりの寒さの続く3月下旬のことでした。巖（いわお）さん（79歳）から、ケアマネに一本の電話が入りました。

「ちょっと、来てくれないか。これからの事を色々相談したいと思って。」と、耳の遠い巖さんが一方的に話、電話は切れしました。

巖さんは、妻、カズさん（77歳）と、独身長男51歳との三人暮らしです。長男が仕事にでかけている日昼は、夫婦二人で支え合っの生活です。この2、3年持病の腰痛があり、外出や室内の歩行も苦痛が伴い、思うような動きができなくなっていました。時々、痛みが増すと専門医へ受診し入院することもありましたが、担当医の治療方針に従えず、医療機関とはトラブルになるような形で治療を中断し退院してくる、ということが多くありました。

巖さんは自宅の中では、これまで通り一家の大黒柱のような顔をしながら、動けなくなってきた体とは反対に、言葉数だけは増え、気に入らないと大声で怒鳴ることもありました。

傍で支えるカズさんは、幼いころから自家の手伝いをし、十分な教育に恵まれずに、文字を書いたり読んだりすることができません。けれども、それ以外のことはなんでもやりこなす働き者の妻です。自宅で食べる殆どの野菜は自分で作り、漬物など冬場に食べる保存食の準備も完璧です。こまかな家計の管理も行い、無駄のない質素な生活ぶりです。巖さんの、少しわがままな、大柄な態度にも上手に話を合わせながら、時には横を向いて舌を出しているあたりは、なかなかのユーモアがあります。カズさんは、巖さんを上手にあやしながら、自身もしっかりとした芯のある女性です。

人に弱みを見せることのないカズさんが、ある時緊急入院することになりました。誰にも話すことのない、数年前からの不調が癌という形で、末期の症状になっていました。原発巣からの転移もあり、見通しは厳しい状況です。それでも、持前の気丈さで予定の治療が終了すると、自宅退院することができました。自宅に戻ったカズさんは、弱った体にも関わらず、これまで通りの巖さんとの生活を続けます。退院して半年が経過しました。寒さの続く北海道の冬の終わり、カズさんは風邪をこじらせ肺炎になり、再び入院することになったのです。

同居する長男は病気の母親の心配はしていましたが、母親を労わる気持ちの少ない父巖さんに対しては、不満もあります。また、加齢や少なからず病気の影響もあって、頑固さに話しの伝わり難さも手伝って、意思疎通が難しくなっている現実もあります。カズさんの不在の家の中では、男所帯が気持ちの上でも殺伐としています。

巖さんが自分の思うように事が進まない「母さんが入院したから、こんなことになった。あんな役に立たない奴は死んでしまえばいい。」とさえ言葉が飛び出します。これには、さすがの長男も黙ってはられません。父親の発言をたしなめたところで、巖さんの身勝手な怒りは頂点に達します。

「口答えをするなら、お前が出て行け。」

長男も負けるわけにはいきません。

「ああ、出て行ってやるよ。」ついに我慢の限界でした。そして、どう考えても、誰かの手助けがなければ生活するには厳しい状況の巖さんを一人残し、長男は家を出て行きました。

巖さんには、長男の他に、54歳の長女と53歳の次女がいます。それぞれ、結婚はしていますが、近くに住んでいます。娘たちも、母親が入院した後は、何かと不便であろう父親を思って、忙しい合間を縫って様子を見に来ていましたが、その都度頑固親父の発言には閉口するものがあり、たしなめると怒鳴られ、「もう来るな」と吐き捨てられます。そんな経過から、今では娘たちの足さえ、巖さんのもとから遠のいているのです。

唯一の長男が家を出た事で、巖さんの生活状況は困難にぶつかりました。腰痛も悪化、自分で立ち上がってトイレに行くこともできず、室内は垂れ流しの状態と化していました。勿論、動けないのですから食事の支度に台所に立つこともできません。お腹だけは空きます。なんとか、電話に手を伸ばし知人に電話をかけSOSを発信です。電話を受け取った知人は、聴こえが悪くこちらのお話を聞きとれない受話器の向こう側が誰なのかを推測し、辿り着いたのが巖さんです。慌てて巖さんの元へ訪ねたところ、室内の散らかりようと、身動きをとれないで腰痛を訴えているその状態に驚いています。巖さんとの話の中で、ケアマネが関わっていることを知り、電話番号を押したのは知人でした。

電話を受け取ったケアマネは、状況はわからずとも、何かがあったことだけは予測可能です。まずは巖さんの家に向かいます。巖さんの家に訪問した時に目にしたこの光景は、同居しているはずの長男との何かを物語っていることはすぐに理解できました。

「息子さんは、どうしたの。」

「あいつは駄目だ。家を出て行った。」

「え。なぜ。じゃあ、娘たちは。」立て続けに質問です。

「あいつらも駄目だ。皆、言う事を聞かんのだから家に入りにさせないようにした。」巖さんは淡々と語ります。巖さんは、腰痛が悪化しており、体を起こすことができず、汚れた衣服のまま、寝そべて話を続けます。

「この状況で、生活に困ると思うけれど、息子さんにも娘さんにも助けてもらえないなら、これから、どうしますか。どうしたいですか。」ケアマネは、巖さんが自身の生活に対してどのような見通しを持っ

ているのか確認します。「今は、腰が痛くてかなわん。入院させてくれる病院に行きたい。」と入院を希望されます。入院するのであれば、先立つ受診が必要であり、息子や娘たちの少なからずの協力が必要であることを伝え、あらかじめ連絡先をきいていた息子へ連絡しますが、仕事でもあって息子には連絡がつかがりません。次に連絡したのは近所に住む次女です。次女は仕事でありながら連絡がつき、仕事が終わり次第父親の所へ向かうと言ってくれました。次女は仕事を終え父の所にやってきます。弟が家出をしたことは知らなかったと言います。慌てて、弟へ連絡すると「あんな親父は放っておけ。俺は何もしない。」と捨て台詞です。長女へ連絡しても「放っておくしかない。」と話し合いになりません。目の前の父親に対して兄弟が話し合いを持つこともできず、このまま置き去りにすることも忍びない状況に、次女の間からは涙が溢れ出ます。

ケアマネはまず、訴えのある腰痛に対して受診の協力を得られるのか確認しますが、「今まで、色々な病院に行っては、治療方針に納得できず、病院とトラブルを起こして退院してきている。もう、どこの病院に連れていけばよいかわからないし、自分が探した病院に連れて行っても、そこが気に入らなければ、後から文句を言われるから自分は関わりたくない。」と言います。

ケアマネは巖さんに、現在の状況では誰かのお世話にならなければ、生活を続けるのが難しい状況だから、病院でなくても介護保険の施設に一時的に入って、食事や入浴など安定した生活ができるようにしてみてもどうかと提案してみました。

「そんなところには行かん。入院させてくれる病院がないのなら、家にいる。誰にも手伝ってもらわなくても、一人でやってやる。」と強気な発言です。

次女は、涙ながらにケアマネに話し始めました。巖さんは、子供たちが幼い頃から、仕事はするが、競馬などにお金をかけ、十分なお金も家庭にいれず、母親と自分（次女）がいつも家計を管理しながら生活していた。長女は得意なスポーツで進学したため、学費もかかり、年子の次女は家事手伝いをしながら、定時制の高校進学を選択。母と二人で家事や家計をやりくりし学校に通い、ひとつ年上の姉が無事に高

校に通えるように協力していた。母は、父親に横柄な態度や暴言を吐かれ、十分なお金も持たされず苦労もしたが、「後ろむいて舌を出しても、我慢して負けないでやっていくよ。」といつも次女を励ましていたそうです。次女は、自分と母親だけがいつも苦労を重ね、姉や弟たちはあまり苦労を感じていなかったのではないかと話します。自由に好きなことに向かって進路を選べた一つ違いの姉と、家の心配もしないで進学できた弟に挟まれ、誰にも聴いてもらうことのなかった、15歳の時の次女の胸のうちは今、明かされます。

「姉や、弟はそうやって、構うな、放っておけ、というけれど、私には放っておくこと、それも苦しいです。自分の親なのに、他人に心配してもらっているのに・・・でも、今の父に良かれと思って手を貸しても、受け入れられないし、気に入らなければ怒鳴れる。父が一人の生活に根をあげて自分の口から助けてほしいと言わない限り、私は何もしません。だから、私も放っておきます。たぶん、父はなんとかなると思います。」次女は、次女なりに、父親を放っておく、手は貸さない、という決断をしました。

さて、対人援助の場面において、対象者の自己決定を支えることはとても重要です。けれども、支援の必要な人が支援を拒み、また支援の必要な状況の人に、支援をしないという選択は対象者の生活上のリスクが伴います。同時に支援を提供しない周囲の人への責任や、場合によっては非難の声があがることもあるでしょう。「敢えて何もしない」という選択、決定は他の選択以上の勇気と責任がいります。

巖さんのこの場面での本人の自己決定と娘の選択は、もしかすると「ネグレクト（養護の放棄）」というラベルが貼られる可能性を秘めています。

巖さんの「だれの世話にもならないで、一人でなんとかやっていく。」という決断と、次女の「父が根をあげるまでは、子供として何もしない。手は貸さない。」という選択について、ケアマネは双方にその選択に基づくリスクを説明しました。

まず、巖さんへ。このままでは、室内も汚れ放題、食事も不規則で健康を損ねる恐れがある。次女へは巖さんの生活が安全に送れるように、介護保険のサービス利用につながるよう働きかけはしていきま

す。そのやり取りに、ケアマネもたびたび訪問するので、平日は本人の安否を確認できるが、週末はケアマネが訪問することはできないので、その間に何かあったときには、次女をはじめ、子供たちが心にひっかかりを残さないでしょうか、と確認。次女は、「何かあっても仕方ない。なんとなく、外から様子はみにきます。」そんな言葉がありました。

ここで、本人、次女への自己決定に伴うリスクを確認できたので、「だれの世話にもならない。」という本人と、「あえて何もしない。」という次女の決定を支えることにしました。

とはいうものの、この決定はケアマネとしても、巖さんに万が一のことがあっては困るな、という心配や不安を抱えての支援になります。

その後の1週間は、巖さんの生活ぶりを心配したケアマネが週末を除き毎日訪問を続けました。訪問の都度、汚れた衣服の着替えを手伝い、簡単な室内の掃除をしました。食事は本人が自分で知っている商店へ電話で弁当を頼み配達してもらったものを食べています。

弁当を届けた商店の店員も、この状況で一人暮らしをしているらしい巖さんのことは心配です。毎日、約束の時間に弁当を届けますが、たまたま、寝坊をした巖さんが玄関からの呼びかけに応答がない時などは、何かあったのではないかととても心配になります。

訪問時に気になることがあれば、ケアマネに連絡をくれるように、商店の人とも連携をとります。

そんな中、なんとか生きていく、命に別条はないということは確認できています。この1週間の中で、誰かの手助けがなければ自分の生活は成り立たない、という自覚が巖さんにも出てきました。訪問の度に、身の回りのことに少しだけ手を貸していたケアマネがヘルパーと共に訪問し、巖さんに言葉をかけます。

「巖さん、私は毎日訪問することはできませんし、こうやって巖さんのお手伝いをする役割の人間ではないです。今後もこの状況が続けるわけにはいきません。でも、介護保険のサービスでは、お金はかかりますが、室内の掃除や洗濯、食事作りや、必要なら入浴のお手伝いもできますよ。ヘルパーさんに、お願いしてみますか。」ケアマネの言葉に、1週間前の強がりの巖さんは姿を消しています。

「そうだな、掃除と洗濯、風呂にも入りたいな。お願いするかな。」あっさりとした返答です。ケアマネは早速ヘルパーサービス導入の調整を行いました。

「温まると腰の痛みがラクになるから。」と自宅での入浴を切望していた巖さんでしたが、古い自宅の風呂が故障し、自宅での入浴は困難です。そこで、1年近くも中断していた、ディサービスへ「お風呂に入りに行こう。」と声をかけ、再びディサービスに通うことになりました。

ヘルパー、ディサービスの利用は開始されましたが、予定通りにサービスが実施されないことも度々あり、サービスに関わる担当者は、いつも巖さんについて多くの心配を持ちながら援助を展開しています。

巖さんが、子供たちの手を借りずの生活が続いています。訪問してくれるヘルパーとも信頼関係ができ、「誰かの手を借りること」に少しずつ慣れてきたようです。持病の腰痛も落ち着いています。今では、ゆっくり立って歩くこともできるようになりました。家を出て行った長男と巖さんとの同居生活は途絶えたままです。けれども、一人暮らしに寂しさなのか、長男に帰ってきてくれるように、巖さんは少しずつ頼み込んでいるようです。そんな父親の変化を受けて長男も時折様子を見に来ています。けれども、長男の顔を見ると相変わらず大柄な巖さんと長男の同居が再開されるのはまだ先のことのようです。

援助過程において「見守る。様子をみていく。」という援助方針は珍しくありません。見守る、様子を見る、という言葉は対象者の気持ちを優先し保護的な印象を含んでいます。援助の場面でこの言葉を使っても違和感を覚えることは少ないでしょう。けれども、見守るという名の、単なる援助過程の放置が実在することは、多くの援助者たちは薄々気がついているのではないのでしょうか。

巖さんと次女は、手を借りない、手を貸さない、といことを意識下で決定しました。リスクも覚悟です。でも、その決定をケアマネは公的サービスへとつなげました。悪化している家族の関係性と家族の歴史も考慮しながら、それぞれの位置関係に境界線を引いたうえで、残された本人の底力を支えました。

けれども、この決定を支えるためには、巖さん自身の一人暮らしに対する不安や自暴自棄になる場面を支え、近隣（商店）の人の心配や万が一に対する懸念も調整しなければなりません。また、課題として残っている、子供たちとの関係調整、サービス提供機関の不安など、巖さんを取り巻いて、関係する人たちには実に多くのストレスが発生しています。

「万が一の時には、誰がどうやって責任をとるのか。それが福祉の仕事か。」そんな声さえ聞こえてきそうです。

人の一生の中で、万が一のことが起こったとき、その事に対する責任を担える人はいるのでしょうか。とかく、責任の所在が問われる現代社会ですが、人生に起こる万が一に対して、責任が取れる人などいないのではないのでしょうか。多く問われている責任という言葉には、結果が起こるまでの経過の中で、十分に受け止められなかった気持ち（感情）が、その受け止めに求めて訴えられているのではないかと感じます。

経過の中で、一人ひとりの抱えている思いが吐き出され、考えられ、受け止められてさえいれば、結果がどうあれ、責任の追及に力が注がれることは少ないような気がします。

巖さんの事例を通して、人が人の中で生きていくということには、多くの面倒や、不安や、心配がついて回るのだなと思いました。暮らし易さや合理性が問われると、面倒を避け、人の気持ちが置き去りになってしまい、安全や責任ばかりが優先されます。でも、巖さんの周りに関わる人たちは、多くのストレスを抱えながらも、連携を取りながら巖さんや子供たちを支えているのは確かです。

やっかいなこと、不安や心配を持ちながらも支え合っている、そのことが、地域の力になって、互いに思いを向け合って生きていく力になっていくのではないのでしょうか。

巖さんの生活課題が解決されている訳ではありませんが、巖さんの周りでは、人のつながりができ、支える力もついてきているのは事実のようです。

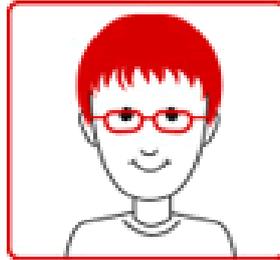
プライバシー保護の為、事実を加工しています。



街場の就活論

新卒採用に今、何が起きているのかー

団遊 (だん あそび)



新卒採用の領域が賑やかだ。内定切りをはじめ、ニュースにも事欠かない。就職できない学生が増える中、今現場では何が起きているのか？

就職活動の対人援助的側面

新卒就職活動という領域に、私が仕事として触れ合い始めたのは、7年前。当時、エン・ジャパンという人材総合会社が、新卒採用にも仕事の幅を広げようとしていました。就職活動生向けのインターネットメディアの新規立ち上げです。

業界の雄はリクナビ(リクルート)、マイナビ(毎日コミュニケーションズ)、日経ナビ(ディスコ)。かつては葉書応募がメインだった就職活動もインターネットに変わり、「とりあえずリクナビ登録」が合言葉になりました。後発のエン・ジャパンは他社との差別化の一環にクリエイティブの力も活用しようと考え、そのコンペに勝ったのが私が代表をつとめるアソブロックという会社でした。

結局、その仕事は3年程で終わりましたが、立ち上げ期ということもあり、学生インタビュー、人事インタビューなどを通じ領域の関係者に数多く会いました。エン・ジャパ

ンとの関係が途切れた後は、個別企業から応援を頼まれ、採用活動を企業の立場になって支援するようになりました。

その中で知り合った友人の誘いで、一昨年から、立命館アジア太平洋大学(APU)の非常勤講師として、学生の立場にたって就職支援をするようになりました。留学生30万人計画として小泉首相が立ち上げたアジア人材プログラムの支援講師も務めています。自分では思いもよらぬことですが、結果的に、企業・学生両サイドから「新卒採用」を見る立場になったのです。

そして今、この分野は対人援助色が強くなってきていると感じています。なぜなら、一生懸命頑張っても、実感値として4人に1人は就職できないからです。「絶対通るエントリーシート講座」「最強SPI対策」といったスキル指南系の講座は今も数限りなくありますが、私は今伝えるべきは「就職活動の結果程度のことではグラつかないキャリア観の確立」だと思いながら学生に接しています。本連載では、そんな私が日常で出会う様々なこ

とを、現場目線で書いていきたいと思います。

新卒採用は「市場」なのか

採用「市場」という呼び方。これ自体、そう古いものではありません。教育を過度に「市場化」しないのと同様、人材分野もある程度の抑止力があつたように思います。教育と経験を積み上げさせた若い世代の社会デビューを阻害することは、国単位で考えると自殺行為だと思います。

ところがインターネットが登場し、ビジネスプレイヤーが増えたあたりから「市場化」が俄然進みました。「1社でも多くの会社にエントリーした方がいい会社に巡り合う可能性が高い」ことになり、ようやく掴んだ内定に「本当にその会社でいいのですか？」とケチをつける。企業には「内定辞退対策の必要性」を説き「採用活動の早期開始が優秀な学生獲得のチャンスを広げる」とあおりました。

インターネットでより多くの企業と出会え情報が入手できるようになったことは良いのですが、それ以上に「ここでひと儲け」を狙う人が増えすぎました。結果的に「それほど必要でないニーズ」を生み出し、市場を拡大させていきました。学生に優劣をつけることで、市場はますます拡大し、複雑化し、落ちこぼれを作ります。

ただ、そのように市場拡大に奔走してきたプレイヤーたちが、今窮地に陥っています。「みんな気付き始めた」のが要因です。各社売上は下がり、収益構造の見直しを迫られている企業が少なくありません。一方で、だからと言って市場が何十年も前の状況に戻り切ることはありません。この時期を経て、いったん、今の形での成熟期を迎えるのだと思います。

そうなったときに、その与えられた環境の中で主体性を持って社会人デビューできる学生になるよう援助するのが、今のキャリア教

育や就職支援をする人に必要な意識だと思います。

いまどきの学歴信仰

「東大3年生50名を無料でハワイ旅行にご招待します」。学生が市場のイニシアチブを握っていた数年前、こんなウリ文句で商売をしている企業がありました。文字通り、東大生はハワイ旅行に無料で行くことができます。ただし、夜は宿泊するホテルで開かれる合同企業説明会に出席する必要があります。つまり学生の旅行代金は参加企業持ちのツアーというわけです。

しかし参加企業は誰もが知る有名企業などではありません。そのため、無料と言われても、簡単に学生は集まりません。企画した企業や協力する東大生は「ちょっとハワイに付き合っよ、無料だしね」と一生懸命勧誘していました。それほどまでに、東大生に会いたいと願う企業が多かったのです。しかし、この企画は長続きせず、やがて姿を消しました。

「最初はソニーだった」と言われていますが、随分前からエントリーシートに大学名を書かない企業はあります。しかし、だから採用に大学名は影響しないかということ、そういうことはありません。今でも、明確に大学ランクを分けて採用活動をしている企業をたくさん知っています。ただ、そのランク分けは必ずしも偏差値順ではありません。企業が長年の経験から「社との相性」を分析し、ランク分けしているケースが多いです。

一方で「学歴を見ても仕方ない」という風潮も確かに強くなってきています。それは、AO入試が登場した頃からです。大学が受験生集め、受験料徴収のスペシャルプランとして打ち出したAO入試は、「あの大学を出ていたらこれくらいのはできるだろう」という企業の見込みをことごとく裏切ります。

さらにもうひとつ、増えすぎた付属高校の存在も同様です。受験人口が減少する中、大学も受験生・学生確保に血眼です。その結果、より入学確度の高い学生が確保できる付属学校を次々と増やしています。その結果、同じく「あの大学を出ていたらこれくらいのことはできるだろう」が担保されにくくなってきています。

僕は一方で幼稚園や保育園の運営支援という仕事もしていますが、大学と幼稚園の両方を客観的に見て思うことは、大学は日本の教育機関最大の集金装置だということです。同じ学校法人でありながら、幼稚園は寄付を取りません（取れません）。

その後、年次が上がるに従って有名私立と冠が付く学校から寄付を集め出します。大学はその最高峰に位置します。教員（職員）の給与を見ても、施設の充実度を見ても、大学の金銭的優位性は明らかです。さらに日本の大学は集金した学生が来ないので。

多少の病気でもやって来る幼稚園保育園とはずいぶん違います。そう考えると、本来は大学も付属など増やしたくはないのではないかと思います。収益性が下がる上、手間だからです。ただ、最高学府の収益性を担保するには、ある程度の出血は必要で、どうせやるなら市場独占に向けて動き出そう。全国に増え続ける有名大学付属校を見ていると、そのような市場原理を感じざるを得ません。

話が脱線しました。いまどきの学歴信仰についてです。そのような事情から、企業はもはや大学の名前が担保する何かに期待はしていません。ただ、ではなぜ学歴信仰が今も続くのか？ それは、あと1年で大学を出るとは思えない、あまりに厳しい学生に数多く出会うからです。以前は「ポテンシャルが高い学生」を求め学歴を参考にしていました。しかし今は「せめて阻害要因にならないように」学歴を参考にしている面が、少なからずあるように思います。

たまげた大学生

「あまりに厳しい学生」と書いた続きで、こんな大学生がいました。アソブロック株式会社で新卒採用をしていたときの話です（今もしていますが、メディアを通じて公募するのは止めました）。社で行われた説明会に参加希望する学生から電話がかかってきました。たまたま僕が取り、いくつかの質問に答えた後、場所はどこですか？ と聞かれました。「ホームページを見ればわかるだろう」と思いましたが、駅名を言って簡単に説明し始めた途端「少し待ってもらえますか」と言われました。次にその学生は「ピツとなったら1分以内でお願いします」と言いました。

一瞬わけがわかりませんでした。程なく「ピツ」と耳元で音がし、僕は反射的に早口で1分以内の見事な順路説明をしました。最初、そのあまりのスムーズさにちょっと誇らしい気持になりましたが、そんなこと誇っている場合ではありません。学生は「ありがとうございます」と言って電話を切りました。

受話器を手に、ふつつつと怒りがこみ上げて来ました。幸い名前を聞きましたから、説明会で見つけてその無礼さを説教してやろうと思いました。しかし、彼は説明会に来ませんでした。録音がうまくいかなかったのでしょうか。こんなのはもはや笑い話ですが、企業の人事と話をしていると「うちなんてな」「そんなのマシや。うちんとはな」と次々とこの手の話は出てきます。

「そんな学生を相手に時間を割くほど暇ではない」というのが、人事の本音。そのリスクを極力減らすために参考にすることのひとつが、今日的な学歴の持つ力です。

日本の就職システムに三行半

知り合いの大学教員からこんな話を聞きま

した。「最近では日本をベースに就職活動をしていない学生が出てきた」。詳しく聞くと、上海やロンドン、ニューヨークといった場所で開催される就職フェアに積極的に参加すると言います。

これまでも海外留学生向けにそのような場はありました。しかし、それらはあくまで海外の大学に通う日本人向けのそれでした。今のケースは違います。現地での就労を前提に外国人採用を期待して日本企業が出展するフェアにわざわざ日本から参加しに行くのです。

彼らは採用されたら現地在住になることを了解しています。日本企業としても、コミュニケーションがスムーズですから検討の余地があります。もちろん、最低限の英語能力は必須です。学生側のメリットは、選考過程が明確で短いこととライバルが少ないことが挙げられます。

このような行動を起こせるのは、やはり女の子に多いと言います。それにもうひとつ、海外での就職には隠れたメリットがあるそうです。それは将来のパートナー探しに「はずれ」を引く可能性が低くなるということです。海外のいずれの都市に住むことになっても、出会いはその場で起こります。日本人がマイノリティですから、つるむことも多くなるでしょう。経済活性地に日本の企業が送り込む人材は「結婚前の若手有望株」がやはり多い。必然的に出会う人はそんな人、そしていずれ結婚も……。

男女に「はずれ」はないと言われたらその通りなのですが、先を見据えた貪欲さはアップレでした。僕は長く新卒のフィールドで仕事をしていますが、そのような発想は出てきませんでした。女子大生の柔軟な発想に、一本取られたと思いました。

外国人採用を早急に進める日本企業

一方で、国内での採用活動に外国人枠を設

ける企業も、大企業を中心に目に見えて増えてきました。その流れは加速を続け、ある大学職員は「最近では企業の中国人ニーズが減り、ベトナムとインドの優秀な学生を紹介してほしいと言われます」と話していました。ここで言う企業とは一部の大企業ですが、国外で戦える体制を早急に整えようとする日本企業の姿が垣間見えます。

ただ、残念ながら日本には、それらの国の優秀な学生はあまり留学してきません。高度経済成長期には世界の留学先人気ランキング上位常連だった日本も、今や勢いも魅力もない国との評価が定着しています。そのため、大学職員が海を渡り現地の高校に推薦枠の話を持ちかけても、その学校のトップ学生が送り込まれることはまずありません。

“中の上”くらいの子が推薦を受けて来日します。そのため、企業が求めるような人材をうまく送り出すシステムが確立されていません。これは大学の問題ではなく、もう少し大きな国の問題と捉えるべきだと思います。

そんな中、中国人だけは数が多いです。それは中国で大学を卒業しても就職先がないことを彼ら自身がよく理解しているからです。そのため日本での就職希望者も多く、それぞれは優秀なのですが、結果的に、中国からの留学生はもう飽和状態ということになりつつある現状です。

アソブロック株式会社代表、有現会社ea 代表、ホンブロック発行人。“環境に変化と刺激のものづくり”をモットーに幅広く活動している。立命館アジア太平洋大学非常勤教師(キャリア教育)。東京を会場に「団士郎家族理解ワークショップ」を隔月開催中(偶数月第二土曜日)。http://danasobu.com

心理療法が始まるまで

- コミュニティと病院で -

藤 信子

以前小学校でスクール・カウンセリングをしていた時のこと、不登校傾向のA君への対応を先生たちと相談していた。朝起きられないなどがあり、先生が起こしに家まで行くこともあった。「どうにかなりませんかねえ」と言われても、保護者との面接を「仕事で忙しいから」と言われ、なかなか設定できずにいる私も、いい案は浮かばない。B先生から「Cちゃんの時は、元気に学校に来るようになりましたよね」と言われ、なるほどそういう風に期待されているのか、先生たちにとってはA君もCちゃんも同じような「不登校傾向」に見えることもあるのだろう、ということに思い至った。Cちゃんの場合は学校に行きたくないという状態を保護者が心配されて、学校の近くのD診療所に相談に来られた。そこで私が保護者の相談を受ける中で、Cちゃんは元気に登校を再開したことが、先生の印象に残っていて、それを期待されているらしかった。

このエピソードに関しては、いろんな見方があるだろうが、ここでは「来談」に関する「モチベーション」という観点から見るのが、コミュニティでの臨床の特徴とも言えるのではないかと、思う。こ

の点が、他の専門家（もしかしたら、他の臨床の場の心理職も含め、精神保健の分野でも）には伝わっていないような感じがする。

この時先生に、Cちゃんの保護者は、何故か学校に行きたがらなくなった娘について心配し、診療所に相談に来られたからカウンセリングができたし、その効果もあったと思う。A君の保護者は、相談にこられるようには心配しておられないようだ、カウンセリング(心理療法)は、自分が困っていること、心配なことを相談しよう、という気持があること(モチベーション)が必要だし、普通にはその気持が強いと効果が高いと言われている、ということをお話したような記憶がある。

学校の先生たちにとって(そしてともすれば、一緒に考えるスクールカウンセラーにとっても)学習権の保障、友達との関係の大切さを学ぶことなど、学校に行くことが成長にとって大切なことだというのが、まずあるのだと思う。しかしよく言われるように、このような価値観は、ここ40年~50年くらいに出来上がってきたものなのである。その前は農繁期には子どもは畑や田んぼを手伝ったりす

ることが重要だったと聞く。日本における不登校（初めは「学校恐怖症」と言った）の調査の話をしてくださった精神科医の先生から聞いたのは、「学校恐怖症」ではない、不登校の生徒たちがいて、それは親の仕事を手伝っていた、ということだった。今でいうと「学習権の保障」がされていない、下手をすると abuse とも言われかねないことだけれど、当時はそんなことにはならなかった。そして多分、そんな生活が不幸だとは私たちには言えないだろう。

自分が困っていること、心配なこと（病気も含め）を自発的に相談する、ということは市民社会の成熟、個人としての意識と関連するものと考えられる。そのことを考えると、最近の子どもの「虐待」に関連するニュースに接する時に、この人（虐待をしたと言われる人）にとって、しんどさや不安を誰かに話すことに繋がらないのは、どんなことが起きていたのだろう、と思うのは、未だ「市民」の価値をどこかに信じている、中産階級（大体使っている言葉が古くて、若い人に伝わるかどうか）的個人主義と心理療法がどこかに結びついている発想なのか、とも思う。このあたりを心理学の個人主義化という人もいるが、個人と心理療法の問題を考えてもいい頃なのかと思う。そこで、「モチベーション」というか「動機付け」の観点を持ち出してみた。

この春から、うつ認知行動療法（CBT）が医師が行う場合は保険の請求ができるようになったことが新聞等で取り上げられたため、CBT に関する質問を統合失調症のご家族からされた。その時、印象に残っているのは「治せるんですね」ということばで、今回の CBT は統合失調症は対象ではないこと、また CBT はどっちかという、一緒に考えるものだと思います、と話した。病院に行く、というのは病気を治してもらう、という気持ち 依存

が大きいと思う。そこはどのような「モチベーション」となっているのだろう、と考える必要はあるだろう。そこがかみ合わないと CBT も心理療法も目標を共有できないままで始まりにくい。そのかみ合うまでが長い時間が必要な場合も多いような気がする。

保健所で難病と診断された方に、辛い気持ちをカウンセラーに聞いてもらいませんか、と勧めたところ、私は精神的な病気ではないので、カウンセリングはいらぬ、と断られたと保健師さんから聞いた。これは精神障害とカウンセリングに対する偏見だけれど、案外このような話は多い。自分の気持の辛さを他人にいうことは弱い人のすることだという雰囲気を感じることもある。

コミュニティや病院では、心理相談室などの場面と異なり、本人が必要だと感じていなくても、心理的な援助が必要な場合が生じてくる。必要な人が相談室まで来られないから、出かけていく、というスタンスが大事だけれど、そこで相談に関するモチベーションのないような人に対して、どのような援助の組み立てをしているのか、またできるのだろうか。

はじめに出した A 君の場合、今の私は保護者に学校に面談に来てください、とは言わないだろうと思う。A 君にとって学校が楽しいとはどういうことかを考えるかもしれない。

個人とそれを取りまく環境と、そして相談という名の援助と、モチベーションについて少し時間をかけながら考えていこうかと思う。

わたしでいき 面接の手順

岡田 隆介

児童精神科医

1 . 面接の入り口 ジョイニング

わたしは、広島市こども療育センターというところで子どもの精神科診療をしています。わたしの外来でもっとも多い相談は「障害」に関するものです。なかでも、発達障害に関連する相談は増加の一途をたどっています。以前は「学校不適應」やそれに関連した「いじめ」「乱暴」「ひきこもり」が中心だったのですが、最近はかなり減っています。初診・再診の予約が1～2ヶ月先になる精神科より、教育相談のほうが身近で充実しているせいではないかと思えます。このほか、児童相談所と連携して行う虐待関連相談・児童養護施設支援もあります。

こうしたなかで、どのような相談であっても援助を求めている人（以下、クライアント）は“不安・戸惑い”と“怒り・憤り”と“これまでの解決努力”と“相談ごとの自分なりの解釈（自説）”を抱えて来談することに気付かされます。通常、この四つ組みの主役は不安・戸惑いです。「この先、どうなるのだろう」といった先行きの不安だけでなく、担当者や相談のすすめ方への不安も大きいでしょう。

DV・虐待・非行・いじめ被害等では、「どうして自分がこんな目にあわなければならないのか」「のせいでこんなことになった」という怒り・憤りが

主役になることもあります。ですがよく聴いてみると、“怒り・憤り”も根っこの部分では“不安・戸惑い”とつながっており、表現の仕方が違うだけかもしれません。

四つ組みの残る二つ、解決努力と自説もしっかりくっついていきます。ほぼ例外なく、クライアントは援助を求めるまでに自分なりの解決努力を重ねていますが、それは自説をもとに組み立てられたものです。現在の無効な解決努力を効果的な別の策に変えようとして助言や指導をしても、すんなりと応じてもらえないのはそのせいです。解決努力は自説とセットで考えることを忘れてはいけません。

というわけで、クライアントの自説を聞かせてもらうことが重要な作業になります。ほとんどのクライアントは、援助者が自分の説に同意しそれに沿った解決策を示してくれるものと信じ、一刻も早く自説を聞いてほしいと願っています。ですが、クライアントの期待通りに自説を受け入れては新しい解決策につながっていきません（自説と解決努力はセットですから）。「新しい酒は新しい皮袋に」ということにはなりますが、自説はクライアントの拠り所ですからそう簡単に手放すことはできません。そんなわけで、クライアントの説明の聴き方と扱いが対人援助のキモとなります。

そのために、まず援助者はクライアントの不安・戸惑い、怒り・憤りをしっかり受け止めなければな

りません。その上で、解決努力をきちんとねざらいます。ジョイニングです。そうすることではじめて、過去から続く痛みをいまの苦しみに繋げた自説を「額縁（枠）に入れた絵物語」のように語ってくれます。その際、絵だけでなくそれを成立させている枠を見逃さないことが重要です。この枠は絵を引き立てるためのものではなく、そこに絵のテーマ（クライアントの生きる枠）が表わされているからです。

2 . 身体の相談の場合

四つ組みは、身体の相談でも同じです。たとえば、全身倦怠感がひどくて受診する場合、「入院を要するような病気だったらどうしよう」という不安・戸惑いと、「ずっと忙しくて過労気味だったせいに違いない」という自説と「ストレス解消、栄養摂取に気を配った」とする解決努力があるでしょう。

普通はうまく抑え込んでいますが、「よりによってどうしてこの時期に自分が」の怒り・憤りもあるはずです。患者さんはきっと「ずっと仕事が忙しく、無理をし続けたために疲労が蓄積し、ついに体調を崩すに至った」という絵を描き、その周囲には「会社も家庭も、自分が頑張らないとダメになる」という枠を持っているでしょう。それは、彼の体調のみならず生き方も縛っている枠組みのはずです。

医師は患者さんの話をひと通り聞いた後に、必要な検査を実施して診断を告げます。このとき、患者さんの自説と医師による「肝機能障害」という診断は一致しませんが、医師は「ただの疲れ」説をきっぱり否定します。自説を置き換えられた患者さんも、抵抗することなく受け入れるでしょう。それは科学的根拠を持つ専門家の見解だからです。医学援助モデルでは、サービスを提供する側と受ける側との間に実に潔い線が引かれています。

ただあえて言えば、「自分がいなければ～」の枠は基本的に手つかずです。もしも再発するとしたら、このあたりが問題になるかもしれません。

3 . 心の相談の場合

近隣住民からの通報で始まる虐待相談を例に考えてみましょう。この場合、主役は怒りです。家族はまず通告者への憤りを、ついで当の子どもへの怒りを表わします。それにていねいに耳を傾けていると、やがて暮らしむきの不安や子育ての混乱等を少しずつ口にします。怒りの受け止め・不安の受け入れ・解決努力のねざらいをしっかり行うことで、やっとクライアントの絵物語を聞くことができます。

よくあるのは「子どもの問題を解決するために手をあげた。学校や福祉があてにできないから、自分たちがこうやって努力している。それを責めるとはどうか。これは躰であり、親の義務である。殴るのは言うことを聞かないからであり、自分だってそうやって育てられてきた」という絵です。自説が解決努力を支え、結果的に虐待が持続するという構造になっています。

専門機関は「親自身の被虐待体験がその性格形成に影を落とし、虐待行為に結びついている」とか、「社会的な孤立や経済的な脆弱さが育児の混乱をより大きくしている」みたいな解釈をしますが、医学モデルと違ってその絵に家族を納得させて新たな対応へと導く力はさほど強くありません。ときには援助の手が同時に追及の手でもあったりして、両者の絵と枠組みは真っ向からぶつかります。心の領域では、専門性と当事者性は基本的に対等のように思われま

す。では、心の相談における専門性とはいったい何でしょう。わたしは、「言葉を介して相互に影響し合う関係のなかで、新しいものを生み出せること」だと思っています。まさに、科学的に証明できないという心の領域の弱みを強みに変えられる専門性です。ここでは、絵物語や枠組みを動かすのは科学ではなく言葉（による相互作用）なのです。

4 . 手立て

～クライアントの絵物語とその枠～

家族システムと同様に、援助の場にもシステムはあります。援助面接は、絵物語と枠をはさんだクライアントと援助者の相互作用によって展開します。クライアントと援助者がどのような語りをするか、

それによって援助の道筋は次のように分かります。

「*が問題*」とするクライアントの絵を援助者の枠で「*が問題*」とし、具体的に明日を語ってみせる。

ジョイニングがじゅうぶんになされた後、『わたしは、*でなく*××が問題だと思います』「ちょっと待って！それ、どういうこと？」というやりとりをします。この場合、援助者の『なぜなら～』以降がクライアントの腑に落ちなければ、相談が途切れることになりかねません。

これはクライアントの予想を超えた展開で、当然、緊張が高まります。とはいえ、問題と指摘した××がクライアントの興味や好奇心を呼び起こせば、高まっていた緊張は弛緩していきます。

「産まなきゃよかった。怒ったらいつも黙ってうつむくだけで、返事もしない。それで手が出てしまう。別の時に問いただすと、どうせ自分は要らない子だからとしか言わない。ほんと、憎たらしい。あの子は、生まれながら性格がゆがんでいる」

『そうでしたか、性格のせいだとずっと悩んでおられたのですか。性格が原因なら、根深い気がしますものね。でもね、こんなことを言ってもすぐには納得していただけないかもしれませんが、問題は彼の性格ではないと思います。いやもちろん、子育ての責任でもありません。これは心理テストにもでているのですが、実は彼の情報の受け方、処理の仕方は独特なんです。

たとえばね、先日のことは「いい加減にしなさいよ」から始まったじゃないですか。でも彼はね、この“いい加減”という意味がわからない。何をどうしてほしい、そう具体的に言われないとわからないんです。普通なら、意味はわからなくても雰囲気や察知しますよね。ところが、いわゆる空気なるものを読む力も弱いんです。

というのはね、一つのことを注意が向くとそれ以外が自動的に遮断されるんです。お母さんの「いい加減にしなさいよ」に意識が向くと、表情や空気や伝わるべきものが遮断されてしまうんでしょう。それで結局、場にそぐわない態度をとってしまうんです。

TVゲームしてる時もこの遮断が起きるから、お母さんの言葉を完全に無視し、叩かれて始めて気付くなんてことが起きます。

それから、言葉で言われたことを頭の中でムービーのように映像化して理解することが苦手です。それで先のイメージが持てず、言われていることの全体像が理解できません。ちょっと考えたらわかりそうな結末さえも予測できず、お母さんから見たらわざわざとしか思えないようなミスをやってしまうわけです。

また体の感覚も独特で、先日トイレを失敗して、叱られる前にパニックになったでしょ。あれは、自分の尿の生暖かさに耐えられなかったのだと考えられます。不思議でしょう？

さぞかし、たいへんな子育てだったことしょうね。戸惑いの連続だったに違いないと思います。ですが、彼にとっても世の中の仕組みはわかりにくいものなんです。実は、こういった特徴を前提とした子育てのコツを集めたものがあるのですが、いっしょに試してみませんか』

母親の絵の根底にあるのは、「この子が問題」です。また母親は、親や姉妹、つきあっている男性、前夫、近隣との薄い関係の中で安心・安全を感じて生きてきました。つまり、それが母親の枠組みです。ところが、子育てはそんな距離ではできません。それでもがき苦しんでいる、わたしはそう読み取りました。

この絵物語を「子ども（の性格）が問題」というベースで突き進むのは、正直キツイです。そこで子どもに備わっている「特質」に注目し、専門家然としてこちらの枠を持ち込みました。子どもに生まれながら発達障害的な特徴があったのか、あるいは虐待環境の中で発達に偏りが生まれたのか、それはわからないし、いまはどちらでもいいです。ねらいは、他人の援助を必要とする問題によって、家族の相互作用が変わることにあります。

この枠が母親の腑に落ちれば、新しい子育てに関連した心理教育的なプログラムに誘います。この手順を飛ばしてプログラムに誘っても、「*が問題*」が変わらなければ思うような成果は上がりません。

既にある強み・マシ・違いを繋ぐように質問を重ねるところから、クライアント自身が明日を描く

社会への不信・不安が根深く、通報者や近隣住民への怒りが自身の困りごとを凌駕している場合、のように“教える・変える”を軸にした相互作用は生まれにくいです。そこで、逆の“尋ねる・教わる”をやりとりの基本にします。これは中断しにくい対等の関係に近づくことを意味しており、力の上下関係を生きてきたクライアントには未知のコミュニケーションになるかもしれません。

クライアントの絵物語は、自分史に散らばる不運、不幸、許し難い他人、無力な自分などネガティブな点を強調しながら繋いでいます。その選択基準は、まさにクライアントの枠組みです。援助者は、クライアントの絵・枠をじっとながめます。そして数多くの過去の情報から、クライアントの枠から外れて意味を与えられずに見逃された点（エピソード）やクライアントの語りからすれば例外として無視されてきた点に興味をよめます。またいま起きていることの中で、いつもよりいくぶんマシに見える点やこれまでとは少し違って聞こえる点にも注意を向けます。こうした基準をもって集めた情報について、どうしてそんなことができたのか等、それらの間に脈絡が生まれるような質問をするわけです。

クライアント自身がそれらの点に意味を与え、自分の絵物語の中にはめ込んでいくと、「 が問題である」から「なんとか対処できている」へと移っていきます。

たとえば、
「相変わらずですよ。忙しいときに、わざわざ怒らせることをやるものだから手が出てしまう」

『掃除機の柄でポコポコですか・・・』

「いやゲーパンチだったけど」

『柄を使わなかったのは、何かわけがあったのですか。それに蹴りも控えられたんですよね』

『たまたま近くになかったから。蹴りは言われてみるまで気がつかなかった』

「その日は、わざわざ柄を探そうとはしなかったし、足も出なかった。いったい何が違っていたのでしょうか？」

『そんなこと、別に。めんどくさかったからかな』

「いや、それってすごいことじゃないですか。よく子どもの面倒をみるっていうでしょ、つまり子育ては面倒なものなんです。これまで、なんでもかんでもご自分でひっかぶっていたお母さんが、面倒だと思われるなんてすごく大きな変化だと思いますけど」

『そお？面倒っていいこと？』

「そう思います。面倒だと少し距離を置くでしょ。そうなれば、余裕ができて（＝母親が得意とする距離）子どものことが見えてくると思います。面倒こそが、楽な子育ての入り口じゃないでしょうか。そんな気持ちになられていたなんて、実に驚きました。それって意識的に工夫されたことですか。それとも心境の変化ですか」

『別に、思い当たることはないけど』

「じゃあ、今後、カチンとくる場面にぶちあたったら、なんでここで掃除機の柄を探さないんだとか、なんでしかり飛ばすことが面倒なんだろって、その場で観察してもらえませんか？それこそ面倒かもしれないけど、ぜひ教わりたいんです」

『はあ、まあやってみるけど。なんか、先生の言うことを真に受けたら、このままでいいかもって思ってしまう』

「ほんとですか、実はわたしも、最近、同じことを思ってるんですよ」

『もうひとつ、先生。あの子のこだわりはなんかなるもの？気に入ると手放さないし、気に入らなければ受け付けない、もうあきれほど頑固で』

「はい。でも、そのこだわりは反抗とは別物で、わがままとも違うんですよ。それは、子どもさん自身もどうにもできないものなんです。当面、こだわりは指導の対象にしないことにしましょう、危ないことでない限り。将来的には、むしろそのこだわりを生かす方向を考えればいいと思います」

5 . 二つの道筋

の「クライアントが を問題と語る枠組みを、援助者が別の枠組みで が問題と語る」は、援助者のデザインにそった心理教育的な変える面接と言えます。

一方、 の「クライアントの絵物語や枠組のなかに、既にある強み、マシ、違いを援助者の文脈で語る」は、解決志向的な変わる面接です。そこだけを見ると対照的といえるでしょうが、 で援助者が代わりの枠を持ち出したのも でクライアントのなかに既に特別な点があることに気付くのも、面接の場でのやりとりから生まれたものです。

また援助者は、 で示した「××」が被虐待に直結していると確信していたのではないし、 でとりあげたマシや違いに本当に意味があると自信を持って言い切ったのでもありません。援助者の思いつきに過ぎなくても、クライアントの腑に落ちるところから大きな意味と価値を持つといった相互作用も、両方に共通する重要な点です。

ここで、クライアントの腑に落ちやすさについて考えてみましょう。 で援助者から「 が問題」を否定されたとき、クライアントの緊張は高まります。ところが、「実は××が・・・」に惹かれると緊張は一気に弛緩します。そこに生まれる落差が大きいほど、“腑落ち”につながりやすい気がします。

のクライアントには、「どうして自分が変わらなければならないのか」という意地があり、自分が責められるに違いないとかまえています。そこに「変える必要はありません、もう既に変わっています」だから、予想とは大きな落差があったことでしょう。システムはこうした落差からエネルギーを生み出すと考えることも可能ではないでしょうか。

また、「なんとかできるかもしれない」と変化の可能性を感じてもらうことも腑に落ちる上では重要です。展望が開けて希望がわいてくるには、そこに具体性が含まれていなければなりません。 の心理教育的なプラン、 の既にあるという点がそれにあたるでしょう。

7 . おわりに

「こうならないかなあ」は夢であり、「こうなりたい」は願望です。そんなものでは、変化をもたらすには力不足です。それに対し、「そうなるかもしれない」は近未来像です。これまでお話ししてきた の道筋は、それを指すものでした。さらに、「既に、

そうなれてるのかも」は現在の手応えです。 の道筋は、まさにそれを意味しています。

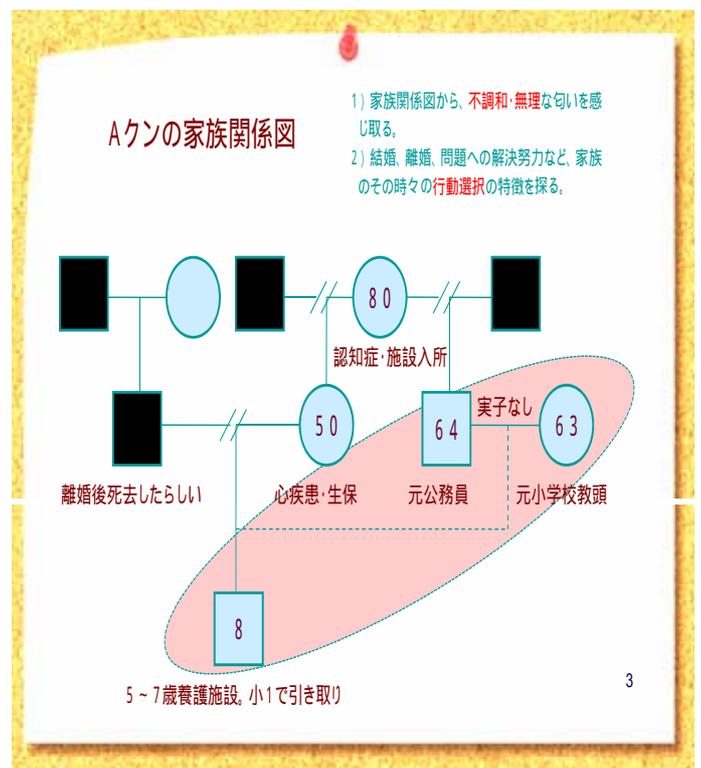
わたしは、対人援助とはクライアントが具体的な希望や手応えを持つための援助だと考えています。なぜなら、そこから生まれるパワーほど力強く生きる枠組を変えたり、絵物語を書き換えるものはないと信じるからです。

ケース カンファレンス

*プライバシー保護のため、症例には大幅に手を入れて創っています。

(A) 家族関係図から

- 1) 家族関係図から、不調和・無理な匂いを感じ取る。
- 2) 結婚、離婚、問題への解決努力など、家族のその時々^のの行動選択の特徴を探る。



(B) 家族のストーリーから そこに潜む強みを見つける

1) 変化や解決以前に、まずクライアントをエンパワー(「来てよかった」「聴いてもらってよかった」「気分が楽になった」)。

2) そのために、家族の語りから家族の強み(リソース、既に起きてる変化等)にこだわる。

3) そこから、クライアント自身、クライアントの過去・家族、世間に対する肯定感をベースにした相互性が生まれる。

クライアントが訴える表の主訴以外に裏の主訴があるかもしれないことを念頭に。

1. 概要

児相に紹介されてやってきたのは、現在A男を養育している叔父夫婦だった。一緒に住むようになって半年たったが、「偏食が激しく、嫌いなものを机の下やカーペットの下に隠す」、「腹が立つと、衣類をハサミで切り刻む」、「夕食を残し、夜、冷蔵庫の残り物を漁る」、「家にあるものが気に入ったら平気で盗る」、「目を離すとすぐ店のものを盗り、叱っても平気な顔をしている」、「近所の声をかけてくれる人に、異様に馴れ馴れしくする」、「小動物いじめをする」、「相手に無関係に、一方的にしゃべり続ける」、「叱られているときに、ニヤッと笑う」、「注意されたことをすぐ繰り返す」等で困っているという相談であった。

叔父夫婦は、父親に殴られ母親に見捨てられ、施設で十分な躰をされていないA男に、責任をもって躰をしようとしてきた。にもかかわらずA男の行動はますますひどくなっており、これをどのように理解したらいいかを知りたいということであった。

叔母は、夫の異父妹の気の毒な子どもということで、5歳の頃から施設からの外泊を引き受けていたのだが、当時から子どもらしい生き生きした感情表現が少なく、なにかを共感しあうことが難しかったと振り返る。

A男は横で話を聞きながら、叔父叔母から確認を求められるたびに黙ってうなずいていた。問うと叔父夫婦のことが大好きと答え、無邪気にずっとこの家で暮らしたいと言う。ここでの話が自分の行く末に関わっていることはまったく理解できていないようで、それがまた叔父夫婦を困惑させていた。

学校からの情報では、A男が父親からの暴力や母親に見捨てられたことをよく口にする、特別支

援教育の対象で校内では特に問題がないことがわかった。

2. A男の生育史

実母は心臓が弱く、高校卒業後一人で生活していたが、40歳を過ぎて同じ高校の同級生だった実父と出会い、同棲し、妊娠して結婚。42歳の時にA男を生んだ。実父はアルコール依存のうえ就労が不安定で、結婚当初よりDVがあった。A男は乳児期から罵声を浴び、幼児期には身体的暴力を受けていた。やがて、毎日のように母子に暴力をふるうようになったため、母親は5歳のA男を連れて家を出た。友人宅に身を寄せたものの、その翌日、母親は何も言わず行方をくらませた。

その友人から連絡を受け、児相はA男を保護した。母親とは連絡が取れず、父親の同意によりA男は児童養護施設に措置された(後に離婚し、親権者は母親となる)。施設では、他児の食べ物を勝手に食べたり自分の持ち物以外でも無断で使うということが頻発した。注意されると逆ギレしパニック状態になるということで、施設は処遇に困っていた。

入所して2年たち少し落ち着いてきた頃、それまで面会や外泊をしていた実母の異父兄夫婦が実母を伴って児相を訪れ、A男を引き取りたいと申し出た。児相は状況を調査し、措置を解除した。

なお本児は、知的には境界域で学力は低かった。

(C) 面接の指針

児童相談所の紹介で、叔父夫婦がA男といっしょにやってきた。退職後は農業をしており、実子はいない。将来的にはA男と養子縁組をして跡継ぎにするつもりで、実母も了解しているとのことであった。

叔父は、A男の行動を理解したい、それがわからないと心も通じないと訴える。叔母は、虐待を受けて育ったり施設で大きくなったりしたことが原因なのか、躰不足だと思って厳しく接してきたことが間違いだったのかと尋ねる。そしてA男に、「わざとおじさんたちを困らせよう、怒らせようとしているのか?」と問いただす。A男は、意味がわからないといった表情で反応しない。

叔父夫婦の仮説は、「A男と心が通じ合っていないのは、虐待生活や施設生活による躰不足とA男を十

分に理解できていないことが原因だ」であった。この仮説の根幹をなしているのは、A男の行動が「わざと」という受け止めである。この「わざと」を否定すると、理解に到達することは困難になると感じた。そこで、わざとをメタファーでくるで言い換えてみた。

T h「唐突な質問なんですけど、お風呂にどんな入り方をされますか？ボクは胸の辺りまで少しぬるめのお湯を張って、ゆったり入るのが好きなんですけど」
叔母「同じですね、わたしたち、血圧が高いと言われているので・・・」

T h「近頃は、だいたいみなさん、そうされますね。それが一番気持ちいいですものね。ところが、みんなそうかと言ったらそんなことはありません。たとえば、A男くんなんか、全然違います」

叔母「え？A男の入浴をご存じなんですか？」

T h「いえ、すみません。普段の生活をお風呂にたとえた話なんですけど、A男くんは“わざわざ熱いお湯、または思いっきり冷たい水を、口のすぐ下まで張って入っている”じゃないかと思われるのです。われわれ流の風呂なんて、ぬるくて何も感じないんじゃないでしょうか。熱過ぎたり冷た過ぎる刺激、呼吸が苦しくなるほどの圧迫感、それがないと入った気がしないわけですよ、言ってみれば。つまり、彼は風呂に緊張の緩和ではなく緊張の高まりを求めているのじゃないかと」

叔父「それは、生活の刺激ってことですか？」

T h「その通りです。彼は、わざとお風呂に服を着たままで入ってる。いや、鎧と言った方がいいかな。ですから、強烈な熱さや冷たさでも肌に達する頃にはちょうどいいぬるさになってるのでしょうかね」

叔母「虐待を受けたら、鎧でもまとわないととても耐えられなかったでしょうね」

T h「おっしゃるとおりです。鎧のおかげで家でも施設でも生きてこれたんでしょう。そしてそれを、まだ手放せないわけです。いまま脱いでませんよね。日々の注意・叱責・トラブルは、言ってみれば熱湯であり氷水なわけです。それを、わざわざ口の高さまで満たしている」

叔父「つまり、わざと叱られることをするのは、そういう刺激しか心に到達しないから、ですか??」

T h「わたしにはそう見えるんです。どうしたらわ

ざとアップアップするまでお湯をはるようなことをしなくなるかが問題なのではなく、どうやったら鎧を脱いで生きていくか、それがポイントではないでしょうか。いや、でも、ほんとにいまも常に鎧を着ているのかなあ。もしかしたら、そっと脱いでいる時間もあるのかもしれない。いかがですか？」

叔父「それは、ぬるいお湯を味わっているときがあるはずだと言う意味ですか？」

T h「そうですね。目立たないかもしれないけど、日々の何気ない普通の出来事を味わっている瞬間、ないですかね？」

叔母「何気ない普通ですか・・・」

T h「ええ、一人でなにげなく過ごしているときとか・・・」

叔父「熱湯ばかり見ていたので、そんなこと思いもしませんでした。探してみます」

・・・・・・・・・・・・・・・・

T h「子どもらしい生き生きとした感情が感じられない、とおっしゃってましたよね？」

叔母「そうなんです。ほめられても怒られても、なんか淡々としているんですよ。子どもらしくないというか。ほら、いまもそんな感じでしょ」

T h「歓びと悦び、哀しみと悲しみ、怒りと憤り、楽しみと愉しみ、照れと恥じらい、誇りと自慢、こんなものを表現しきるには24色の色鉛筆でも足りないかもしれないですよ。でも彼の幼児期の生活は、恐怖と怒りが“有るか無いか”の世界でしたでしょうから、白黒2色しか使わなかったんじゃないでしょうか。“生き生きとした色彩”なんて意味がわからないでしょ」

叔母「必要なかったということですか・・・」

T h「さきほど淡々としているとおっしゃいましたが、それは白黒以外の色使いじゃないですか。淡い水色くらいかな。少なくとも水墨画のような枯れた世界とは違いますよね」

叔母「なるほど、じゃあ、私に叱られて黙ってうつむいているときなんかは赤ですか？」

T h「たしかに。じゃあ、ぬるいお湯につかっているときなんかは、何色でしょう？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

叔母「この先、叱ってはいけません。そういうことなんでしょうか？」

T h 「いいえ、ちょっと違います。保護者として譲れない線というのは、やっぱりあると思います。その線引きを考えてみましょう。法律違反と自分や他人を傷けること、これは絶対に譲れませんね、線の内側です」

叔父「ええ、そうですね」

T h 「次に不適切な行為、たとえばマナー違反とか常識に反する行いですが、これは微妙です。わたしとしては、これは線の外側に置けないかと」

叔父「でも、わたしらはそれが見逃せなくて・・・」

T h 「いえ、見逃すのではなく、逆に見てあげないのです。熱湯や氷水を口の高さまではるという話をしましたよね、わざわざそんなことをするのは、基本的に見せる、見てもらうための行為で、気づいてもらって初めて両者の間に緊張が高まるわけです。それを見てあげないのは、不適切な行動を認めたことにはならないし、彼の作戦にのったことにもなりません」

叔父「わざとのし甲斐がないということですか。仮に見ないようにしたらどうなりますか？」

T h 「とりあえず、もっとがんばって見せようとするでしょうね。でもね、他の場面を見ていたら、“何だ、そういうことか”と。つまり、わざわざお湯をいっぱいにしなくても、胸の高さのぬるめのお湯を見てくれるのなら、それでじゅうぶんじゃないかと。つまり、日々の何気ない普通の出来事でやりとりをするわけです。緊張感のある生活よりも緩い生活で付き合っていくってことなんです」

叔父「さっき言われた不適切な行為というのが、あの子の風呂の入り方だということですか」

T h 「はい。まさにその通りです」

・・・・・・・・・・

叔父「私らは、何をめざして育てればいいのでしょうか？」

T h 「私は、A男くんがこの家において、自分がどれほど役に立っているか、自分がどのくらい当役にされているか、を実感できるということだと思います。彼が生家や施設で手にすることができなかったのは、まさにこれだと思うんですね。信頼感とか安全感は、こうした貢献感を手にすることから生まれると思います」

面接は、A男の理解、生き生きとした感情交流、今後の目標に関する家族の疑問に答えてほしいという流れである。だが、求められるまま家族の考えに上書きしても、おそらくそれは受け入れてもらえない。そこで、援助者のメタファーでくるんだ答えを提供した。そうすると、あとは心理教育的にこちらのペースで面接は運ばれていった。

映画
の中の
子ども
たち

第1回 「プレシャス」

- 性的虐待を乗り越えて生きる -

川崎 二三彦

(子どもの虹情報研修センター)

世間にはあまり知られていないが、マスコミ問題に鋭いメスを入れる気骨ある雑誌「放送レポート」は、私が愛読し始めてからでもすでに20年以上になる。この中で真っ先に読むのが、長らく連載されている「映画の中のマスコミ」。筆者の加藤久晴氏は映画におもねることもなく、この雑誌らしい切り口で批評を続けている。だったらこんなふうにして「子ども」をキーワードにした映画評を、誰かどこかで書いてくてもいいのにな、と常々思っていたところへ、Web マガジン企画の案内をいただいた。

「映画は好きでよく観ているが、まともな映画評が書けるわけではないし、最近は観てもすぐに中身を忘れてしまう。だが、そんな自分を戒める意味もこめて、試しに『映画の中の子どもたち』とでも題して何か書き綴ってみようかな」、一瞬、こんな気持ちが私の脳裏を掠めたのが(つまり読者の皆さんの)運の尽き、かも…。

この映画、まず何と言っても主演を張った新人女優ガボレイ・シディベの存在感に、いや元へ。“存在感”じゃなくて“存在自体”に誰しもが圧倒されてしまうだろう。何しろスクリーンを一人で占領するかのようなボリューム。原作小説でも、主人公のクレアリス・プレシャス・ジョーンズは、90キロまでしか計れない体重計の針が振り切れる重量があるという設定だから、まさに本作品に打ってつけの俳優



なのだ。おそらく彼女でなければずい

ぶん違った印象の映画になったのではないだろうか。観た映画をすぐに忘れてしまう私も、多分この俳優のことは忘れないと思う。

それはさておき、観ていてこちらが息苦しくなる映画だった。小説の原題は“Push”というのだけれど、この言葉、出産シーンでは「いきむ」という意味で使われているらしい。実はプレシャスは、わずか12歳で自分の父親の子を孕み、出産し、さらに16歳になってから、この父の2人目の子どもを妊娠しているのである。そして、おおかたの予想どおり彼女の母が彼女を守るわけではない。むしろ逆だ。

「プレシャス・ジョーンズ、よくも私の亭主とファックしてくれたね、この汚らしい淫売娘！」

母は毒つき、児童福祉業務に携わった者が多かれ少なかれ経験するように、役所が支給する娘とその子どもの養育費を

当て込んで生活している。

「さいしょは、あたしのでえしゅをぬすんで！　こんどは、手当をだいなしにして！」

俳優の顔も名前も覚えられない私は、母親役を演じたモニックについても全然知らなかったのだけれど、その体軀を主役のガボレイ・シディベと思わず見比べてしまった。彼女に勝るとも劣らぬ堂々たる姿で、憎々しくかつ哀しい母親を熱演、好演。児童相談所で出会った何人かの母親の姿が次々とダブってしまうのは、決して私一人ではあるまい。モニックはもともとはコメディアンらしいが、本作で主演女優賞や助演女優賞を数多く獲得したこの二人が、映画に独特の雰囲気を出している。



ところで、児童福祉司の経験を持つ私にとって見過ごせないシーンがあった。ある日の面接で、ソーシャルワーカーが席を立ったわずかな隙に、プレシャスが自分のケース記録を持ち出すのである。

「ファイルを盗むというのは……」

「レイン先生、あのファイルを盗まなかったら、あたし、自分がどんな問題をかかえているか、わかんなかったよ！」

このシーンを観ていて血液がかすかに逆流するのを意識しながら、私たちの間でも知らず知らずのうちに似たようなことが生じていないか気になってしまった。ただしファイル管理の問題ではない。長年の勤務の間に児童記録票紛失という

問題の解決を迫られたことがなかったわけではないが、そうではなくて、相談を受けている側が子どもや保護者をそっこのけにして勝手に方針を決めたり、あるいは決めた方針をまともに説明せずに済ませていたりしてはいないかということだ。

幼年期から続く実父による性的虐待だけでなく、実母のひどい仕打ちや、さらに過酷な事実を引き受けねばならなかったプレシャス。現実世界で本当にこんなことがあるのだろうか、と一瞬目を背けたくなるけれど、原作者のサファイアは、映画の舞台となったニューヨークハーレムで10年間、若者たちの教育に携わっていたという。

「教えているときに会った子たちの中には、HIVに感染した子、父親に虐待されていた子、文盲の子、様々な状況の子供がいました。それらの子たちが集められて“プレシャス”という一人の少女になりました」

インタビューで彼女はこう語っているが、私たちが生きるこの社会の一断面を、紛れもなく鋭く切り取った映画だと言える。

とはいえ本作は、単に現実の厳しさ、酷薄の運命を殊更のように見せつけるだけの映画ではない。というのも、アルファベットすら読めなかったプレシャスが、自らの意思で通うことになった代替学校の教師と生徒たちとの生活を通じ、自らの人生を自らの足で歩もうとする姿を中心軸に据えているからである。見終わって希望を感じることのできる映画、それが「プレシャス」だ。

(鑑賞データ：2010/04/24 TOHO シネマズ二条)

子どもと家族と学校と

①『アルバイト20時間分のカウンセリング料金』

中島 弘美

CON カウンセリングオフィス中島

急いでカウンセリングをお願いします

12月に入り、寒くなったと感じる日の朝、私立高校の教育相談担当教員から、「大急ぎで面接をしてもらいたい家族がいるのです」と電話が入った。

急いでいるのは、子どもが危機的な状態にあるというわけではない。卒業するためには、今のままでは規定出席日数に足らないので、カウンセリングを受けて、何とか再登校に結びつけたい、というのがその理由だった。

高校には専任のカウンセリング担当者がいるものの、本人が、男性のカウンセラーだと話しづらく、校内に設けられたカウンセリング室に行けるぐらいなら、教室に入れる、なので学校のカウンセリングは無理と話している。

急いでいる事情がつかめてきた。

オフィスには、学校からの紹介で家族が相談に訪れることが多いが、カウンセリングを効果的に進めるためには、紹介先である学校との関係が、大きく影響をする。

学校から厄介者扱いをされて相談に来られる場合や、家族に問題があるからカ



ウンセリングに行くようにと言われ、納得できない様子で、来られることもある。

今回の先生は過去に何度も紹介の経緯があり、情報交換をしたり、ともに方針を立てたりして、子どもと家族を支援してきた、いわば協力的な学校組織だ。

無理な要求をする先生ではないこともわかっている。それに、学校内の調整役やまとめ役、一定の権限を持っているキーマンでもある。当オフィスと紹介先の高校はとても良好な関係であると考えられる。

関係者の連携は築けているが、家族に会ってみたいとわからないところもあると思いながら、

「それではできるだけ近いうちに来ていただけるよう、こちら準備しておきます」と返事をした。

引き続き、母親から予約希望の電話が入り、さっそく、家族と会うことになった。

ほっそり娘の高校三年生と大柄な母

母親とともに高校三年生のマナミが面接にやってきました。家族面接は父親の参加をお願いすることがあるが、来所できる人からまずは来てもらおうとの判断から、母と娘の二人の来所となった。

ゆっくりした動作でマナミが面接室に入ってきた。手足は細く、さらさらの長い髪。色は白い。一方、母親は身長が高く大きい、そして日焼けしている。体を小さく丸めながら椅子に座った。

「学校の先生からのご紹介で来られたのですね」面接が始まった。

卒業するためには欠席は一日も認められず、新学期からは休まずに登校しなければならないという。その内容は厳しい条件だった。

「マナミさん、よくお越しいただきました。お母

さんから少し様子はいかがでした。これからのことなのだけど、できる、できないは別にして、どうなったら良いなど、思っていますか？」

「……卒業したい」

しばらく間があったものの、しっかりとした言葉が返ってきた。

「卒業したい、そう、卒業したいよね。うん。卒業したあとは？どうしたいと思っているのかな？」

「卒業できないかもって思っていたから、あんまり考えていない。前は、大学に行こうと思っていた。今は、コンピューターの専門学校に行けたらいいかなあ。よくわからない。探してないけど」

とまどいながらも、専門学校の話をしていると、少しずつマナミの表情が和らいできた。

「先日の個人懇談のときは、てっきり留年の言い渡しだと、覚悟をして学校に行きました。でも、このあとすべて登校したら、卒業できる可能性があるといわれて、それで……」と母。

「それでここにも来ました」と今度はマナミから話す。

厳しい条件を示されながらも、この時期に学校からカウンセリングをすすめられるということは、卒業を踏まえてのことかもしれないが、勝手な解釈はできない。

どちらにしても、高校では卒業できるかどうかの話ばかりで、その先については何も描かれていない。留年することになったとしても卒業ができるとしても、これからどうなりたいのかの話を投げかけることで、将来を考え、一歩踏み出せる機会になるはず。

マナミの身にこれまでどんなことがあったのかの『過去調べ』ではなく、これからどうなりたいのか『未来を見つめて』の話を中心に面接が進むことになった。

つねづね面接では、『なんで？』という言葉で、できるだけ使わないようにしている。この問いかけは人を責める言葉になりかねないからだ。『なんで、こんな状況になったのですか？』の質問は、まるで本人にすべての原因を押しつけるように感じるからだ。なんでといわれても困るばかりだ。なんで？よりもどうなりたい？の問いかけをする。

そして、年明けの始業式から毎日学校に行くため

はどんなことをしたらいいのか、周囲の人が整えることのできる、準備を母親と考えてみた。

毎日、お父さんが学校まで車で送る。最初は、少しの時間だけ登校して慣らししていく、担任教師にお願いをして、冬休みの間に登校練習をする。などの提案が挙げられた。

クラブ顧問の先生との衝突、選択科目の失敗など、さらっとではあるが学校関係者からの情報がカウンセラーの手元にある。くわしくたずねたい点があるが、あまりにも時間がない。

あと一日でも休んだら留年と切羽詰まっている今を『休まずに登校できたら次の進路へつながる』という見方に置き換えると少し柔らかく受けとめられるだろう。今はまだ彼女は何も失っていない。

幸い、この高校との取り決めで、カウンセリングに通った日の報告書を提出すれば、その日は、公欠とみなされることになっている。このように不登校状態にある生徒への支援策もこの私立高校は整っている。

さて、面接も終盤。

「では、マナミさんは、卒業したらどの学校に進みたいのかも一度資料を調べておいて下さい。次に来られた時は進路の話をしましょう。マナミさんがお母さんといっしょに来られて面接をしたと私は学校に連絡しておきます」

マナミの顔はにこやかだった。

続いて、回目の面接予約の日にちを決めるため、マナミと母親が打ち合わせをした。

「お母さんはいつでも良いの？」

「いいよ。マナちゃんは、学校に行った後でもここに来られる？」

「うん。大丈夫。お母さんは晩ごはんの用意はどうするの？」

「晩ごはんはお店で何かおかずを買ったらいいから、それでいいよ」

「ふーん」

比較的すんなりと次回の面接日が決まった。もう一度、日にちと時間を確認して面接の費用を受け取り、領収書を渡す。

相談に来られる家族の多くは、カウンセリング費用を封筒などに入れて準備し、支払い時は封筒ごと手渡されることが多い。が、マナミの母はかばんの

紙袋から出した現金を無造作にテーブルに置き、おつりと領収書を受け取った。

マナミは傍らでその様子をじっと目で追っていた。彼女の目前で、面接費用の受け取りをしてみずくなかったかな？と、気になりながらも初回面接は終了。

学校の男性カウンセラーに会ったときは、話さなかったらしいが、面接室でマナミは自分のこれからの希望を話した。

繊細な感じの娘さんと大柄でのんびりした印象のお母さん。次の予約決めるときは、もしかしたらマナミの方が母親よりも、気まわりができるような様子もあった。

次の面接につながりそうだ。この流れが続けば良いなど、そう思いながら二人を見送った。

面接前日「キャンセルしたいのです」

二回目の面接予定日の前日、マナミの母から電話があった。面接をキャンセルしたいという内容だった。母親の話すキャンセルのわけはマナミだった。

「これから毎日学校に行くから、もうカウンセリングには行かなくていい。面接にお金がかかるのだったら、必要ない」と、マナミが言っているという。

「マナミはカウンセリングに費用がかかることを知らなかったのです。一度、行かないと、言い出したら、きかないと思います。本人に黙って私だけが通ってもいいのですが、そのようなことも、嫌がりますので」と遠慮がちに話す。

経済的に難しい事情があるわけではないようだが、マナミは公立高校の受験に失敗し、私立に通うことになったのも、親に負担をかけて申し訳ないと考えている。そのようなことも母から伝えられた。

経済的なことに敏感なのには、改めてわけがあった。学校を欠席するようになってから、高校には内緒で、週に3回程度パン屋のアルバイトをしていた。そこで働くうちにお金の大切さを知ったようだという。パン屋で働く時の彼女の時給は750円だった。

つまり1回のカウンセリング料金の15000円は、彼女のアルバイト20時間分に相当する額なのだ。

アルバイトで稼ぐことができる元気があれば、それほど心配ないのかもしれないと思いながらも、こ

のあたりの気配りパターンが生活の中にいろいろと存在しているかも、と考えた。

経済的な自立に関する受けとめ方は、ひとそれぞれだ。家族の事情もあるだろう。マナミができれば親に迷惑をかけたくないと思っているなら、今後、母親ひとりで来所することを強くすすめるのはやめよう。後に引けない土壇場の中で、何か得るものがあり、力が湧いてくることもあるだろう。キャンセルについて家族の意向に従うことにした。

学校にその旨を伝えた。

マナミは新学期から二日間の欠席があったものの、そのあとは、全て登校していると状況がわかった。

登校できている！

さらに、これまで、高校側としては、卒業が明確でない時点で進路の話は持ち出せなかったが、カウンセリングを受けたあと「もしも卒業できるのなら専門学校に通いたい」と家族からの申し出があったと、進路希望に関する動きの情報も入ってきた。

母と娘がアクションを起こしている！

春、専門学校に進学したマナミ

4月、高校の担当者から新年度のあいさつとともに結果報告の電話が入った。

マナミは同級生よりもやや遅れて、三月末に卒業を迎え、春から専門学校に通っている。

「もともと、母さんがのんびりした人で、ぼくとつというか、かまわない人でした。でも、あのお母さんがカウンセリングに行ったり、専門学校の見学会に行ったり、それも娘さんの希望を確認しながら、そのあたりが良かったのだでしょうね。もちろん、マナミはラストかなり努力したと思いますよ」

母と娘の行動の呼吸が合ってきたのだろう。家族が考えて、前に進むことができ、それがひとつの流れになった。

彼女の進む専門学校は、高度な内容で授業数も多く、ついていくことはたやすくはないし、マナミのこれからの学校生活も、心配なく過ごせるとは言い切れない。しかし、『ラストスパート再登校』の経験が家族にとって、大きな意味を持つことは確かだろう。

螻螂の斧

—社会システム変化への介入—

Part

1990年児童相談所内外事情 第一回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

対人援助の日常的実践には二つあると思っている。一つは直接の援助。そしてもう一つは援助が実施されている枠組への支援である。私は昔から、どちらかという、枠組みへの変化処方に関心が強かった。

児童相談所で仕事をしていた頃、外部の人たちがいろいろ言うのを聞いて、心外な思いがいつもあった。「内実(システム)を知りもしないで、勝手なこと言うんじゃないよ!」と思っていた。単独の項目にしか関心のない人のたわごとが、システム変化に成果を上げることなどないと思っていた。そんなわけで、研究者一群も、それに依存的に近づいてゆく行政機関も好きになれなかった。現場にしながら、なぜ自分たちで考えないで、他所の人間に頼るのか!といささか、意地っ張り気味にエネルギーを注ぎ込んでいた。

しかし、丁寧に時間をかけた取り組みだからといっても、理解しようとする人は僅かしかないなんて事態はしょっちゅう起きていた。逆に、そんな無茶苦茶な...と思うような抗いがたい乱暴な潮流が生まれることも多々あった。それも社会システムと呼ぶのだと思って諦めていたところもあった。

児童相談所外部の人間になって長い時間が過ぎた。今何を言っても、かつて私のように、「昨今の兎相の内実を知りもしないで、勝手なこと言うんじゃないよ!」と呟く人が少なくないに違いない。

だからここでは外からの話ではなく、内からの話を書きたいと思う。ただ、現職ではないので今の話ではない。「昔話だったら何でも言える。歴史や記憶はいつも、都合良く改ざんされるものだ」と即座につっこむ人があるかもしれない。それは承知の上で、1990年の日記を取り出してみた。

二十年前である。キーボード物を持つようになって、頻繁に書き込みをはじめたのが、その三、四年前(まだワープロだった)。そして今に至るまでの全日誌が、私のノートPCのハードディスクに存在する。

その記述の中からピックアップしたものを、今の視点と言葉で振り返ってみようと思う。そうすれば今昔がどのように同じで、また違うのか、明らかになることもあるに違いない。近い過去ではあるが、温故知新の芽も見つかるかもしれない。

Part では児童相談所が対象である。予定としてpart では、より大きな社会システムへの介入経過を述べてゆくつもりだ。理念や意見ではなく、目論見を具体化したことを定義したり、現時点での検証を加えたりできればと思う。

社会の変化は常に起きている。できることなら望ましい変化であって欲しいと思う。しかしそれが偶然の幸運でもたらされることは稀だ。放っておくと不運は簡単に届く。幸運が届いたところには、それを引き寄せた取り組み経過があるものだ。ただそれが因果で結ばれていないことも多いから、「どうしてだろう?」「不思議だね」なんて言うのである。物事には訳がある。そしてそれは因果関係で繋がっているとは限らない。

ピックアップした箱線内の記述は1990年の日誌からのもので、加筆修正はしていない。その後の記述は今の私の論評である。

螻螂(とうろう)はカマキリの漢名。自分の力の弱さをかえりみず、敵に刃向かうことのたとえを、螻螂の斧という。

1990

1 月

1/19-20 FRI-SAT

児童福祉施設中堅職員研修第二期4回目。

いきなりタイトルだけしか書いていない。この年の初めから、全日記述の業務日誌を書き始めたのだが、元旦からは始まっていない。思い立ったのが年明けしてしばらくしてからだったのだろう。最初の記述がこれだ。

京都府内の児童福祉施設で働く中堅職員向けに、少人数の一年を通じた継続研修を実施していた。初年度(前年)には報告集「はじめの8人」も出した。(右)

プログラムの内容は、「ゲシュタルトセラピー(日高正宏)」、「アドラー心理学(萩昌子)」、「家族療法(早樫一男・団士郎)」、「ポディーワーク(松井洋子)」、「応答構成トレーニング(団士郎)」、「エンカウンターグループ(川崎二三彦)」等。

当時、最先端の自己理解、他者理解、援助技法だと考えていたものの中心にいた人たちを講師に招いて、施設で働き始めて十年以上というベテランの心身共のバージョンアップを図った。

当時、施設問題というと、措置している子ども達が起こした事件や、対職員問題があがって来るのが定番だった。そしてたまたま全国のどこかで、新聞沙汰になるような施設関連の事件がおきた。

京都府が直接関わるようなものでなければ、何をするわけでもなく、漠然とした「明日は我が身、明日は我が所」感のようなものだけが少し漂った。

また、時代の記憶としては一時保護所における職員殺害事件も大きい。管理システムや、職員の資質、建物の構造も合わせた複合問題であったことは確かだ。そこに異なる視点から、施設へのサポートを行政として考えようとした。

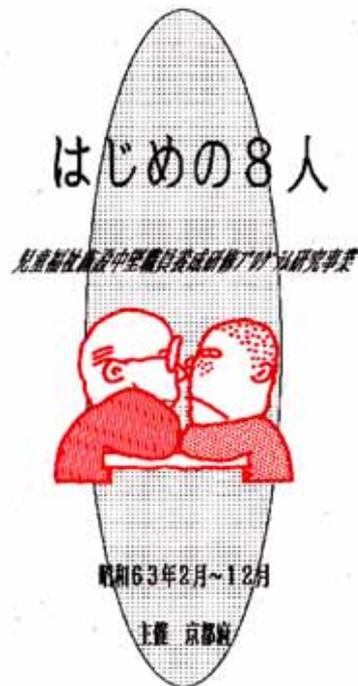
規模の小さな社会福祉法人では、中堅クラスになった職員のために、学びの機会などなかなか準備できない。人事交流も難しく、一方で若い女性は結婚退職も含めて離職のサイクルも早かった。働き続ける人の意識は、だんだんマンネリ化する傾向に

あった。

毎年行われる施設連絡協議会主催の研修は、新任者向けが繰り返され、長期勤続者には研修機会も減っていた。

そしてそれぞれの施設においてベテラン職員は、個性の塊(お局様や癌)と陰口をきかれる存在と化すこともしばしばだった。

これを個人、個性の問題ではなく、システムとしての必然メカニズムだと考えた。そこでこの人達のバージョンアップを目指して企画した研修だった。



こんな盛りだくさんな贅沢企画であっても、施設側からは、児相(行政)が音頭取りの研修に、厳しい現場のソフト体勢から人手を抜かれるという不満があがることは予想できた。

そこで初年度は、本庁からの指示ルートを使って、提案ではなく指名研修にした。その結果、いわく付きの評判の中堅どころも一部含まれて、一堂に会することになった。(もっとも、このいわく付きというのは公正さを欠いた噂に近いものではあった。しかしとにかく、北風を送るのではなく、太陽をプレゼントするのだからと目をつぶって貰うことにした)

三児相の課長も全プログラム張り付きで宿泊し、夜は各施設の中堅どころと、児相の中堅どころで、ビールを飲みながら、じっくり四方山話に花が咲くこと

になった。

始まってみると、回を追う毎に評判が高くなり、翌年からも施設側の希望もあって、継続開催されることになった。

(日誌の順次記述からさっそく外れるが、
二ヶ月後の同じ事業に関する記述)

3/9-10 FRI-SAT

京都府児童福祉施設中堅職員研修第 期の
第5回目(最終回)、7名の終了生を送り出した。去
年が8人、今年もまた7月から第 期をはじめる。

こうして各施設一人を一年間、一泊二日を五回
(延べ十日間)、体験学習的なプログラムを、講師
を呼んで受けてもらっている。こういう経験を持っ
た中堅クラスが、現場に増えていくことの値打ち
は計り知れないものだ。こんな事を思っているの
は、仕掛けた私だけかもしれないが、まあその内
わかる。

実際にこの取り組みは、数年間継続された。施
設にとって、特定の職員が年間を通じて十日間もロ
ーテーションから外れるのは難題だった。京都府立
のある施設は、そんな体制は組めないといって二年
目からの参加を断ってきた。もともとは、その施設の
職員の進言もあって、数年かけて企画実現にこぎ着
けた研修だったが、蓋を開けてみると、そんな結果に
なった。

社会福祉法人組織にとって京都府は、監督・監
査機関である。そこから指示された研修会は、職場
事情はあっても断りにくかっただろう。逆に府立施設
は権力関係を感じることは少なく、その結果、職場事
情を理由に参加を断ることになった。

もとより明確な結果が出るものではないが、この府
立施設が抱える課題を、延々と悩み続けて、その後
も過すことになるのは、変化への柔軟性を持てな
かったことが一因だろう。後から考えると、不運とい
うのはこんな風に忍び寄るものなのだなぁと思う。

研修の成果について、語られることは基本的には
ない。実施しているという以上に、何か語られる仕
組みになっていないし、何を効果と認定するかも難し
いことではある。

しかしそんなことで済ませてきたツケがいま、社会

のあちこちに出てきている。個人の意思任せの、趣
味のような勉強指向と、学ばない者はそれでご勝手に
に！という風土は今もあるだろう。

そして職場状況が厳しくなればなるほど、ますます
学びは当面の課題や対策に流されていくだろう。

組織システムの一員として、給料に見合った貢献
度を自覚するなら、キャリアに応じた重層的学びは
不可欠である。

1/22 MON

京都府三児童相談所課長・係長会議(福知山)。

中間管理職の会議である。三カ所(宇治、京
都、福知山)ある児童相談所の課長・係長が一堂
に会して、実務の協議をかなり頻繁に繰り返してい
た。

会議の話など珍しくもないし、世間には、「会議ば
かりで、ちょっと仕事がかどらない…」という言い
回しが定着していた。会議は無駄だと考える慣用認
識が信じられていた。実際そういう会議も多かったに
違いないし、そう思っている当事者が、会議をしてい
るのだから、そんな会議になっていたのだろう。

しかし当時の児童相談所に関しては、業務に関
する協議不足の無駄が多いと確信していた。そこで
既にあった中間管理職会議を大幅拡大して、三児
相・課長係長会議をはじめた。

ここでは西川課長(宇治)、鉄川課長(福知山)、
川崎係長(宇治)、早樫係長(宇治)、高橋係長
(福知山)という、私にとっては長年の心理職仲間と
して気心の知れたメンバーが揃う事になった。

その結果、これまでよくあった意思疎通不足によ
る、新任者同士の食い違いのようなことはなくな
った。私にとっては時代が、上手い巡り合わせに変わ
っていた。

心理職の先輩後輩関係だったから、立場や面
子を構うことなく、職場を越えた分業体制なども採り
入れた合理的な業務進行をプランした。何でも試し
てみて、上手いかなければ、さっさと変更すればよ
かった。

しばらく後の事だったと思うが、ビジネス番組でト
ーヨーカ堂が全国店長会議というのを、毎週、東
京に日本中から集めて実施しているという話を聞い
た。会議費だけで莫大な出費になるが、それでも効

果があるのだと社長は言っていた。この話題はなんだが、自分たちのしていることを後押しされたようで嬉しかったのを覚えている。

1/23-25 TUE-THU

東京・国立リハビリテーション青少年総合センターで開かれた、文部省関係団体(注・文部科学省になるのは2001年から)主催「全国青少年相談研究集会」に参加。行ってみて分かったことだが、100名定員で通知しておいて、300余名の申込があったからと、そのまま受け入れてしまっている主催者の神経を疑った。当然、中味もその程度で、告知のテーマや企画に惹かれて参加を決めた期待はやはり裏切られた。

国がやることに期待する方が甘いなどと言われたが、どうせこんなものだろうとしか思わずに集まってくる教育、福祉関係の公務員達は、自らの手で何かを崩し続けている。

夜、新宿に出て、映画「恋人たちの予感」をみる。評判ほどでもなく平凡。わざわざ行ったという気持ちがあるからがっかりする。その後、「談話室」と名付けられた喫茶店で、チーズケーキセットを頼んだら、1200円だった。一人でだ。関西だったら誰も入らないな。

「施設中堅職員研修」と対比して考えざるを得ない経験をしていた。

こんな感覚の全国研修は、まだ今も行われているのだろうか。この20年で、公務員を取り巻く環境は大きく変わった。しかし相変わらず公務員希望者は多い。若者は公務員をどのような職業だと考えて、希望しているのだろうか。公務員を語る言葉の古くささから脱却した時代に入ったのだろうか？

当時もまだ、こんな研修参加者の大半は、「公費出張で東京見物でもしてきますか…」という気分だった。十数名で分科会討議とアナウンスのあった一部屋が40人だったりするバカバカしさに、誰も苦情を述べるでもない現実だった。まだ、素晴らしいものは中央(東京)にあると信じていた時代だったかもしれない。

映画も評判ほどではなかったが、それは東京

のせいではない。1200円のケーキセットは、今でもそんなところは多くはないのではないか。スタバはまだない。パブルのはじける直前の事だったのだろう。世相はこんな小さな事から振り返ることもできる。

1/26 FRI

滅多にないことだがピンチヒッターで、久しぶりに就学前の子の保健所での発達相談。発達検査をして母親や保母さんと話す。夜は地域で教師との勉強会。

ピンチヒッターのことを一言。中間管理職になった私だが、心理臨床業務への未練がないはずがない。実際、少数のケースは持っていた。管理職になりきるのは寂しかった。

しかし、経験豊富な管理職が、部下の緊急時にピンチヒッターで入るのはご用心だ。四番バッターがスランプだということで、王監督がピンチヒッターに出るようなものである。結果については必ず、様々な思いが交錯する。(王選手だって三振はするからね)上手いといっても、上手いかなくても、しばしば後まで、微妙な問題を抱えることになる。

一番良いのは、同僚間で融通して貰うことである。助け合いは、一面貸し借り感覚でもあるので、そこでさばいて貰っておけば、後々やりやすい。助けて貰った人は、次、相手に事情が生じたときに、喜んでサポートに回るだろう。「こっちも一杯一杯なんだ。課長に頼めよ」、ということにはならない。職場のチームワークは、好調に事態が進行しているときだけに生まれるのではない。

一方的に助け役ばかり、助けて貰ってばかりの役割固定も不満の温床になる。職場に於けるお互い様の成立は重要課題だ。

ある施設に管理職として出向していた知人は、いい顔がしくて、気やすくピンチヒッターの夜勤を替わってやっていた。職員は何かあるとまず、課長に代理を頼むようになった。

そして個々人の緊急事態発生頻度は格段に高くなった。依存心の誘発は人や組織をだらし

なくさせる。その結果、彼は未消化の代休を山盛り抱える事になり、それを自慢げに愚痴ることになった。

*

「地域の教師勉強会」 夜間、児相職員が地域の集会所などに出向いて、地元で働く教員と合同の勉強会を管内二カ所で月例(継続)実施していた。相談判定課主任心理職・川畑隆くんが世話人で精力的に動いていた。相談になる以前の、地域における学校問題に関与してゆこうとしていた。受け身の相談ではなく、うってでる相談を具体化したものだった。今、彼は当時出かけていた地域の一つ、亀岡市にある大学で教鞭をとっている。

私は私で、ずっと後になってから、教員のための家族理解勉強会(月例)を大阪・門真市(10年継続で昨年終了)と滋賀・草津市(11年目継続中)を開くことになる。

亀岡市で参加していましたと語る教員退職者に、二年ほど前に講演会で声をかけられたことがある。地域に種を蒔くような仕事の意味を、後になってしばしば実感することになった。

流行語のように、「地域ネットワークの構築」なんて、出来もしないことを軽々しく口にするものではない。現実社会にはもう、思いつきだけで発展するようなネタはない。難しい課題しか残っていないのが当然なのだ。それをどう一歩前進させるか。ここに深く辛抱強い知恵が求められている。

1/29 MON

夕飯を5時に食べた後は、父親が嫌がるから、もの音をたてずに夜を過ごすという一家。想像しにくい環境で育った女子中学生が今日から一週間、一時保護所に来た。私が面接を担当しているが、とにかく頑固な娘さんだ。

心理臨床業務から離れて、完全にマネージャーになる事への抵抗が、私の仕事ぶりのあちこ

ちに見られる。私の心理臨床への執着心は、組織に何をもたらしていたのか、何を阻害していたのか、何とも言えない。

教育現場で時々、良いことのように「生涯一教師」と言ったりする人に会うが、賢明な管理者が学校を良くすることをどう考えているのだろう。能力がないのなら仕方がないが、管理者にならないことが格好良いという意識は困りものである。加えて、管理者には向かない人が、その地位を欲しがるのを放置しているのも無責任である。

きちんとやれる人が校長職に就くことで、無理な人は諦める。「なるべき人がならない管理職問題」というのが、私たち(専門職公務員)の世界にあったかもしれない。

私にとってこの中間管理職生活の試練が、良い学びだったことは後々分かってきた。

*

彼女のことを、2010年になって思い出して、月刊「少年育成」誌連載中の「木陰の物語」に描いた。むろん、他のケースとアレンジしたものだが、印象に残る少女だった。

彼女も今では三十代半ばの女性になって、どこかで暮らしていることになる。あの頃のことを覚えてくれているだろうか?そして何かの拍子に思い出すことがあるだろうか?

私たちの仕事は直ぐには結果の見えない、誰かの未来に希望を繋ぐことだった。そんな仕事に疲弊することはなかったし、二年や三年で、異動希望を出すことになるわけもなかった。今、思い出しても胸が温くなる。

近年になって児童相談所で働き始めた人たちは、そんな仕事もさせてもらっているだろうか。

以上、まずは1990年1月の10日間のことである。

学校臨床の新展開

スクールソーシャルワーク元年

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

はじめに

日本では、1995年度より文部省(当時)「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」が開始され、学校にスクールカウンセラー(以下SC)が導入された。当時、学校に教員以外の外部専門家が入ることは、鎖国時代の「黒船来航」にも例えられたほどであった。SC導入の背景には深刻ないじめ自殺事件や不登校の増加が大きな社会問題となったことなどがあげられる。SC活用事業終了後、2000年度からは、「スクールカウンセラー等活用補助事業」として今日まで多くの自治体、学校で事業が継続されている。「こころの専門家」であるSCの名と役割は、学校教育の場ではすっかり定着した感があるばかりではなく、臨床心理士を目指す中高生の出現や臨床心理ブームにも大きく影響した。さて、そのSC事業開始から10年たった2005年度、大阪府では国に先駆け、SCと並行して、本格的にスクールソーシャルワーカー(以下SSWr)による活動をスタートさせた。深刻な児童虐待の増加などに対して、学校で、より専門的な福祉的支援が期待されてのことである。そして、その活動は不況下、子どもの貧困問題と合わせNHKはじめテレビ、新聞等マスコミでも大きく取り上げられ、2007年度末、国(文部科学省)はついに、「スクールソーシャルワーカー活用事業」(約15億円の事業)を打ち出し、2008年4月より46都道府県でSSWrの雇用がはじまった。2008年度は、日本の「スクールソーシャルワーク元年」ともいわれている。しかし、この「スクールソーシャルワーカー活用事業」は翌2009年度からは国の「学校・家

庭・地域の連携協力推進事業」のひとつとして1/3補助事業になっている。SCの導入期、国は地方への委託事業として責任を持って5年間その導入を支えてきたことと比べると、SSWrの導入には、たった1年で、補助事業に切り替えている。この点について、文部科学省(岡本2009)は「国の委託事業から地方への補助事業に変わったことにより、今後は、事業の実施者である地方自治体がその実情に応じ、主体的に取り組むことができるようになります。このことから、学校・家庭・地域が連携した児童生徒の問題行動等への対応を進めていく上で、これまで以上に、SSWrに寄せられる期待やその役割は広がって行くものと思われます。」と、肯定的に捉えている。しかし、近年、地方自治体の財政状況は極めて厳しく、2/3負担で新規事業を組み入れることは難しく、2008年度で事業を終結しているところも散見され、冗談のような話だが、失業したSSWrも少なくない。

筆者は、2009年度から配置校型SSWrとして、週1回、公立中学校へ勤務している。学校現場の今、そして導入期のSSWrの課題や可能性などについて検討していきたい。

過去最高の暴力事件

文部科学省、2008年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、国公私立小中高등학교において、児童生徒による暴力行為は、前年度に比べ約7千件増加し、約6万件という過去最高の記録的件数となったことを報告している。文部科学省初等中等

教育局児童生徒課はその背景を、「感情をコントロールできない子供が増えている。規範意識が低下してきている。コミュニケーション能力が不足している。」と分析している。ちなみに、千人あたりの学校における暴力行為発生件数上位5位は神奈川県(10.2)、奈良県(10.1)、香川県(9.9)、京都府(9.2)、兵庫県(6.2)である。その他も概ね西高東低、関西の子どもは感情コントロールができず、ルールを守らず、コミュニケーションが苦手なため、言語的なやりとりではなく手が先にでるのだろうか。暴力発生率4位の京都府教育委員会は京都新聞の取材に「学校の『荒れ』が広がったというより、一部の学校で件数が増えたと認識している。対人トラブルを暴力ではなく言葉で解決できるように、ケースに応じた教育指導を一層強める」と答えている。

教員の疲労

筆者が勤める中学校では、教員は休み時間がなく、自分の授業持ち時間以外も、エスケープや授業妨害を未然に防ぐため、廊下におり、昼食も教室か廊下で食べる。そのため、職員室にはいつも事務員しかいない。このような状況は、いわゆる「困難校」ではよくある状況で、かつて他県で勤めたSCのときにも経験したことであるが、雨の日も風の日も、雪の日も酷暑の日も、廊下で外気を直接肌を感じながら立ち、あるいは箒やごみ拾い用のはさみを握りながら校内を回る教員の姿には、いつも感心する。9時-17時で帰れる教員などおらず、皆、何時までいるのか、毎日不夜城、遅くまで職員室の灯りはついている。世間では教員による不祥事、セクハラ教員や大麻教頭などが大きく取り上げられるが、基本的に大多数の教員は至って真面目である。それぞれの教員が自分の家庭を抱えながら、それぞれ「ワークライフバランス」を壊し、他人の子どもや家庭の支援をしている。

さて、教員は子どもについて家庭とやりとりをすることが多いが、近年、特に保護者対応の困難さを指摘する声大きい。小野田(2006)が学校管理職(校長、教頭)に対して行った調査によると、約9割の管理職が「保護者の対応が難しい」と感じている。今、学校教育現場では団塊世代の大量退職期を迎え、小中学校を中心に若手教員が増加してきているが、そのなかで、子どもたちの「問題行動」や「不適応」の増加、そして、発達障害が

疑われる児童生徒への対応、また、学校教育に対する保護者ニーズの多様化などに対して、教員はどこまで支援するのか、どのように支援するのかということが、各学校とも大きな悩みとなっている。また、無理難題な要求(小野田は「いちゃもん」と称す)とは反対に、極端に子に無関心であったり、放任するような親、あるいは社会経済格差による貧困の問題を背負った子どもたちにも教員は日々直面对峙し、疲労困憊している。

文献

- 岡本泰弘(2009)「スクールソーシャルワーカー活用事業」今後の展開について」『月刊生徒指導』5 6-9
- 文部科学省(2009)「平成20年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
- 京都新聞 2009年12月1日付朝刊
- 小野田正利(2006)『悲鳴をあげる学校』旬報社 49-55

まず、編集長からの解説

これは私達のゼミ生（村本邦子・中村正・尾上明代・団士郎の4人が担当する立命館大学大学院・応用人間科学研究科・対人援助領域「家族機能・社会臨床クラスター」）の一人である北村真也君が、ほぼ毎週、提出してくる多量のエピソード記録です。そこには、中村正さんと北村君が二週間に一度、定期的に持っているオフィスアワーを核に、いろんな人や物、場が複合的に思考、展開していく様子が大量に書かれています。

それを読んでいると、いつも何かがざわざわとうごめき出しました。編集プランを考えていた私には、彼らの対話のあちこちに、「対人援助学マガジン」への提案やエールを感じ取れたのです。無論、マガジンとは関わりのない、修論構想の指導として始められた対話です。しかし知っている事を明確に意識化し、眼前のものは何であるのかを、はっきりと見たいと強く願う北村君の感覚は、新しくスタートさせようとしている雑誌と激しく同期しました。

社会人入学生である北村君（私は古い知人なので、こう書いてしまいますが、一般には北村さんが適切）は48歳の立派なおじさんで、長年、信念を持って経営してきた塾のオーナーです。その画期的な塾「アウラ学びの森」の実践を表すためのオリジナリティある言葉探しと理論化に取り組んでいるプロセス（オフィスアワー）を、連載してもらおうと思ったのです。そこでまず、第一回目は「アウラ学びの森」とは何なのか。まだ中村先生は登場しません。

場と会う 人と会う

中村先生との対話

序

アウラを語る

北村真也

京都府の要職にあるAさんが、アウラに自転車でやってこられました。自宅のある京都市内から亀岡まで…。最初電話で「自転車でいきますから」と連絡が入った時は、思わず「エッ」と声を出してしまいました。

今回の話は、まずアウラはどういった学びの空間なのかというAさんの問いから始まります。

「すごい教室ですね。アウラは小学生から高校生くらいまで来られるんですか？」

「まあ一応、小学生から高校3年までということになってるんですが、大学に入学した生徒もここで手伝ってくれてるんです。スタッフとしてね…。それはそれで、お給料を支払いながら、一方でコミットしていくので彼らの学びの場でもあるわけですね。また、私は今大学院に籍があるので、この間なんかは、院生が大勢やってきて、5時間くらい議論をするわけですよ。大人の方も時々、やってきて専門学校への入学に向けた学習をやったりするんですよ。とにかくこの教室は、席が30余りあるんですが、中学生がやっている横で、その大人の方がやったり、とにかく混在するんですよ」

「基本は自習なんですか？」

「そうですね。私たちは自律学習と呼んでいますが、みんな自分で学ぶんです」

「みんな自分の勉強を持ってくるんですか？」

「カリキュラムは、一緒に作るんです。ひとりずつ」

「ひとりずつ…」

「普通の学校は、カリキュラムが先にあって、子どもたちはそれに合わさないといけないでしょ。でもアウラでは、ひとりずつカリキュラムを作っていくと…、だから生徒の数だけカリキュラムがあるわけです。それでやってるうちに、カリキュラムが合わなくなってくると、ガイダンスをおこなって、カリキュラムの修正をおこなうんです」

「先生は何人くらいおられるんですか？」

「今は13名ですね」

「そこに生徒が…」

「100名くらいですね」

「ということは、ここに生徒が30名くらいいると…」

「教室には、先生は3、4名くらいですね」

「先生は、何聞かれても答えられるんですね」

「一応文系の先生と理系の先生には分かれてるんですが、生徒の質問にはたいいてい対応しています。ただ生徒の自律度が向上すれば、生徒はあまり質問しなくなっていきます。自分で問題解決しますから。そうすると先生は、もっと概念的なことを語ったり、これからどう学んでいくかを一緒に考えたりする役割を担いますね」

「なるほど、すると黙々とここで勉強していくわけですね」

「そう、黙々とやりますね。長い子だったら5時間くらいやりますよね。それで帰る時にレポートを書いて帰るんですよ。今日のまとめをね」

「アウラは、学校に行っていない子どもばかりが通ってるんですか？」

「いやそうではないです。学校に通っていないいわゆる不登校の生徒は、現在6名です。そのほかの多くは塾として、学校が終わってから来ています。アウラはもともと私塾としてスタートしたんです」

「ああ、そうなんですか」

「私はもともと不登校の生徒を対象にする予定もなかったんですが、たまたま中学を3年間行かずに家に引きこもっていたある男の子がアウラにやってきたんです。この子をどうしようと考えて始まったのが、アウラのフリースクール、サポート校部門である知誠館なんです」

「なるほど…」

「アウラは、もともと午後2時頃から夜11時頃まで開かれていたんですが、昼夜逆転の不登校の生徒がやってきたことで朝10時から夜11時まで開かれるようになったんです。学校に行っていない子らは、朝10時からやってきて、夕方に帰るんですよ。とにかくアウラは、新しい生徒との出会いによって、どんどん変わってきたわけですよ」



「北村さんは、先ほど私塾とおっしゃいましたが、進学塾なんですか、それとも補習塾なんですか？」

「そういうカテゴリーに入らないかもしれませんね」

「もともと親はどういう風に、したいんですかね。働いてるから子どもを預けたい？」

「それは塾に通わせて、学力をあげたいという動機が一番多いと思いますよ。だから、アウラの入り口は、塾なんです。そこには、進学塾も補習塾も、あるいは不登校であれば、フリースクールも、居場所も、それらをすべて含んでいるんですよ。一般的にいわれる教科的な力をつけることは、そんな難しいことじゃないと思うんです。子どもたちが学習に対して主体的に集中して取り組むことができれば、自ずと力がついていくわけですよ。私はむしろその奥にあるものに関わりたい。アウラでは、子どもたちは誰もが自律的に学んでいます。このことは前提なんです。自律的な学びは、*学びの型 Learning Literacy* を構築させます。だから、英語と数学しか学習してない生徒の理科や社会の成績が上がったりするんです。それは、彼らが *学びの型* を身につけたからですよ。自律的に学ぶ型を…。そして私なんかは、そんな風に自律的に学ぶ子どもに一人一人声をかけていくんです。すると様々なものが見えてきます。例えば、わからない問題に出会った時に、すぐ諦めてしまったり、あるいは誰かに依存しようとしたり、そこには理解の背景にあるその子の行動パターンや、物事をどう認知するかといったパターンが見えてくるわけです。私たちはそこにコミットしていくことで、子どもたちが自ら変容していくことを期待しているんです。さらにどうして変容が必要かという、彼らの学習観は、常に正解、すなわち一つの答えに収束していくと

いった学習観でしかないからです。いわゆる 収束型の学び です。でも、大学で研究したり、社会の中で開発をしたりする創造的な活動は、答えをどんどん作りだしていく作業であって、ネットワークが拡大していく過程であると思うんです。いわゆる 生産型の学び です。だから、子どもたちの学びを 収束型の学び から 生産型への学び へと転換していくためにも、彼らの学習観が揺ぶっていきなりたいところがあるわけですよ。私の中には、「人が学ぶということは、果たしてどういうことなのだろうか？」といった問題提起があって、それを子どもたちに対しても問いかけていきたいということがあるんです。でもこれを最初から親にアピールしてもなかなか、理解されないわけですよ。そんなことは...

「でしょうね」

「だからね、親御さんに直接的には伝えにくい。例えば...、これアウラのチラシなんですよ。子どもが写真撮ったんですよ。生徒の目線でアウラはどう映っているかという...、そういうものを巻に出して行くんですよ。少し普通の塾とは違うでしょ、でも塾なんです」

「普通の塾のチラシには、 高校何人、とか書いてあるじゃないですか？」

「それは、今まで1回も載せたことがない」

「それは、あえて戦略的にそうしてるんですか？」

「戦略というか、受験合格は、生徒の手柄だっていう私のこだわりかもしれません。でもまあ、こういう一風変わったチラシを出してるんで、それに興味を持つ人がやってくるのかもしれないね」

「なるほど」

「私たちは生徒の選別を一切してないんで、できる子からできない子まで実に様々な生徒がやってくるわけですよ。偏差値でいえば、それこそ30くらいの学習障害傾向を持つ子から、80くらいの子までいるわけです。まさに混在の世界なんです」

「まあ考えてみれば、自分も家で勉強したことがないんです。帰り際に青少年センターがあって、その自習室でみんな勉強してたな。無ずっと通い続けた。そこがなければ、大学に入ってなかった。で、そこにわからないことがあれば説明してくれる先生がいて、考えてみれば理想かもしれんな。塾に通ってるあいだって受け身ですもんね。自習で聞きたい時に聞けて、しかも自分がある一定の緊張状態における空間。ある意味理想の空間かも知れませんね」

「学校だったら、授業中に先生が一人でしゃべっているけど、ここはいつもクラシック音楽が鳴り響いていて、そんな中でみんな学習を続けてるんです。でもまったく誰もしゃべってないわけじゃない。みんなそれぞれに何かはしゃべってるんです。うるさすぎず、静かすぎず...。その間に、誰もが集中できるポイントがあるんです。そのポイントをみんなが意識できるようになっていくわけです」

「そういった意味では、よく考えられたすごい空間ですよ」

“空間”ということをめぐる話は、アウラ以前のことへと進展していきました。私がどうして“空間”あるいは“場”ということにこだわりを持つようになっていったのか、そんなことが話の中で紹介されます。

「アウラの設立コンセプトの中で私が一番こだわったのが、この“空間”ということなんです。私がアウラを作ったのは2000年なんですけど、その背景には、90年代に入って、子どもたちにどこか声が届かなくなってきたという思いがありました。私は大学を卒業した84年から教育に関わるわけですが、当時はまだ“校内暴力”というコトバが巷に氾濫していた時代でした。彼らは、学校や教師に反発していた。反発と

というのは、関係を持つとするとする一つの表れですよ。いわゆる反社会的行動。それが、90年代以降少しずつ減りはじめ、いわゆる無反応、非社会的行動に変わりつつあったように思うんです。生徒は、だんだんいい子になっていき、特別問題を起こさなくなったんですが、どこまで話が伝わってるんだろうという疑問が私の中で大きくなっていったんです」

「北村さんは、80年代はどこかの学校におられたんですか？」

「いや、私は学生時代から私塾を始めていたんです。学校では働いた経験がありません。実は私を私塾の世界へと導いてくれたのは『教育に強制はいらない』という1冊の本でした。この本は当時北海道新聞の大沼安史が、70年代のアメリカのオルタナティブ教育の現場を日本に紹介した最初のものでした。そして当時、学生だった私は、結構インパクトを受けたわけです。当時のアメリカ西海岸では、ベトナムの反戦運動が盛んで、平和主義に基づいた市民たちのムーブメントが背景にあったんですが、そんな中、自分たちの子どもの教育は自分たちでおこなうという考えがオルタナティブスクールを登場させたんです。1軒の家が学校になっていくわけです。すごいなあって思いましたよ。それで、そんなこと日本でも始めたいと思って、学生時代に京都の町屋を一軒手に入れて、私は私塾をスタートさせたわけです。リベラリズムをベースにした私たちと子どもたちが一緒になって作るもう一つの学校、あるいはもう一つの家のような塾でした」

「そうだったんですか？」

「それが先の話にあったように、90年代に入ってから、私の中に疑問が浮上するようになったんです。私の世代は、『われら青春』とか『飛び出せ青春』のいわゆる青春ドラマを観て育ってるんです。だから、どこかにパフォーマンス系の先生像がその理想としてあったんだと思うんです。ところがコトバがうまく伝わらないという状況になって、どこか根本的に見直さないといいなくなってきたんです。そこで目を付けたのが 身体 だったんです。そして 身体 と結びつくのが 環境 だから、そこにこだわっていったんです。だから、環境 をどう考えるのかということ、これって20世紀の教育はあまり考えてこなかった点だと思うんです。今の学校は、大変無機質な空間ですよ。効率化の文脈の中で 環境 を切り取ってしまっている。だからこれは全然違うなって思ったんです。それで最初に思ったのは、私自身がモノを考えたり集中しやすい空間って何だろうって考えていったんです。それから、私という人間をこの空間の中にどうしみこませていけばいいかということ。私のこだわりとか...、そんなものをこの空間を媒介にして伝えていく。これをギブソンは“アフォーダンス”と呼んだんですね。このアローダンス理論は、アウラを作る時の重要なコンセプトだったんです。例えばこのヘゴシダの木、これはこの教室の中心、ここは13mの吹き抜けになってるんですが、ここに先生がいるんじゃなくこの沖縄からやってきた3mの高さの木があるわけです。スペースと自然、これがアウラ教育の象徴的なメッセージなんです。学びの中心にあるのは、スペースと自然なんです。私の机なんかは、教室の隅っこにあるんです。これサポーターの象徴なんです。だから、この配置一つとっても、私のこだわりがあって私のメッセージがあるんです。こんなことを私は直接彼らに伝えることはしないけれど、場を媒介にしてその身体に伝えていくんです」

「机の配置もかなり考えられたんですか？」

「かなり考えましたよ」

「本もすごいですよね」

「生徒の学習するものに混在する形で、私の研究領域の本が所狭しと並んでるんです」

「子どもたちは、よるこんで来るんですか？それとも来させられてるって感じなんですか？」

「よるこんで来ていると思いますよ。これ去年書いてもらった子どもたちのアンケートなんです。これ見

ていただくと、彼らがどんな思いでアウラにやってくるのかということがわかるかもしれません」

「気が散るものもないけど、押し付け感もないしね、それで集中できて...、本当に理想ですよ。周りが集中しているから自分も集中してしまうなんてこともありますしね。仕事もこんなところでできればいいんだけどな...」

「まあ最初にイメージとしてあったのは、“お茶室”なんですよ。待ちの部屋から中庭を通して、あの小さな入り口からお茶室に入る。そこは俗世界からどこか切り離された別世界なんですよ。アウラは、そんな場として認識されているんだと思うんです。だからみんな、ここに来るとなぜか集中できる、やる気になるなんて表現をしてくるんです。初めてアウラの教室にやってきた子どもたちは、みんな最初は戸惑うんですよ。“何やこの教室”ってまずこの有様に戸惑うんです。そして、そこで小学生から高校生まで入り乱れる形で自律的に学んでいる。先生からの指示が特別にあるわけでもないのに、自分たちでそれぞれが学んでいるんです。教室にはクラシック音楽が流れていて、適度な静けさが集中を誘う。彼にとっては、すべてがまるで別世界なんです。だから、そこで生まれ変わるわけなんです。彼らは、一旦自分たちの学習観を un-learn して、再び新しい学習観を re-learn していくんです。先生に“はい、これやってください”と言われてやっていく勉強から、自分でやっていく学習へ、あるいは、テスト前に必死で覚えてテストが終われば忘れてしまうという“勉強といえば覚えること”という学習観を何とかしたいんですよ。ただ、今のところ日本には受験という制度があるので、そこは無視できない。受験を否定することはしないんですよ」

「ここにきて、子どもたちも受験ということに勝ち残っていくことが一番になるわけですよ」

「受験ということが一番に来るかどうかはわからない。少なくとも私はそう捉えていない。受験を否定しないけれども、それを一番に持ってこない。そんなのは小さい世界、学びの世界というのはもっと広くて深いもの。私からすれば、一つの答えに集約できるものは、まあ言えばネットで拾えるようなものなんですよ」

「一般化されたものですよ」

「彼らはそこを通らないといけないのですが、私は何かしらのメッセージをだしていくんですよ」

「私のゼミというのがあるんですが、私はそこで結構彼らを揺さぶるわけですよ。雑談を交えながら...」

「それは何のゼミなんですか？」

「私は、数学の担当ですから、数学のゼミですよ。あくまで数学を通して彼らに揺さぶりをかけるわけです。私は今大学院に所属してますから、ある意味、先生をやりながら学生でもあるわけです。つまり彼らとある意味、同じ立ち位置にいるわけです。だからこそ、彼らに伝えられるものがあるのかもかもしれません」

「ゼミは、みんな受講するんですか？」

「希望する子だけ、選択制です」

「嫌がりませんか？ めんどくさいとか...」

「そんな生徒はいないと思いますよ。聞きたくない生徒はゼミをとらなくてもいい。授業は、生徒が聞きたいと思って初めて成り立つものですから、聞きたくない生徒は受講しなければいいだけです。このことは、はっきりと伝えてある。ゼミを受講しないという事実は、特にとがめられるものでもないわけです。ここは学校ではないので、ここにこなければならぬことは何一つないわけです」

「そうそう」

「来たいと思って来る。これが基本なんです。“君らには選ぶ権利がある。だからこそ私はやりたい教育をやる”このことがとても大切なんです」

「教材も決めてるんですか？ それとも持ち込みなんですか？」

「何をするかは、生徒との話し合いによって決まります。みんなが同じものを学習するって必要性がないので」

「週何回くらい来るんですか？」

「生徒によって違う。でも受験生になれば、週6日、アウラの住人のようになっていきますね」

その後、私はAさんにアウラの2階の教室を案内しました。アウラの1階の教室を自律学習がおこなわれる“静の空間”とすると、2階は、ゼミがおこなわれる“動の空間”。アウラには3つのゼミをおこなう教室があります。そしてあと残り一つの部屋が、ヨーロッパ調の大きなソファーが置いてある面談室。ここは、あらたまって子どもたちもしくは保護者と話をするためにあえて意図された空間です。アウラの2階にはホールがあり、そこから壁一面のガラス窓越しに、前の小学校の運動場と遠くの山々を見下ろすことができるのです。

「ここはゼミ室なんですか。“動の空間”ですね」

「先生も生徒もしゃべるわけですね。盛り上がります？」

「そうですね。私はいい感じだと思っています」

「ここが面談室です」

「これは、石油王の部屋みたいですね」

「ここはまた独特のムードでしょ」

「これはすごいですね。こんな調度品どこで買うんですか？ 輸入品ですか？」

「主にヨーロッパ製ですかね」

「ソファーも机もいいですね」

「ここからベランダへも出られるんですね。景色もいいですね。見晴らしがよくて…」

「アメリカにジョン・デューイという教育学者がいたんですよ。彼は今から100年くらい前の人ですが、彼は教育を机上で語るのではなく、シカゴ大学に自分の実験教室を作るわけですよ。私は、彼の研究スタンスを大変尊敬していて、その影響もあってここを作ったのかもしれない。だからある意味でアウラは、新しい教育のかたちを模索するためのワークショップのようなものかもしれない」

「アウラはできて10年くらいでしたよね。その10年の間に何か変わりました？」

「そうですね。一番変わったのは、教室の“磁場”かもしれないね。最初は私の中の理論とそれに基づく環境しかなかったわけですよ。するとどうしても、“磁場”が弱い。“磁場”が弱いと混乱が生じていくわけですよ。強制力がかからないのでね。ところが、だんだんアウラの“磁場”を私と生徒、そして先生と一緒に作れるようになっていく。みんながアウラの住人になっていくわけですよ。すると“磁場”はたちまち強いものになっていく。つまりアウラに関わる人と環境と一緒に“磁場”を構成できるようになっていったんです。こうなると、新しくアウラにやってくる生徒はその磁場に巻き込まれる形で自分自身をかえていこうとするわけなんです。これを 正統的周辺参加 というんです」

「なるほど、よくわかりますね。本来のコミュニティーのありかたですよ」

「そう思いますね」

「そういったアウラの良さは、口コミで広がっていくわけですか？」

「そうかもしれません。アウラは他の塾とは、根本的に違いますから...、ここまで特徴が強いと自然と目立ってしまいますよね。ただわかる人にはわかるけれど、わからない人にはわからないのかもしれませんが」

「確かにそうかもわかりませんが、アウラの良さをアピールして生徒を集めないといけないわけですよ」

「それは、民間の前提条件ですからね」

「評価測定じゃないですけど、アウラに来る前と来てからでどう変わるんですか？世間的には、テストの数値であったり、受験成果であったりするわけですが...」

「そこが難しいわけで、ここでは教科内容は媒介的に活用しているので、もっと目に見えない部分にフォーカスされている傾向があるんですね。もともと目に見えないので、それをどう表現するのかということはずと難解な課題になるわけです。すごい大きなコトバで表現すると、生徒の生き方が変わるとかいうことにもなるかもしれないのですが、そんな大きなコトバにしてしまうとどこか陳腐なものになってしまう。でも私たちが親からよく聞くのは“勉強への向き合い方が変わった”とか“生活の仕方そのものが変わった”とか“生まれ変わったようになりました”とか、そんな表現なんです。だからこれをどう表現するかを、私は今大学で研究しているんです」

「そんなアウラの哲学がある一方で、さっきのチラシの中の表現を見ると通常の学習っぽさも出てるじゃないですか、あのチラシでどこまでその北村さんの考え方が伝わるんだろうって思うんですよ。要は学ぶ姿勢を育てるということと、詰め込むべきものは詰め込むということのせめぎあいというか...」

「それは、例えば、東北の温泉に行った時に“ここは混浴ですよ”って言ったら、女の人は入れないわけですよ。だから、入り口は男風呂、女風呂となっていて、実は奥でそれがつながっている。そんな見せ方が必要だと思ったんです。“汽水性”という考え方があります。いろんなものが混ざっているんですよ。これもあるし、あれもある。このチラシでは、学習塾っぽい表現がある傍らで、生徒が撮ったアウラの教室の写真があるわけです。そして、その下には私の主張もさりげなく表現されている。あまりイデオロギーが強いと、ダメなんですよ」

「北村さんは親御さんの面談、もよくやってるんですか？」

「面談は、親の学びの機会です。アウラに関わってもらおうということは、だれもが学習者になるということなんです」

「小学校から来た生徒は、中学になっても来るんですか？」

「そうです。高校になっても通い続け、そして大学になってアウラの先生になるんです」

アウラに始めてやってきた人は、いったい何に興味を持つのか？そして私は、何を語りかけるのか？そんなことがこのエピソードから見えてくるのかもしれませんが。実際、アウラを一言で語ることは大変難しい。幾重にも重なる対話を通してはじめて、そこにアウラが浮かび上がってくるようなものかもしれません。

幼稚園の現場から

鶴谷主一

原町幼稚園（静岡県沼津市）園長

私の勝手なイメージですが

対人援助マガジンに幼稚園という立場から原稿を書かせて頂くという話を聞いたときに「え？場違いじゃありません？」と感じました。テレビ番組に例えると、報道部門の集まりにバラエティー部門の人間が混じってしまったようなイメージ。福祉の世界と較べると「幼稚園は軽くてスイマセン! (>_<)」というようなイメージを自分で持ってしまうているからなのです。

以前、教員養成校（短大）の就職ガイダンスの集会に出かけたとき、保育園や養護施設の先生方と話をする機会があり、そのときにこのイメージは作られました。

私立養護施設の先生は学生たちに向かって「ウチの施設にはかわいい子どもはいないので、それでもよかったら就職を希望してくれ! 」という発言をなさっていました。学生へ覚悟を求めての発言だということはあきらかですが、『天真爛漫』などという言葉はたぶん当てはまらない子ども達と相対さなければならない職場だということは伝わってきます。

次に、保育園の先生は、ひとり親の子どもの問題や、子育てに無関心、家庭環境の悪化など親の関わりを要因とした問題が多いので、保育（教

育活動）をする以前に子どもの心のケアをまず考えなくてはならない、という話をしておられました。抱えている問題の深さが私たち幼稚園とはゼンゼン違うということを改めて実感する出来事でした。

私の幼稚園はというと、全く問題が無い訳ではありませんが、基本的には親との関わりが良好な子どもたちが通ってくる場所なので、大半の子どもは安定していますから“楽しい経験”を通して発達を促すというスタンスです。学生には「かわいい子どもたちと日々を過ごしつつ、楽しく仕事をしよう! 」と呼びかけます。ですから、幼稚園の現場では取るに足らない問題ぐらいしか転がっていないのに、何を書けばいいんだろうか? と迷っていたのです。



「問題」を発芽させない

私は編集長から執筆をお誘い頂いて、何日も「対人援助」ということばを頭の中で転がし続けた結果、そういえば幼稚園にも対人援助という切り口で語ることもあるな、あながち蚊帳の外の人間ではないかも? と思い始めています。もっと言うと、問題があるから対人援助が必要、という発想そのものが間違っていたのでは? ……というところまでたどり着きました。

問題を顕在化させないための人づきあいのようなものも対人援助だったりするのかな、とも考えが広がってきました。(広げすぎかもしれませんが) そんな訳で、子どものことだけでなく、システムや運営について、保護者への説明方法や経営手法、そのへんの分野では幼稚園園長にも書くことができそうです。皆さんの持つ幼稚園というイメージのイメージ再構築の一材料として、バラエティー的ではありますがレポートさせて頂こうと思っております。メインディッシュの箸休めのようなページになれば幸いです。



* さて、今回は私が園長として経験した「対人援助」らしきエピソードを二つレポートさせて頂きます。

エピソード1 : 始業式で

一つは、今年の年度初めの話。始業式で子どもたちに園長として話をしなければなりません。いつもなら、お決まりの話をしてオシマイってところですが、「子どもに対しての対人援助って何だろう?」なんて考えていたものですから、あれこれ思案しておりました。

導き出された結論は、

「こちらの伝えたいことを、子どもが納得できる方法で伝えること」

そんなことは基本中の基本ですが、いつもと違う+ の工夫をしてみました。

伝えたいことは次のような内容です。

「新年度一つ大きくなった年中組(4歳児)、年長組(5歳児)の子どもたちに、新入園児の小さいお友達に三輪車を譲ってほしい。言われたからじゃなく、自分の気持ちで行動してほしい。」という内容。言われたからじゃなく、というところがミソです。どういう言い方をしても「言われたから」という動機がついて回ることは明らかです。

そこで、画用紙を切ってウチワ大のハート型を作りました。表はピンクで裏はグレーを貼り合わせてあります。そして、先生達に手伝ってもらってロールプレイをしました。三輪車に乗っている子ども役の先生Aに、新入園児役の先生Bが乗せ

てくれと頼みました。Aくんは「あともう一周したら替わってあげる」と言って、少し間を置いてから替わってあげました。このときに、笑顔満面のBくんの胸にピンクのハートを持たせます。そして、BくんはCくんに替わってあげて、次はDくん・・・というように、ピンクのハート(嬉しい気持ち)がバトンタッチされていく様子を表現しました。「Aくんが三輪車を1回替わってあげただけで、こんなにハートがバトンタッチされたね、嬉しいね! 」というオチです。

見えないものを可視化したところ、子どもたちの興味はぐんと上がってよく話を聞いていました。だからといって効果はそんなに変わらない様子ですが(^_^;) (ソガコトモ!) ピンクの?は目に焼き付いたことでしょう。

ちなみに、人に嫌なことしたら・・・というシチュエーションではグレーのハートを使って同様にロールプレイを行いました。



エピソード2 : 上客とは

もう一つのエピソードは、保護者からのクレーム処理で印象深かったできごとです。

ある日、園長あてに長いメールが届きました。

概要はこうです。「私は毎朝子どもを送り迎えしているが通園バスの先生からは無視されている。なぜならウチは母子家庭で、私はその子の母親の弟(子どもから見ればおじさん)で、一般家庭とは違うから世間から白い目で見られている。そんな園児がいること自体園にとっては品位が落ちるだろう、そんな上客ではないので、理不尽な扱いを受けるのだ! 」という怒りのメッセージです。

これには思案しました。実際には無記名でしたが誰だか予想はつきました。担当の職員の態度を丁寧にするだけならすぐにでもできますが、「白い目でなんか見てないよ! 」ということメールで返したところで空々しいだけでしょう。かといって、無記名のメールをもらってるのに さん、直接会いたいんですが・・・という訳にもいかない。しかも明日の朝には改善しなければ長引いてしまう!

私は、別の価値観を提示しないといけないと考え、職員が至らなかったことの謝罪に加えて「私園長にとって上客でない園児というのは、保育料を滞納する方です、だから保育料をきちんと納めている限り、家庭環境如何は関係ありません」という返事をしました。

もし他の保護者にそんなこと言ったら何をかいわんやですが、このケースでは的確な答えだったようです。「苦笑気味に、ウチは保育料は滞納していないはずです」との返事が来て、職員の適切な行動もあり、最後はお礼メールが来て解決しました。

その後、お父さんは誰? が知りませんが(>_<)、

下の子が生まれて入園してくれました。保育料もきちんと納まっています。(^.^)。語りかた一つで決裂しそうな、緊張感のある経験でした。

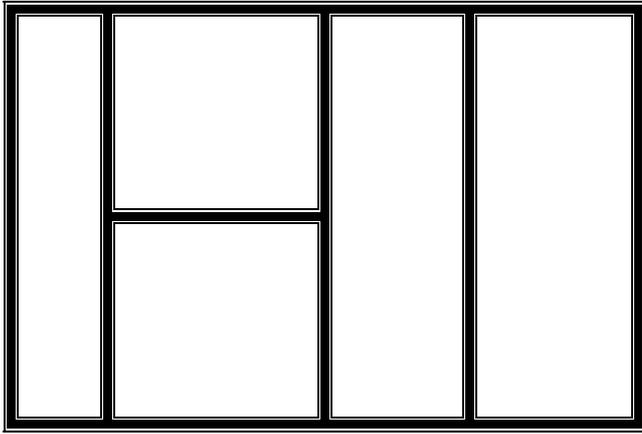


学校法人松濤学園 原町幼稚園
定員 200名 6クラス
幼稚園歴 27年(内園長歴 8年)
<http://www.haramachi-ki.jp>



ツルヤシュイチ

写真と文章は関係がありません。



福祉系対人援助職 養成の現場から

西川 友理

大学を卒業した後、社会福祉施設職員として働き、大学院で学び、時には福祉とは全く関係の無い仕事をしながらも、何らかのかたちで社会福祉士や介護福祉士などの養成の現場に携わってきました。当初それは生活の糧を得るためのものであり、興味の対象ではありませんでした。ところが、いつのまにやらこれが興味深く、たいへん面白いと感じるようになりました。

養成の現場には、ちょうど民法上の大人と子どもの境目である二十歳前後の学生が多い。また、いったん社会に出て働き、再び学生になった方々もいる。社会福祉専門職を目指し、成長していく学生たちに、養成という教育支援をする上で、気付いたこと、気付かされたことなどを私なりに書いていきます。

ちなみに、題名の“福祉系対人援助職”というのは、便宜上造った言葉で、社会福祉士や介護福祉士など、福祉に携わる専門職の事を指しています。他に、医師や看護師などの“医療系”、臨床心理士などの“心理系”等と分類できそうですが、細かくは考えていないので割愛。

また、養成の現場で教えている相手も、大学生や専門学校生、講座受講生と様々な立場ですが、この連載の中では、単純に“学生”、それぞれの養成の現場も“学校”とします。

「実習目標を立てる」

福祉系対人援助職養成の仕事に携わる前は、福祉職を目指そうというのだから、人と話すのが好きで、みんなでワイワイやるのが好きな学生たちばかりだろう、と考えていました。私自身を振り返ることもなく、まったくもって安易でした。

現実には、

「お母さんが行けと言ったから」

「あんまり勉強せんでもええかなと思ったから」という学生が少なくない。

「『あなたは優しいから』と周囲から言われたから」と、気弱で自己主張が苦手な学生もいる。

「資格取れるなら、なんでもいいから取っとこうと思って」となんとなく入学してきた学生もいる。

そんな学生たちも、どの学生も、福祉職の資格取得のためには、問答無用で“実習”に突入します。

実習前教育では、まず、学生たちを受け入れて下さる実習先施設・機関などについて調べさせ、それぞれに必要な基礎的な福祉の知識を復習し、確実に習得するよう指導します。

また、敬語の使い方、電話での応答の仕方や文章の書き方など、社会人としての最低限のマナーも教える必要があります。実習前の学生たちには、やるのがそれこそ山のようにあるのです。

実習前教育は、学生たちがじわじわと「こいつはえらい所に来てしまった...。」と責任を感じ、自覚していく期間でもあるのです。

実習前教育において、個人的に最も重視するもの

が、学生自身が設定する“実習目標”です。学生自身が何を目標とするのか、徹底的に考えるように、と指導します。

考えるためには、実習先がどのような所で、何が出来て、何をすればイケナイのか、どのような役割を期待されているのか、これらをしっかりと把握する必要があります。

そして、何が得られれば目標達成とするのか、学生自身でゴールを設定します。

おそらく、高校を卒業してすぐに大学や専門学校に進学してきた学生たちにとって、このような事を意識的に考える経験は、それほど無かったのでしょう。あまり主体的ではない学生はここで大きく苦労します。

実習目標の設定用紙をテキストに書いて出してくる学生に、「やり直し！」と言い、その都度、個別指導をする。

3～4回のやり直しは当たり前、学生によっては6～7回考え直すように指導することもあります。

たまに不思議なことが起こる。

1～2回目のやり直しに、「ええ...また？」と肩を落としていた学生が、回を重ねる度に、「やったろやないか」と目の色が変わり、やたらと意欲的になる輩がいる。それはただ単に悔しくて意地になって頑張っているだけではない。

自分がどんな人間か、ある社会集団の中に自分をどう位置づけるか、それを深く洞察しなければならないのです。つまり、今まで見えていなかった施設・機関という社会（公）と自分（私）との関係性が見えてくるからではないでしょうか。

小手先の誤魔化しは通用しない事を自覚したのでしょう。

実習目標を設定する際、どんな学生でも、必ず頑張らなければならない時期があります。解らない、出来ないと嘆く学生は、その出来なさに正面から対峙せざるを得ない時期が来るのです。それは今までの自分を振り返るための機会としても、福祉系対人援助職の養成にも欠かせない、有益な時なのです。

“実習目標を立てる”ということは、そう遠くない将来に社会人となる学生たちが、自身のビジョンを描く手助けにもなるのでしょうか。

「刮目して待つ」

現在は5月。夏からの実習に向かって、学生たちが自分自身への探求を始める時期。これを乗り越えようとした学生は、なかなかの面構えで実習に向かうことが出来るように思います。

梅雨時のジメジメとした大気とは裏腹に、学生たちの面構えが変わっていくのを見ることは、喜ばしいことであり、私の密かな楽しみにもなっているのです。



我流子育て支援論

河岸 由里子

千歳で子育て支援を始めて、15年になる。夫の転勤で北海道に来て、自分の子育てが一段落したところで、たまたま家庭児童相談員になったことがスタートである。

当地は、空港と自衛隊の基地を抱え、人の出入りも多く、様々な層の人が集まる地域でもある。空港や港がある地域は、どこでも見られるように、複雑な家庭が多く、問題も多種多様になる。

当地の家庭児童相談員は3人おり、相談は、0歳から18歳までの、養護、養育、不登校、非行、療育など、多岐にわたっていた。保護者や子ども達の相談に応じたり、学校と連絡をとりながら、家庭訪問や学校訪問も度々行い、児童相談所の福祉司とも連携を取り合っていた。

子育て支援としての家庭児童相談員の活動の中で、当時の第一は不登校の相談であった。不登校については、適応指導教室などができ始めの頃で、漸く子ども達をつなぐ場所ができ、保護者と共に喜んだ記憶が新しい。今は、適応指導教室以外にも、フリースクールやフリースペースなど、選択肢が増えていて、子どもの状態に応じて対応してもらえるところがある。家庭教師が不登校の子どもに対応してくれるのは、保護者に金銭的ゆとりがあればとても助かる。ただし不登校でも、適応指導教室に通級したり、家庭教師と関われるならまだ良い方で、そういうものは一切拒否という子どももいる。そうした子ども達への支援は、

相変わらず、担任やスクールカウンセラー等による地道な家庭訪問と、保護者支援による遠隔操作しかない。

次に多いのが療育相談であった。現在では療育相談は家庭児童相談員の仕事から外れているし、当地外では療育相談を行っていないところが多かった。当地では、母子通園の指導員とともに、精神発達遅滞や運動発達遅滞、言語発達遅滞などの相談を受けていた。乳幼児健診での発達相談のほか、週1回、午後からの療育相談を実施していた。ところが、この療育相談がパンク状態になり、途中で発達相談室が母子通園センター内に設置され、私は、家庭児童相談員と言う立場のままそちらに異動し、3歳児健診と療育相談を担当することになった。今のように広汎性発達障害などはまだまだ一般的ではなかった時代で、そこで勤めていた3年の間には、気になる子ども達が目立ち始め、広汎性発達障害の問題が大きくなってきた。年間実数300あまり、延べ900件余りの発達相談に携わっていたが、それほど多く相談があるということは、健診で拾い上げる数が増えたことと、それだけ相談が一般的になってきたということなのだろう。発達相談は、今でも抵抗を示す保護者がいるが、早期発見、早期療育の名の下、母子通園につなげたり、グループ相談(気になる子の遊びグループ)を実施したりなどして、支援してきた子ども達の保護者と数年後学校などで会っ

た時に、「あの時通園に繋げてもらってよかった。」などという話を聞くと「良かった」と思うことも度々ある。今では出会った子ども達の中には立派に成人した子もいる。

そして三番目が虐待の問題である。今ほど虐待の問題が大きく取りざたされている時代ではなかったのに、ネグレクトでも児童相談所が子どもを一時保護してくれるなど、良い時代だったといえる。今は、ネグレクトで引き上げるほど児童相談所や施設にゆとりはないだろうが、ネグレクトも立派な児童虐待なので、その分地域では喧々諤々のやり取りが起こる。児童相談所への批難ももちろん多いだろう。児童虐待については、子どもの命が守られなかった折には、公的機関が批難の的になるが、国の施策、予算の不足、また、諸外国のように親子それぞれの支援プログラム、家族再統合プログラムなどが、行政の指導の元、義務付けられてもいない現在、児童相談所で出来ることには限界がある。まして私ごときではどうにも出来ない問題である。児童相談所の業務がこれほど忙しいのは、虐待の問題に加え、広汎性発達障害の問題の増加も相談業務が滞る遠因になっているのではないかと思う。同様に、今の家庭児童相談員の仕事も煩雑化し、忙しそうである。

そして、最後に、さまざまな家族の相談があった。養育の問題、親子関係の問題、夫婦問題も含め、たくさんの家族に出会い、勉強させてもらった。

家庭児童相談員として働いていた8年間に、様々な研修に参加し、自己研鑽に努め、途中で臨床心理士の資格を取得することができた。その時点から、私の活動は飛躍的に広がることになった。

臨床心理士の資格を取ってからは、スクールカウンセラーの仕事を通じて、子どもとその保護者に携わってきた。小学校、中学校、そして、高校でスクールカウンセラーをして来たが、年々、子ども達と保護者の問題が多様化してきたと感じている。最初の頃の相談は、小学校では、母子分離不安やいじめ、発達障害による不登校や登校しぶりが殆どだったし、中学校では、いじめや非行問題、不登校、高校でも友人関係や不登校が主流であった。今も、主流は変わらないが、父母の離

婚・再婚問題、父母や兄弟など家族の精神障害或いは発達障害の問題、虐待の問題が増えてきている。子どもの問題の9割近くが家族の問題であると感じているが、その家族の問題が複雑化しているように思う。モンスター・ペアレンツと呼ばれる保護者の問題にも時折出会うが、モンスターではないが、子どものことに一生懸命すぎて、学校とトラブルになるケースも多い。また子どもや保護者だけではなく、先生方の精神障害も増加傾向にあると思う。

市の家庭児童相談員だったことの繋がりや、近隣の市の保健センター等で、保健所と共に行っている虐待予防のための「子育て検討会」のスーパーバイザーとして関わるようになり、多くの子育てに関する問題を検討する機会も得ている。活動範囲は五市にまたがり、市によって地域特性らしきものも見られる中、ここでもやはり保護者の精神疾患、発達障害、人格障害はじめ、離婚、再婚、再再婚などの家族の問題も増えてきた。虐待までは行かなくても、リスクの高い家庭のなんと多いことか・・・。

また、教育委員会でも相談を受けており、小中学校の子どもたちの相談や、学校からの相談にも応じている。教育委員会では、基本的には、いじめ、不登校と発達障害の相談が主体になっている。

平成16年に個人事務所を開設し、乳幼児から老人まで、あらゆる相談を受けるようになったが、全相談の6割程度は子どもに関する相談である。公的機関で無料相談を受けている関係で、私設事務所での同様の相談を有料化することに抵抗を感じ、市内の小中学生、及び高校生については無料相談を実施している。そのため、私の事務所は、赤字経営で、スクールカウンセリングなどで得ている収入を維持費に当てている状態である。

その様な中、地域に子育て支援機関がつつぎ生まれ、それぞれが様々な活動をはじめたが、横のつながりが比較的弱いことに気付いた。これでは、支援を求めてきた親たちが、たらい回しにされかねない。そこで「子育て支援を考える会」を作った。この会は子育て支援をしている人のための会で、福祉団体として登録し、年6回の研修を実施しながら、各機関の横のつながりと、支援者

としての知識、技能の向上と、ピアカウンセリングの役割を担えるよう、心がけてきた。その活動も6年になる。6回の研修のうち1回は一般向講演会を開催し、様々な講師の方に来ていただき、一緒に勉強してきた。この会でも親子の様子が沢山語られる。虐待、DV、精神疾患など最近の親の問題や子どもの問題、学校や保育所、様々な機関に所属している会員からの現場の様子、子育て支援についての各自の考え方などを自由に話し合い、愚痴をこぼしたり、議論を交わしている。

また、広汎性発達障害など、かつて、軽度発達障害と呼ばれた子ども達の保護者の会「フレンドリー カフェ」も立ち上げた。健常児だけではなく発達障害のある子を持った親の育児支援も必要と感じたからである。同じ悩みを持つ親同士の支え合いだけではなく、専門家も入っており、子どもの年齢も幼児から高校生までいるので、こまごまとした母親たちの子育て上の問題解決から進路の問題まで、気楽に話せる環境となっている。現在は月1回の母親の会「ママ カフェ」と二ヶ月に1回の父親の会「パパ カフェ」が開催されている。

様々な仕事を通じて、仕事内容は広がり、家事調停委員や大学講師、企業カウンセラーなども行っており、日々居場所が異なる。個人事務所での仕事も含め、月平均1000km以上を車で移動をしながら、地域を主体に活動している。北海道は広いが、車での移動が比較的楽なので、片道200kmくらいまでであれば、日帰りで仕事をしに行くこともある。例えば千歳 札幌間は高速で30分余りで、ETC割引が助かっている。但し、今回の高速料金の改定で、一部値上げになるとされているその一部に千歳 札幌間が入っていることはちょっと不満であるが・・・。

さて、このように地域で長年活動を続けていることのメリット、デメリットは何か？

メリットとしては、子ども達を縦軸で見ることができ、どこかで相談に上がってきた子どもの家族背景などをつかみやすいこと、関係諸機関との連携がとりやすいことなどであろう。また、あちこちの機関と繋がっていることで、一つのケースについて多機関が関わる時など、守秘

義務の範疇ではあるが、その繋ぎになることが可能であるし、ケース理解に役立つことも多い。更に、子どもが小さい時に相談した経験から、再び子どものことや親自身のことで悩み事ができた時に、相談に来易いということもあるようだ。

一方デメリットとしては、相談者側からすれば、「知られている」人がそこにいることがかえって不安な場合もあるだろう。東京のような大都会にいるわけではないので、買い物に行っても、知っている人に会う確率が高くなってきて、出来るだけ人のいない時間に買い物に行ったり、人の顔を見ないようにしながら買物をしたりなどという工夫も必要になっている。そのお陰で、知り合いに気付かず、目の前まで来て挨拶されることも度々である。また、小さい町では、「このカウンセラーは駄目だ」という噂が少しでも立つとあっという間に広がり、仕事にならなくなるというリスクも背負っている。人間関係の失敗は極力避けなければならない。

メリット、デメリット両方あるものの、私が関わった子ども達が親の世代になり始めている今、地域に根付いた仕事と言うのも、子育て支援としては重要だと感じている。

こうした子育てに関する相談、コンサルテーション、あるいはスーパーバイズの仕事を通じて、日々、子育て支援そのものについて考えるようになった。子育ては昔と今とそれ程違うのだろうか？ どうしてこのように、子育てが難しくなってしまったのだろうか？ なぜ子育てに、これだけ閉塞感が生まれるのか？ また、子育て支援は一体どこまで続ければ良いのか？ 何が本当の意味で「良い支援」といえるのだろうか？

子どもを育てるということは、楽しいことよりも、苦しいこと、辛いこと、悩むことのほうが圧倒的に多いだろう。今までお会いしてきた、父母の殆どが、子育て、親育ちで悩んでいる方ばかりであった。そんな大人たち、そして子ども達のために、少しでも子育てが楽になることを目標に支援を続けてきた。今まで行ってきた子育て支援について、これからゆっくりまとめてみようと思う。

不妊治療現場の 過去・現在・未来

～沈黙の時代～

荒木 晃子

不妊よもやま話

「不妊治療の原点は、ウシの繁殖の研究にある」 -
これは、本当のおはなし。
約 250 年前、イギリスでウシを繁殖するために研究
開発された生殖技術は、いまでは、その原点を知る
ひとよりも、不妊を治療するという「生殖医療の一
環」としての認識をもつひとの方が多いかもしれな
い。かくいう私も、人工授精という「ウシの生殖技
術」を「ヒトの生殖の問題解決に応用」とは、
なんて斬新で奇抜な発想をしたのか、と感心したう
ちの一人だ。同時に、人間も所詮動物なのだな、と
も思う。ヒトという動物が生き残るため、そして、
種の存続のために生殖医学ははじまったのだ - そう
考えると、時折メディアを通じて耳にする、「最先端
科学が人類の未来を切り開く！」というキャッチフ
レーズを、いぶかしくも、ちょっと誇らしげに感じ
るのはわたしだけではないだろう。しかし、これは
あくまでも、他人ごとに限定したおはなしの場合。
万が一、生殖の問題が自分自身に降りかかってきた
ら？なんて、想像したくもないほどやっかいな問題
だけれど、残念ながら、生殖年齢の世代は誰にでも
その可能性がある。

現在国内に、約 140 万人以上もの不妊に悩む当事
者がいるが、その大半はパートナーを持つ生殖年齢
にある男性と女性だ。さらに、生殖の問題が自分以
外の家族、たとえば、自分のパートナーに、また、
子どもたちや孫、兄弟姉妹に起きた場合も、当然他
人ごとではなくなる。ということは、約 140 万人以
上の不妊当事者×家族の数ほど、生殖の問題は“他
人ごとでは済まされない問題”として潜在している
ということになる。通常、ひとは、考えたくも想像
したくもないほどの重大な問題にかぎって、対応手
段を持たないことが多い。確かに、どうすることも、
どうしてあげることもできない問題には、“関わらな
い”という常とう手段も、あるにはある。しかし、
自分の大切な家族が悩んでいるとき、果たして、い
つまで見て見ぬふりをし続けられるだろうか。つい、
“何も策を持たない”けれど励ましたり、時には親
切心で、常識的なアドバイスをしたりする経験は、
誰にでも一度くらいはあるだろう。

一般に、孫の誕生を待ち望む親が、子どもができ
ない息子や娘夫婦に言葉の干渉を始めるとは、昔か
らよくある話だ。昔といっても、不妊の歴史は想像
以上に長く、江戸時代前期の医学書にはすでに、不
妊に関する記述があったという。時期は、1754 年国

内初の人体解剖が行われたその20年後、杉田玄白らによる翻訳書『解体新書』が出版される以前にまでさかのぼる。その出典は、西洋医学が支配的になる以前の、民間療法や中医学（いまでいう漢方医学）にあるとの説がある。不妊は、意外に奥が深い。歴史があるなら、伝統もあるのかもしれない。医学史にみる「不妊と医療」の密接な関係は、おそらく時代に生きる家族と共にその歴史を刻んできたのだろう。おそらく、不妊治療のない時代に生きる家族も、常に不妊問題と隣り合わせにあったにちがいない。それでは最初に、当事者援助の糸口となる“案外身近な不妊問題”を知るために、「生殖と医療」の知識を仕入れてみよう。

不妊治療ひとこと解説

現在国内では、全体の3分の一にあたる約50万人を超える当事者が、不妊治療を選択している。一般に、「ひとの生殖の問題を医学的に解決する手段」を不妊治療とよび、以前より、一般不妊治療として実施されていた人工授精は、『男性の精子を人為的に女性の体内に注入する医療行為』で、性交はしないが自然妊娠と原理は同じ、ともいえる。また、近年マスメディアや研究者が注目する、体外受精や顕微授精といった高度生殖補助医療が国内で普及し始めたのは、いまから約30年ほど前である。それらが人工授精と違う点は、妊娠成立までのプロセスが、女性の子宮内で自然に進行するのではなく、子宮の外で操作的に進行する点にあった。

ここで、体外受精と顕微授精に共通する『ジュセイ』という文字をみると、体外には『受精』、顕微には『授精』という表記が使用されている。この二つの違いは、体外受精は、子宮の外で卵子と精子が『自然に受精するため』の環境要因を人為的に整える医療行為をいい、受精そのものに人の介入はない。しかし、顕微授精は、卵子に精子を注入するという人為的行為によって授精成立を目指す医療行為であり、そこには『人の手が介入する』という特徴がある。なかでも、顕微授精は特に、「生命倫理に反する」、「神の領域を侵した」といった一部の世論を受け、生殖が医療の問題として脚光をあびる一因となっている。

歴史の幕開け

本稿では、「ひとの命を操作すること」への賛否を問うつもりは毛頭ない。不妊の問題を、他人ごとでは済まされない家族の問題として提起し、その援助を探りたいと考えている。そのためには、不妊問題を持つ家族に「何が起きたのか」を知らなければ、何も始まらない。当事者の経験から学び、そこから、援助の糸口を探そうとするものである。

サイレント・マイノリティといわれ、沈黙の歴史を持つ不妊と、その家族の過去をたどることは不可能に近い。しかし、いまを生きる当事者の肉声から、その時代に生きた「不妊と家族の物語」を知ることができる。本稿では、「不妊治療現場の過去・現在・未来」のそれぞれを生きる当事者の証言を、時系列に沿って紹介し、かれらに起きた「不妊と家族の問題」を検証することから、その問題解決手段を掘り下げていきたいと思う。

創刊号にあたる第1回目の社会背景は、不妊治療がまだ国内に普及していなかった時代の物語。第2次世界大戦終結後、戦後復興のなかで生きた不妊当事者と、その家族の「沈黙の物語」だ。語ることのできなかつた時代を生き、いま、沈黙を破り、「その生きざまを語る時が来た」女性の語りである。生殖医療の短い歴史以前、不妊を治療する術をもたなかつた当事者とその家族が、その時代をどう生き抜いたのだろうか。不妊と家族の歴史を、その時代を生きた当事者の証言でたどってみよう。

「沈黙の物語」

エピソード

“うまずめ”とよばれた女性の語り

「あの頃は、みんな、ああするしかなかったんだろうねえ。戦争(第二次世界大戦)でおとこの人がみんないなくなってしまって、結婚するにもまわりはおなご(女性)ばかり。相手を選ぶなんてできない時代だったからね。」

深いため息をつき、静かに微笑んでA子さんは語り始めた。彼女は昭和の時代に青年期を生きた女性の一人だった。第二次世界大戦中、疎開先で戦前の学校教育を

うけ、戦争が終結したころには、ちょうど結婚を意識する年齢だったという。

「あの時代、おなごはみな二十歳前には嫁にいったもんよ。いまみたいに、おとこもおんなも大学に行く時代じゃなかったからねえ。そもそも、おんなが大学に行けるようになったのは、確か戦争が終わってからでしょう？それまでは、おなごの分際で学校にいったらどうするのか、って親にも叱られていたくらいだから。おんなは、いいところへ嫁に行って、子どもをたくさん産んで、亭主にかわいがってもらう、これが幸せって思っていたんだから。え？わたし？もちろんわたしもそう思っていましたよ。結婚して、たくさん子どもを産んで、それがおなごの幸せなんだから。あなたもそう思うでしょ？」

確かに、そうかもしれない。そういう生き方も、幸せになるためのひとつの選択肢なのだと思う。しかし、時代はかわり、女性が自身の生き方を選べる時代になった今、彼女の意見に賛同する女性たちは、以前ほど多くはないはずだ。

その後、A子さんは女学校を卒業し、終戦後、親のすすめるままB氏と婚姻関係を結んだそう。B氏は出征免除を受けた、温厚なお人柄の男性で、当時数名の職人を雇い自営業を営んでいたという。ふたりの結婚生活は、経済的には比較的豊かで夫婦仲はよかつたらしい。その結婚は、A子さんのいう「おんなの幸せな生きかた」への順調なすべり出しだったのかもしれない。人生のパートナーを得て家族をつくる、という家族の形成過程は、きっと、昔も今も何も変わってはいないんだ、そう思った。

多くの青年男性を戦場に駆り立てた戦争は、国内に残されたたくさんの女性たちが子どもを産み、家族をつくる可能性をも奪っていた、という事実を知った。その中で、A子さんは、相手を選べないまでも、人生の伴侶を得たのだった。戦争が残した爪痕は、戦後日本の復興の陰に隠れて見えなかった「戦争を生き抜いた若い女性たちのはかない夢」を打ち砕き、あたらしい家族の未来をも奪ってしまったのだ。改めて、戦争が残した罪を実感した。敗戦後の荒廃した社会の中で、夫婦で苦労を共にした生活の様子や、共に戦争を生きぬいた足跡を語るなか、A子さんは再び大きく息をつき、同時に、それまで浮かべていた笑顔がくもった。

「まあ、人生、そう、うまくいくとは限らないもんよね。わた

しには、子ができなくてね…うん。亭主には申し訳ないし、親も『このままじゃ面目が立たない』ってね。結局、家に帰って来い、ということになって…。いまは、どうか知らないけれど、むかしは、決して珍しいことではなかったんよ。うまずめは、家に戻るのが当たり前だった。『嫁して三年子無きは去れ』ってことわざがあるでしょう？子を産めない娘を嫁がせた親も、嫁ぎ先に謝りに行ったもんよ。そんな時代だったんだね。(しばらく沈黙)当時、わたしには年頃の妹が二人いてね、そのうち上の妹が、しばらく一緒に暮らすことになったの。その子はちょっと体が弱い子でね。まあ、いまから思えば、親も色々考えた末のことだったんだろうねえ。当時は、親のいうことは絶対だったし、ましてや親に背くなんて、だれも考えなかった。わたしも妹もそれでいいと思った。そうね…少なくとも、わたしは、そう思っていたと思う。」

初対面のあいさつで、「不妊の研究、特に、不妊に悩む当事者の援助体系をつくり、子どもができない夫婦の家族支援を研究している当事者です」と自己紹介したわたしを、「そう！？そんな時代になったのね～」と満面の笑みで迎えてくれた理由が、初めて理解できた気がした。同時に、話を聞いている自分自身の笑顔が消えたことにも気が付いた。

「どれくらいたった頃か…妹に子どもができてね。そう、もちろん、亭主の子どもですよ」

おもわず、「え？そんな！」と絶句するわたしの言葉を遮るように、A子さんは続けた。

「ほかでもない、実の妹に亭主の子どもが生まれるんだから、そりゃ、うれしかったわよ。親も亭主も、みんな喜んでくれたしね。わたしも、これでいいんだ、っておもったね」

子どもが誕生する前に、A子さんは妹と3人で暮らす家を出た。当時、離婚した女性を「出戻り」とよぶ慣習があり、一度嫁ぐと、実家へは簡単に戻れない時代だったらしい。その中で、“うまずめの女性”は実家へ帰るケースが多く、離婚の正当な理由として周知されていた、とA子さんは説明した。また、子どもができず離婚した女性は、妻を亡くした子持ちの男性の再婚相手として歓迎され、A子さんもその例外ではなかった。実母を失った子どもたちの母親として、再婚相手の男性とその後の人生を送り、晩年は、その男性の最期を看取ったという。最後に、**「いまは、時折帰郷する子どもたちが連れてくる、元気な孫たちの成長が何よりの楽しみです」**と満面

の笑みで語ってくれた。

彼女に思いを馳せてみた。選択肢のない時代に生まれ、女性が人生を選べない社会を生きたA子さん - 彼女をそう表現するには違和感がある。過去に経験した不妊ゆえの人生を、当時の社会背景や人々の慣習の中で生き延びた小柄な老女の語りには、悲しくもたくましく、複雑かつ明快に「生きるための選択肢」を選びぬいた、強靱な生命力を感じざるを得なかった。「あれは、不妊を生きた力だったのかも知れない」、ふと、そうおもった。

「沈黙の物語」

エピソード

“もう一つの家族”の語り

「成人し、戸籍謄本で自分の出生を初めて知った時は、正直おどろきました。父の最初の結婚相手が叔母だと知って…小さいころから、特に可愛がってもらっていて、親せきの中でも、一番好きな人だったのです。母とも仲が良く、うちにもよく遊びに来ていました。なのに、わたしが生まれるまで、父は叔母と結婚していたなんて！わたしが生まれてから、母と入籍したそうです。そのことを知った時は、何が何だか分からなくて、母に問い詰めたんです…でも、母は何も言ってくれませんでした。ただ、『仕方なかった。その時は』とだけ答えました。それ以降、そのことについては、誰も話そうとしません。もう、昔の話ですから…え？知りたいかって？そうですね…複雑です…でも、父のことは、男性として許せない気がします。娘としてではなく、同じ女性として。」

短いエピソードではあるが、うえは、Aさんの姪、つまり、“あの時誕生した” Aさんの妹の長女の語りである。彼女は現在結婚し、夫婦共働きで、ふたりの息子と親子4人で暮らしているという。現在、彼女の人生に不妊問題はない。しかし、彼女の出生は、「不妊と家族の問題」と背中合わせだったのだ。前述の、Aさんが語った内容を伝えることなしに、「不妊というテーマ」で彼女が語ってくれたのは、決して、他人ごとの話ではなかった。

おわりに

今回紹介した二つのエピソードは、不妊をキーワ

ードにその形態をかえた、実在の家族のケースである。まず、すべての語りを通して、未だに払しょくできない憤りが2点ある。Aさんをはじめとするこの家族の、「不妊と家族の問題」に対して、援助的立場の人間が誰も関与していない、という事実がそのひとつだ。次に、不妊をAさん個人の問題として、「Aさんを排除する」という手段で家族の問題を解決しようとした点、の2点である。不妊当事者は果たしてAさんひとりだったのか、不妊は家族に何をもたらしたのか、など、疑問は尽きない。確かに、「不妊と家族の問題」は、Aさんの人生に一瞬大きな影をおとしたのかもしれない。しかし、不妊を誰の問題として、家族がどう対処するかによって、その結果は大きく違っていた可能性がある。「過去に起きた家族の問題」であるこのケースの場合、「結果が変わる」とは、家族の未来が変わる可能性につながるはずだ。つまり、家族の「現在が変わる」ことを意味することにはならないだろうか。家族の選択肢は他になかったのだろうか。過去にたくさんの課題を残したまま、次号では、過去からつながっている「家族の今」を検証したい。過去から我々は何を学び、現在、家族はどのようにして「不妊と家族の問題」に対処しているのだろうか。不妊治療のなかった時代に生きた当事者たちには、その時代を生きるための知恵と選択肢が確かにあった。ならば、不妊を治療する選択肢を持つ現在の不妊当事者たちの、「不妊と家族の問題」はすべて解決されているのだろうか。不妊治療する当事者の語りから、「現在」を検証したいと思う。みなさんは、うえの「沈黙の物語」から、何を受け取っていただいたでしょうか。

謝辞：不妊を語る事を、「いまなら（話せる）」といっただころよく引き受けてくださり、そして、それを、本稿で提供することを「もう、（夫も亡くなり）時効だからいいでしょう？」と笑ってくださったAさんと、エピソード に登場した女性に、心から感謝申し上げます。おふたりは「時代の証言者」であり、その語りからたくさんの学びを探らせていただくことを、ここにお約束いたします。

対人援助学の里程標

サトウタツヤ

(立命館大学)



なんの因果か因縁か、学問の歴史に興味をもち、研究を始めて早くも20年。対人援助学会のメルマガでも歴史を連載することになりました。

動機の一つは歴史というものに興味を持つ人が増えてほしい、ということにあります。多くの方は中学や高校の歴史の授業の結果アレルギーをもっているようで、歴史と聞くだけで拒絶反応を示したりします。年号や出来事を覚えるだけなんて面白くないし大変、というわけです。この連載では、細かな年号にこだわるのではなく、出来事の大きな流れについて考えたり共感したり時には反感を感じてほしいと思います。

最近、私は臨床心理学史の執筆を行っているのですが(書き始めたのは5年前!終わらない・・・orz)、臨床心理学史の論文や本を読んでいると、前史がシャルコーからはじまることが多いということに気づきました。なぜか。フロイトの精神分析とその流れをくむ心理療法が臨床心理学の主流だという意識が強いからです。しかし、このような考え方は過去のものになるべきかと思われまます。フロイトの精神分析が多くの功績をあげたことは否定しませんが、現在の臨床心理学は決して精神分析だけで語ることはできないはずです。

そこで初回はライトナー・ウィトマー(Lightner Witmer; 1867 - 1956)をとりあげてみましょう。彼こ

そが Psychological clinic を創設し、Clinical psychology という言葉を作り上げた人だからです。

ウィトマーは1867年6月28日、フィラデルフィアに生まれました。アメリカでは南北戦争(American



Civil War, 1861 - 1865) 直後、日本で言えば明治に改元される直前ということになります。ペンシルベニア大学を21才で卒業したあと、二年間教職につきました。その後大学院に入学を決意しましたが、その時の専攻は哲学で

した。ところが、ジェームズ・マクィーン・キャテルが赴任してきたことにより、専攻を心理学に変更しました。このキャテルという人物はドイツのヴントのもとで学び、個人差の研究を心理学に導入したことで知られています。ところが、そのキャテルがコロンビア大学に異動してしまい、ウィトマーは「ハシゴを外された」状態に陥ります。そこで彼が選んだのがドイツへの留学でした。ライプツィヒ大学に留学し実験心理学を学び博士号を取得したのです(1892)。帰国した彼はキャテルが異動した後のペンシルベニア大学に戻り心理学を教えることになりました。1894年には児童心理学の講義を担当したことが分かっています。

そして1896年には同大学に世界初の

「psychological clinic (心理学的クリニック)」を創設したのです。そして大学院生の訓練システムも整えていきました。さらに、1907年には『Psychological Clinic』という雑誌を創刊するにいたります。

彼は「clinical」な心理学にどのような意味を込めていたのでしょうか。彼が自ら『Psychological Clinic』の創刊号に執筆した論文(Witmer, 1907)を見てみましょう。

ウィトマーは「clinical」という語を臨床医学から借りたものであるとした上で、医学において「clinical」は、単に場所を示す言葉ではなく、それ以前の哲学的・説教的な医学から脱却する時の方法を示していたと述べています。医学においても患者さんの状態を顧みないで診察治療をしていた時期があったのであり、それを打破するための「clinical」概念だったのです。心理学においても「clinical」が重要だということを彼は以下のように述べます。

While the term 'clinical' has been borrowed from medicine, clinical psychology is not a medical psychology.

これを日本語にしてみれば

‘臨床’という語は医学から借りてきた語ではあるが、臨床心理学は医学的心理学とは異なる。

ということになります。しかし、この文章をどう理解するか、チマチマした話ですが、この文書にこそ、ウィトマーの心意気が現れているのです。

アメリカにおける医学的心理学というのは、今日では精神医学に合流してしまった流れです。従って、ウィトマーは医学とは一線を画したいと思っていたと思われます。実際、彼が対象にしていたのは失読症もしくは読字障害の子どもたちでした。

さらに臨床心理学は、哲学的思索に由来する心理学的・教育学的原理への異議申し立てであり、実験室の結果を教室の子どもたちに直接に適用しようとする心理学への異議申し立てである(Witmer, 1907)。

という文章もあります。

これまで、ウィトマーの臨床心理学や心理学クリ

ニックはあまり評価されていませんでした。それは精神分析やカウンセリングという方法と少し異なっていたからだと思われます。対人援助という光のあてかたをするなら、もう一度、異なる評価が可能になるかもしれません。

Witmer, L. 1907 Clinical Psychology. Psychological Clinic, 1, 1-9.

写真の出典：ペンシルバニア大学アーカイブ

<http://www.archives.upenn.edu/home/archives.html>

小さな「怪獣たち」 との ドラマセラピー

尾上 明代

立命館大学大学院

はじめに

ドラマセラピーは、「ドラマ・演劇のプロセスと結果を系統的、また意図的に用いて、症状を緩和する治療を行ったり、感情的・身体的な統合をすすめたり、また個人の成長を達成させようというもの」である（米国ドラマセラピー学会の定義）。

何故、「架空」のドラマで演じることで「癒される」のだろうか。それは、設定が架空であっても、そこに表出されている「感情」は「本物」だからである。むしろ「架空」の空間だからこそ、「現実」で直接、表出・表現できないものを安全に外在化させることが可能となるのだ。パラドックスのようだが、これがドラマセラピーの基本的で重要なセオリーであり、魅力でもある。

私はこれまで教育・臨床・企業などさまざまな場面でドラマセラピーを実践してきた。子ども対象のセッションとしては、一般の小学校で多く行ったが、このマガジンの連載では、ある児童養護施設で継続的に行ったセッションのプロセスを記述したいと思う。被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、読者の皆さんに伝えることが少

しでもあればと希望している。ドラマセラピーの概観や理論的な説明は、最小限度に留め、ここでは具体的な一グループの事例ストーリーを読むことを通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただきたいと思う。事例に出てくる登場人物は、すべて仮名であり、プライバシーを守るために、状況などは一部変えてあるが、本質的には実際におきたことが正確に伝わるように描写する。

言うまでもなく、子どもは大人より想像力・創造力が豊かである。今までの私自身の経験からも、大人よりずっと簡単に早くドラマの世界に入り込み、癒されることができていることがよくわかる。私自身が相手役をする即興ドラマの中で、私に向けられる子どもの生（なま）の感情を丸ごと受け容れ、ごく短い時間でも可能な限りその瞬間を「共に生きる」ことで、彼らは普段出せずに抑えていた感情（特に攻撃的な気持ち、怒り・不満などのネガティブなもの）や他人に面と向かって言えないこ

と・現実にはできないことをすぐに表現してくれる。そのプロセスの中で、子どもの心は救われ、暴力性は昇華され、ストレスは癒されていく。また満足感・成功感やカタルシスを与え、結果的に彼らの自尊感情を高め、創造性を引き出すことに貢献できると考えている。しかし、対象者が養護施設の子どもとなると、一般の小学校でのプロセスとは違い、その道のりが簡単ではないのは、想像にかたくない。果たして、どのような出会いが待っているのだろうか？その先に光は見えてくるのだろうか？

対象者が大人でも同じことであるが、特に初めはシリアスな雰囲気を作らず、あくまで仲間と一緒に楽しいドラマということも大切な点である。そして頼りになるのは、こちらの心構えや技術だけではない。どれほどの傷を受けた人であっても、その人の中に回復しようとする力があると信じて、その「力」も頼りにする。また一緒にそれを高めることのできる「グループの力」も重要であり、それを引き出すことが、ドラマセラピストの仕事であるとも言える。

一人の子どものネガティブな感情も、決してその一人の子どもだけの孤独なものではない。観客（一緒にセッションを受けている仲間）も我がことのように共有するプロセスが起きる。それだからこそ、子どもたちは癒されるのだろう。「セラピーとしてのドラマこそ、真実が開示され、深いレベルのコミュニケーションと理解が得られ、個人的なことが普遍的なものとなる舞台を提供するのだ。」とアメリカでのドラマセラピーのパイオニアの一人、ルネ・エムナ も述べている。

A 児童養護施設での出会い

ここには、さまざまな家庭の事情で親と暮らせなくなった子どもたちが保護されて、共同生活をしている。ほとんどが、身体的・精神的虐待や、育児放棄などの理由で入所にいたっている。当然ながら心が安定していたり満たされている子どもは一人とし

ていない。険しいセッションの先行きを予測しつつも、ベストを尽くしたいと思う。

まずは、施設側が選んだ小学校1年生から3年生の子どもたち10人に、3回の連続セッションを、お試して実施することになった。協力してくれるスタッフは、この施設に勤めるエリさんと浩二さん。浩二さんは、ある大学の生涯学習センターで行った、私の連続セッションに参加したことのある演劇青年である。

ある年の晩秋。初めて会ったA施設の子どもたちは、小さな怪獣たちのようなだった。多くの子どもが難しい個性をもっていて、ぶつかり合いも多くひどい騒ぎで、当然ながら小学校で行うときのようなわけにはいかない。簡単で楽しいゲームをしようとしても、その説明を聞く子もほとんどいない。わーわー言って走り回っているだけだった。そこで秘密兵器の出番となる。私が一人何役にもなって、お話を演じてみせるのだ。この秘密兵器は、それまでの経験では、100回「静かにして！」と叫ぶより効果的だった。いつものように私が演じ始めると、突然、水を打ったようにシーンとなり、みんな見入っている。秘密兵器は怪獣たちにも効くことがわかった。

この話の最後の部分に、行商人の帽子屋が、居眠りしている間に手作りの帽子を山の猿たちに盗まれる場面がある。でも結局、猿は帽子屋の作戦にひっかかり、帽子は無事に返ってくる。私が演じたあとに、子どもたちに猿になってもらい、みんなで再演することにする。この時点で、すでに全員が即興でドラマを演じることができるようになっていた。それまでの小学校の子どもたちと行ったときと違ったのは、「バナナをくれないと帽子は返さない！」という猿たちが出現したことだった。私（帽子屋）は、言われる通りにバナナをあげたが、それでも返してくれない反抗的な猿たちもいた。もちろん、どんな猿も、どんな筋書きでもOK。子どもたちから出てくるものは、すべて受け入れる。

・・・このようにして、私と傷ついた小さな怪獣たちとのセッションは開始した。

「お母さん」とのドラマ

次に、浩二さんに子ども役になってもらい、母親

役の私と短いドラマ場面を子どもたちに見せる。一つ目に登場するのは、勉強しなさいと子どもを叱る怖い母親と、おとなしくて言い返せない子ども。彼は、「勉強してるよ、でもわからないんだ」と静かに言う。観客の子どもたちの心が、その場に参加しているのがよくわかる。すると一人の男の子が、「うんこすればいい!」とふざけて言う。私(母親)は、すぐにそれを受けて、「うんこしたら勉強できるようになるのかしら」というと、言った本人にも他の子どもたちにも大ウケし、キャーキャー言って喜んでた。どんなことも受け入れるということを、このように示していくと、彼らは早く安心し、私というセラピストを信頼し始める。特に初めが肝心だ。

次にもう一つの場面を浩二さんで行う。怖い母親はそのまま同じで、浩二さんには、今度はしっかり母親に反抗してもらおう。その後、子どもたちに、「私(母親)とのドラマをやりたい人?」と投げかけるとほとんど全員が「ハイ!」と手を挙げた。そこで怖いお母さんでもお父さんでも、優しいお母さんでも、とにかく私はみんなの希望通りの誰にでもなるということを告げる。ドラマセラピーの手法は非常にたくさんあるのだが、この短いドラマは、私が編み出した「受容とミラーイングの即興ドラマ」という手法である。仲間が観客として見ている中で、短時間の一对一のドラマを行うもので、相手役を演じる私の受け答えとストーリーの流れに効果をもたせ、最も治療的な瞬間を創るのが意図である。

A君は、優しいお母さんとのドラマを希望した。おやつにガリガリ君(アイスクャンディー)が食べたいというので、持ってきて「あーん」と食べさせてあげる。普段の彼の様子を知る浩二さんは、「きょうは、A君の本当に幸せそうな顔が見られた」と驚いていた。彼は被虐待児というわけではなく、事情で小さいころからずっと施設暮らしだったとのことで、「母親に甘える体験」が、とても嬉しかったようだ。

何人かが、「超怖いお母さん」になって」と言ったので、私はリクエスト通りに演じ始める。反抗でき

る子どもにとっては良いことだったが、反抗しようとしても、できない子どもの場合、私は随分手加減して、なるべく彼らと行動をともにしたり、好みのおやつをもっていく場面を創るなどして対応した。たとえばB君とは、一緒に本を破き、おやつに「でっかい豚肉のかたまり」を出してあげる。奇妙なおやつだが、本人には何か意味のあるものなのだろうから、リクエストを受け入れた。

りんごちゃんは、「普通のお母さんやって」と希望した。普通の母を演じるのは、かえって難しい気がしたが、出来る限りやってみた。やはりガリガリ君をあげる場面で終わったが、嬉しそうだった。セッション後、浩二さんは私に、「彼女の実際の母親が精神的な病気を患っているので、「普通のお母さん」を希望した気持ちがよくわかる」と言った。



撮影: Drama Education Network

「レバー」を食べさせるお母さん

二回目のセッションでは、前回、猿のドラマがウケたので、今度は猿たちみんなでレバーを食べる設定を創った。たまたまレバーが大嫌いな子どもがいることを聞いたので、楽しいドラマをやって食べられるようになれば、との思いもあってのことだった。

「レバー食べないと山に連れて行っちゃうよ!」という怖いお母さん役をスタッフに頼もうと思ったところ、C君が「僕が怖いお母さんになる!」と勢い込んで一番乗りになってくれた。前は、ドラマはやらないよ、と全く関与しなかったのが、スタッフは驚いていた。その日は当初、お母さん役を子どもたちにやってもらう予定は無かったのだが、もちろんやってもらうことにした。C君は強いエネルギーで怒った。それに続いて他の何人もが「怖いお母さん」をやった。結局、「お皿に山盛りのレバー」を

いっぱい食べた(食べさせられた)のは、私だった。
「お前なんて山でスクラップにしてやるからな！」
「食べねえとぶっ殺すぞ！」子どもたちは、真の感情をはき出している。しかし私は、場の雰囲気をシリアスにしすぎないように、そしてあくまで遊びの中という枠組みに留めるために、「えーん、怖いよお～」と、少しコミカルな雰囲気を創り、相手の子どもの様子を見ながら進めていく。

怖いお母さんたちは、次々に私(子ども)に強制的に食べさせる。私は毎回、懸命に「いじめられて」吐きながらも食べる。そのうちレバーがうんこに変わり、それも頑張って食べる。まるで本当に「それ」を食べているように「気持ちわるーい・・オェ!!」とリアルに演じる。彼らの創ったドラマの筋を誠実に受け入れて「食べる」と、怖いお母さんたちは、もうそれ以上はしつこくいじめなかった。B君などは水をもってきてくれたので、「ありがとう!」と感謝した。セッション後、浩二さんは、「施設で実際にB君の嫌いな食べ物が出たとき、年上の方が、そうしてくれたことがあったからではないか」と言っていた。A君は、「お母さん。ちゃんと食べたから、もう許して。」と私が言うと「よろしい!」とはっきり言ってくれた。

D君も、怖い母親になり、かなり大きなエネルギーで怒っていた。後でスタッフのエリさんは、「実の父親をイメージしていたのか、ふざけてる雰囲気の時があったが、目が全然笑っていなかった」と言っていた。でも私(子ども)が「お母さんもっと優しくしてえー」と頼むと、少しずつ柔らかくなっていて、最後には私にガリガリ君を10本もくれた。

殺したい

その後、再びB君と世界一怖い母(私)とのドラマをした。一緒に家を壊し、家出して熊(浩二さん)を食べた。次は「全員殺したい」という。私はリアルな感覚を避けたかったのと、でも何とか気持ちを受け止めていることを彼に伝えたかったので、とっさに足元の床を指して「ここに人間の魂を集めて殺そう」といって、手で空間をかき集める動作と、全く殺人には見えないアクションをし、彼の提案を無視しなかったことを示した。B君は、後でスタッフのエリさんに「怖いお母さんって言ったけど、普通

に遊べたよ」とうれしそうに報告したそうだ。他の子どもみんな「怖いお母さん」をリクエストするが、それは「優しいお母さん」とのドラマで癒されるところに行くプロセスなのかもしれない。この日のB君は私を受け入れ、一緒に楽しく演じる理想的なすごし方ができていたと思う。3回目のセッションでは、彼は最初は母親(私)に反抗して「家出」をしたが、「B、戻ってきておくれー」と母が泣くと、結局「百万円稼いできた」と戻ってきてくれた。母親が喜ぶと、「超怖いお母さんと家を壊して家出する」という。二人で行った先は、回転寿司。一緒におなかいっぱい食べた。

E君は、3回目のセッションで、世界一怖い妖怪(私)とのドラマがしたいという。他の子どもたちが騒いでいて、1対1のドラマがきちんと進まなかったが、爆発的な反抗、怒りのエネルギーが沢山あるのを感じた。まだ全然、出足りない。「何がしたい?」と聞くと彼はずっと「殺し合い!」といていたが、まわりの子たちの状況などもあって、「本格的な殺し合い」は無理と判断した。充分受け入れている、という雰囲気で対応をし、その「殺したい」エネルギーをマイルドな他のことに向けようと、何回か試みたがダメだった。次の機会があるなら今度は是非、まわりの状況を整えてからコンフロントしたいと思う。

「受け入れられる」のが怖い

マツオ君は、世界一怖いおじいちゃんやお母さんとのドラマを希望してきた。本人のリクエストなので、はじめは怖く演じたが、反抗してくるエネルギーがほとんどなく、かなり手加減した。きちんとしたストーリーの流れが全く創れない。言うことが次々に変わる。それでも一つ一つの彼の言動を受け入れて対応していこうとした。相手(私)が自分にきちんとアテンションを向けると逃げ出してしまう。普通に向き合えない。「照れ」とは違うと感じた。ドラマの中で私に逆らっているし、何も一緒にしてくれないので、一見反抗しているように見えるが、実は「反抗」ではない感じを強く受ける。表出される感情もくるくる変わる。一人の人間として認められそうになると、それに応ずることができず逃げてしまう。自分の希望通りになること、自分が受け入れ

られることが怖い、という感情である。彼はきょうだいが大変多く、親が育児困難なために姉と入所してきたとのことだった。

2回目の、私とのドラマのあと、エリさんが「いつも甘えるタイミングが悪いマツオ君が、ドラマのあとずっと私にだっこして甘えてきた」と言った。おそらく今まで、きちんと100%受け入れられたことがなくて、無意識に「タイミング悪い時」をわざわざ選んでスタッフに甘えていたのではないか。そして「やっぱり受け入れられなかった、甘えさせてもらえなかった」という事態を自分で作り上げて納得していたのではないだろうか。この日、ドラマがきっかけで、多少なりとも「僕はひょっとして受け入れられてもいいのかな？」と、自分で自分を試すために(もちろん無意識で)エリさんのところへ、「タイミング良く」甘えることができたのだ。彼にとっては非常に大きな一歩だったと感じる。さらにその時エリさんに初めて、実の親から叩かれた話をしたそう。セラピストの私とのドラマ後、(私はもう次の子どもとドラマをしている時)施設の職員の方が、その場に一緒にいて、このように彼を受け入れる、という状況はすごくよいことだ。

3回目のセッションでは、彼は一番に私とのドラマに出てきた。私が何になったらよいのか聞くと、ばばあ、トランプのババ、口さけ女、うんち、カップ・・・などと言っていたが、結局、こわーい妖怪とのドラマになった。「マツオー。何してるんだーい!?俺にもやらせろー。一緒に遊ぼうぜー!」と話かけても、やはりストーリーは作れず、すぐに「終わり!」と言って自分から終わらせ、逃げてしまった。しかしセッションがすべて終わったときの彼の雰囲気は、今までで一番良かった。

後日、子どもたちの手紙をスタッフが送ってくれたのだが、マツオ君の手紙は意味深長だった。こわーい妖怪「あけよさん」(私)の絵と、その横にお墓が描かれ、「しんだ」と書いてある。「怖い」私を葬ってくれたのだろう。そして、あんなにも逃げてしまっただけでドラマ内ではまったく関係が作れなかったにもかかわらず、「ドラマが一番大好きでした。さむくなったので、かぜをひかないでください」と書かれていた。

いちごちゃんと、りんごちゃん

いちごちゃんとは、地球一怖いお父さんとのドラマだった。私(父親)が怒鳴っても、「お前なんか怖くねえ!」などと反抗と拒否を続けていたが、父が「おい、父さんがいちごの算数の宿題やってあげよう。そしたら一緒に寝よう」と語りかけ、歩みよると、どんどん素直な雰囲気になっていった。

いちご:「あのね、犬と猫をあした学校へもって行かないといけないの」

(見ていた子どもたちの中から犬と猫役が、自発的に出てくる。猫になっているのは、いちごの実の妹のFちゃん。この二人姉妹をこの施設に預けたのは彼女たちの父親である。事情があって母親とはずっと会えない状況だと聞いた。)

父:「そうなのか」

いちご:「この猫はアメリカンショートヘア、この犬はチワワ」

父:「可愛いなあ。よしよし。じゃ、これから4人で暮らそう。」

いちご:「うん!」

父:「父さんも、きょうは疲れた。もう寝よう。一緒に」

いちご:「うん!」

照れくさそうだったが、いちごちゃんは、とても満たされた表情をしていた。妹のFちゃんも一緒に嬉しかったに違いない。

りんごちゃんは3回目に、「世界一、爆発するほど怖い施設の先生とのドラマ」を希望した。この日は全体的に他の子どもたちが騒いでドラマに入ってきて、ばたばたしてストーリーのハッキリしないものになったが、とにかくどんなドラマであっても、最後はみんなが猫になって私にウンチやおしっこをかける、ということが起きた。私は彼らを受け入れ、彼らに謝り、彼らに勝利感を味わってもらおうとした。りんごちゃんに「今まで先生はおこりすぎて嫌な思いさせてたんだなって反省した。きょうはお菓子も買ってきてあげる。でもこのままじゃウンチだらけで買いに行けないから一緒にシャワーあびてお風呂に入ろう。」と言ったとき、みんなは急に静かになった。一応ハッピーエンドで終わることができた。

りんごちゃん個人としても、3回とも順調に気持

ちを表現し、少しずつではあるがドラマに慣れてきて、気分も落ちついてきたと思う。

「超怖い」お母さん

3回のセッションのほとんどのドラマで、私は、彼ら自身のリクエストによる「超怖いお母さん（お父さん、先生、妖怪など）」を演じた。しかし多くの場合、彼らは、私の「怖さ」にちゃんと対抗できずにいるのがすぐにわかったので、ものすごく手加減した。というより、途中からはほとんど怖くないお母さんにならざるを得なかった。しかし私が怖くなくなってきても、ほとんどの子どもたちは甘えてくるわけでもなかった。そこで、さりげなく相手を受け入れ、出来る限りハッピーエンドにもっていった。でも、リクエスト通りやってるよ、という体裁にしたかったので、時々思い出したように「私はさ、超怖いお母さんなんだよ！」などと怒鳴っていた。

それにしても、ほぼ全員が「世界一、超怖いお母さんになって！」という意味は何だろう？ 怒りたい、ということは考えにくいので、やはり 反抗したい（自分も怒りをぶつけたい）ということと、

優しいお母さんとのドラマをすんなり素直にやるには、まだまだ抵抗がある、ということだろうか。2回目、「優しいお母さんとのドラマ」をエリさんと演じて見せたとき、「うそー！」とか「こんなのないよー！」と口々に否定していたので、抵抗というより、現実味が感じられないというのが正解かもしれない。胸が痛む。しかし、回を重ねてドラマの中ではっきり、堂々と甘えられれば、もっと彼らは癒されるだろう。彼らの場合、甘えることが出来るためには、その前に反抗したい気持ち、怒りや我慢を出来る限り吐き出す必要があると思う。さらにそのためには、ドラマの相手役（私）を全面的に信頼できなくてはダメだ。それができれば彼らの現実生活も変容していくはずである。

最後に出し切る

さて、3回目は、どの子どもとのドラマにも、皆が騒いで出てきて混乱していた。そのせいで1対1のドラマが大変やりにくかったが、このことにも大きな意味があると思う。これは、グループで行なうドラマセラピーの利点でもある。

この騒ぎは、3回目で慣れてきたこと、「皆ですれば怖くない」的な気分になったこと、そして何よりも考えられるのが、最後のセッション、ということがあり、無意識的にも「出し切ろう！」としていたように感じる。また、この「みんなで爆発する」というプロセスを一通り過ぎたら、1対1のドラマも再びできるようになって、次の局面を迎えられると思われる。1対1のドラマ最中にみんなが私目がけて飛びついてきたり、騒いだり、また私が「超怖い人」として大声で怒鳴ったりしている大混乱の中で、突然誰かが「あけよさん、今日で最後？」と聞いた。（確かマツオ君だった。）私も「素」に戻って「とりあえず今年はね。」と答えたが、やはり、最後なら出し切ろう、という心が彼らに働いていたように思う。

それにしても、猫になったみんなは、私にこれでもか、これでもか、と執拗におしっこウンチをひっかけて大騒ぎをしたが、「怖い人」というイメージに対して、皆で、しかも猫という役になって、やっつけることができたというところが、まさしくドラマセラピーであった。

* * * * *

この後、施設が検討会議をして、翌年度春から正式に開始することになる。メンバーは10人では多すぎることもあり、必要性の高い子どもが選ばれることになった。お試しの3セッションだけでも、うんちを、ひっかけられたり、食べさせられたり、一緒に「殺人」をしたり・・・愛すべき小さな怪獣たちとの、十分すぎるほど個性的な数々のドラマを振り返ると、本セッションは一体どんな展開になっていくのだろうかと思ひ巡らさずにはいられない。

想像するだけで、ドラマセラピストの血が騒ぐというものである・・・！

（次号に続く）

家族造形法の深度

(1)

早瀬 一男

「誰かやってみませんか？」
家族造形法との出会いはこの一言から始まりま
した。

最初の出会いは1988年です。「家族療法家
のための研究会（企画：鈴木浩二先生 牧原浩先
生）」主催の“家族療法ワークショップ”が国立
精神保健・神経センターで開催され、その講師が
「体験学派」として活躍中のBunny Duhlだったの
です。

しかし、参加を申し込んだ時点で、「家族造形
法」「体験学派」「Bunny Duhl」等を知っていた
訳ではありません。まったく理解していなかった
というのが正直なところです。

同僚から案内文を見せられた時、「一人でもい
いので、東京（正確には千葉県市川市ですが）に
行ってみよう！」となぜか思ったことを覚えてい
ます。

実は、1985年の家族療法専門課程（京都国
際社会福祉センター）との出会いも同じような感
じでした。先輩であった団士郎氏からの誘いに、
「やってみよう！」と思ったのがきっかけでした。
巡り合わせというか、出会って、本当に不思議
なものだと改めて痛感しています。

その当時の案内文が今も手元にあるのですが、
そこには講師の紹介として、以下のような記述が
あります。

『講師のBunny Duhlは家族造形法、特に
Boundary Sculptureの生みの親として知ら
れ、その著「Interpersonal Vulnerability Contract」
や「From the Inside Out」は家族療法家の
間で愛読されています。家族システムの様相を描
き出し、それを建設的な方向に変化させるベ
テランの治療者です。既に、家族造形法を臨床の
場に応用している方もかなりおられると思ひ
ますが、彼女の造形法にはバラティがあり、とて
もユニークで応用の範囲が極めて広く、シス
テム療法だけでなく、個人の精神分析療法に
も、またその訓練やスーパービジョンにも十分応
用可能であると言われていました。家 族と個人
のシステムの診断と治療に必ずや役立つものと確
信しております。』

グループのメンバーに推されて手を挙げた私
は、Bunny Duhlの絶妙なりードのもと、自分の育
った家族を「家族造形」として作る（再現する）
ことになったのです。彼女の素敵な人柄、衝撃的
と言えるような体験と気づき、家族造形法のバリ
エーションの学びが、その後、現在に至るまで家

族造形法と付き合ってきた所以です。

彼女のファンになった私は、1988年以降開催された数度のワークショップに殆ど参加することになりました（ちなみに、京都国際社会福祉センターでもワークショップが開催されました）。

改めて、家族造形法を紹介すると以下のようにまとめられるかもしれません。

家族造形法（Family Sculpture：家族彫像化技法とも言う）は1960年代後半に生まれ、Bunny Duhl、Peggy Papp、Virginia Satir などによって広められた技法です。

その特徴としては、まず、治療的側面です。家族内の対人関係を、「いま、ここで」の面接空間といった場を利用して、家族が各々のからだを用いて、視覚的・具体的に示すことによって、相互認知を深め、感情を分かち合おうとするものであるということです。その結果、家族の変化へとつながるのです。

さらに、診断的側面も有しています。それは、家族内の相互作用の様相、家族員相互の親密さや距離、家族の権威構造、非言語的コミュニケーションのパターンなどが、可視的・感覚的・象徴的に家族全体の枠組み（システム）の中で理解できるからです。

ジェノグラムが主に事実中心から家族理解を深めるとすれば、家族造形法は感情や体験、あるいは“はっきりしないもの”を扱うことができると言えるかもしれません。

さて、前述の案内文にあるように『造形法にはバラティ』があるのですが、それはあまり知られていないと思っています。

また『応用の範囲が極めて広い』ものなので、私自身は実際の相談場面よりも、現在は「事例検討会」や「家族造形法を通じた家族理解のための研修会」等で、定期的・不定期に活用しています。

まさに、『システム療法だけでなく、個人の精神分析療法にも、またその訓練やスーパービジョンにも十分応用可能』なのです。

さらには、団先生とともに、「援助者自身の自己覚知」のプログラムを実施してきましたが、その中でも「家族造形法」がベースになっています。

ところで、家族造形法の紹介は、例えば、「平木典子 中釜洋子共著 家族の心理」の中の一コ

マに「家族彫像化」の概略が記載されていますが、数少ないと思います。進め方（技法）は、「家族療法技法ハンドブック（星和書店）」の「第3章 彫像化技法 家族ふりつけ技法」に紹介されています。「家族療法研究 第3巻第1号」には「家族療法への招待（3）」として、かなり丁寧に紹介されています。

しかし、『造形法のバラティ』については、知られていない（実践されていない？）ように思いますので、今回のマガジン企画の一つとして、「家族造形法」に焦点を絞り、これまでの経験を「家族造形法の深化・進化・真価」、そして「家族造形法の深度」としてまとめてみることにしました。

次回以降の内容としては（あくまでも予定ですが）、家族造形法の進め方の紹介、さまざまなバリエーションの紹介（時にはBunny Duhから学んだバリエーションの紹介）を考えています。

家族造形法の特徴の一つは「視覚」であるだけに、「画像」を通じた発信にチャレンジできればと思っているのですが…。思うようにいくかどうかは次回以降のお楽しみということで…。

いずれにせよ、執筆エントリーの底辺には、「この技法をそれぞれの対人援助現場で使ってもらいたい、いろいろなバリエーションを工夫してもらいたい」といった願いを込めています。

家族造形法は対人援助技法として、大変役立つものですので、お薦めですよ！

旅は道連れ、世は情け

女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜

村本 邦子

立命館大学・女性ライフサイクル研究所

生まれてくるときも、死ぬときも、人は一人だ。子どもの頃から、そう自分に言い聞かせていたことを記憶している。どうしてそんなことを考えていたのか。決して孤立していたわけではなかったし、いつも人には恵まれてきたと思うけれど、振り返れば、アンバランスに早熟な女の子が、一所懸命、自分の人生を自分で背負う覚悟をしていたのだと思う。

この命題に若干の変更が加えられたのは、女たちのつながりのなかで子どもを産んだときだ。あの世とこの世をつなぐ道がどれほど暖かく慈愛に満ちたものかを知って、「生まれてくるときも、死ぬときも、人は一人だけれど、私たちは決してひとりぼっちじゃない」と安心した。生きることに緊張しなくなった。リラックスして人生に向かえるようになったと言えばよいだろうか。

人生は旅のようなものだと思っている。終点はもちろん、個としての生命が終わるところなのだけど、それがどんなところであって欲しいというようなものは、私にはない。どのようなところに行き着いたとしても、自分の歩んできた旅路こそが重要であり、終点において振り返ることができるとしたら(死に方によっては、できないかもしれないけれど)、「これが自分の旅だったんだなあ」と、格別の愛着を持って、しみじみ思い返せるものであって欲しい。

今、ちょうど旅の折り返し地点に近いところまで来て(私は自分の人生を百年と置いている)、来し方を振り返り、眺めてみるならば、いまだにとても不思議なことだったと思えてならないのが、女性ライフサイクル研究所という組織を立ち上げ、二十年も経営してきたという事実だ。これは、そもそもの自分の人生シナリオにはなかった。一人で開業するようなことは十

分あり得たけれど、組織を作って誰かと一緒に仕事を展開していくなどということは想像だにできなかった。

子どもの頃から、人と一緒に何かをやることは多かった。どういうわけか、いつも私の周囲には人が集まってくるので、たとえば、小学校の頃なら、休日、女の子たちで集まって、お料理を作って一緒に食べるとか、女の子と男の子と一緒に集まって、バドミントンをするとかいった会を作ったり、中学の頃なら、休日、近所の山に登るとか、試験前の勉強会をやったりとか、オカルト研究会を作って活動していたこともあった。それなりに、リーダーシップはあったのだと思う。人を集めて、楽しいことを一緒にするのは得意だった。

けれど、真剣に何かに取り組みまなければならないとき、人と一緒にやるのは、苦手だったような気がする。たとえば、大学院時代、研究会というのが嫌だった。マイケル・バリントの『治療論からみた退行～基底欠損の精神分析』(金剛出版)なんて本を読んでいたのだけど、「いったいなぜ人と一緒に本を読まなければならないのか。自分でとことん納得いくようにじっくり読む方がいいに決まってる！」と反発していた。自分のペースを保てるのが絶対条件だったし、いい加減な人たちに振り回されるのはごめんだと思っていた(これは、この研究会のことを言っているのではない。何をするにしても一般的に)。

加えて、組織というものに対する根本的不信のようなものがあつたように思う。これがいつの頃から、どのような形で芽生えていったのか、定かではない。子ども時代は無関心で、アカデミックに入ってから形成されたものだったかもしれない。あ

るいは、思春期特有の辛辣な大人社会への批判に由来するものだったかもしれない。巨大なシステムはいとも簡単に個を殺すし、そこに呑み込まれてしまうと、何か大切なものを見失ってしまうと感じていた。「命の命らしさ」とでも言おうか。

要するに、それは、警戒の手を緩めてはいけない相手だった。決して、自分が人生の裏街道を歩いてきたとも思わないけれど(むしろ、外からは逆に見られると思う)、世の中に表舞台と裏舞台があるとすれば、表舞台に立って大切なものを失うより、裏舞台で何か大切なものを探し続けたいと考えていた。思えば、子どもの頃、こよなく愛していたのはアルセーヌ・ルパンだった。

その昔、「組織と女性」(1996、『人間性心理学研究』14巻2号、162-170)というペーパーを書くために、女性たちのインタビューを行ったことがある。そのときに印象的だったのは、若い女性が就職するとき、組織に対する関わり方は、父親との関係を反映するのだということだった(ちなみに、私の父は組織と無縁な自由人だった)。もうひとつ、彼女たちは、「組織イコール男社会」と口を揃えて言ったのだ。大沢真理さんよれば(1993、『企業中心社会を超えて』時事通信社)、現代日本社会の特徴は、たんなる企業中心社会ではなく、家父長制を基盤とする企業中心社会なのだという。ここで、「家父長制」とは、女が「内助・補助・底辺」であり、男が「主人・基幹・トップ」であるというように、女と男が、職場、家庭、地域で直接・間接に結んでいる関係、すなわちジェンダー関係を示す。

子どもを産んでジェンダーの視点を得るまで、私は、女性問題に関心を持ったことがなかった。女であることにあまりに満足していたため(女で損なのはヒッチハイクができないことだけだと思っていたし、結婚して子どももできてからだけど、必要に迫られて、一度だけヒッチハイクもやってしまったので、今ではこれも消滅した)、深く考えたことはなかったが、世の中の表舞台とは、半分だけの価値観が支配する欠けたところで、そこに自分を位置づけることは、自分を十分に生かせられないという予感を持っていたのだろう。アルセーヌ・ルパンとは、男性的であると同時に女性的でもあり、憧れの対象ではなく、同一化の対象だった。

そんな私が、大阪と京都にオフィスを構え、今や、総勢十三人の女性からなる組織を二十年も維持してきたというのは、

まったくもって人生の不思議である。今、大学で教えていることにさほど不思議はないが、立命館大学というマンモス組織のなかで、(今のところという限定つきだが)意外にもおもしろがりながら、組織の役割を果たして働いているという不思議も、この延長線上にあるだろう。「どうやったら、二十年間うまくやってこれたんですか?」と尋ねられると、いつも答えに窮してしまう。たいして何も考えず、まったくの素人が、なりゆきでスタートさせた事業である。身近にモデルやノウハウがあったわけでもない。たしか、当時、「社会的起業」という言葉が出始めていたが、取り立てて、起業という意識を持っていたわけでもなかった。ただ、現在あるものが、要所要所で立ち止まり、よく考え、よく選択してきた結果であることは間違いない。

このあたりで一度、二十年を振り返ってみるのもいいかもしれない。事業として、本当にうまくやってきたのかどうかわからない。ただ、研究所が私たちスタッフにとって良い職場であり続けてきたこと、そして、それなりに長く社会に貢献してきたことには胸を張れると思う。そう考えれば、たしかに、まんざらでもないのかもしれない。これから、この連載で何を書いていくことになるのか、自分自身もまだよくわかっていない。今のところ、こんな私と女性ライフサイクル研究所の変遷をたどることで、武骨ながら叩き上げの組織論のようなものを書けるのかもしれないなどと思っている。経営学的に言って、それなりに根拠があることが浮き上がってくるのかもしれないし、逆に、偶然と幸運の連続だったということが見えてくるのかもしれない。少なくとも、今回、ここまで書いてわかったことは、それがジェンダー論を絡ませたものになるだろうということだ。

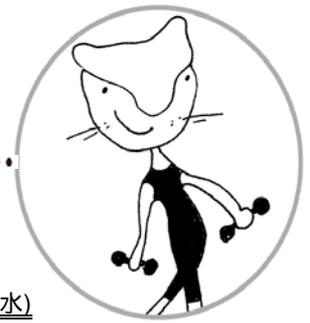
ある意味で、これは、二十年を振り返る旅日記のようなものだ。





講座 & グループのご案内

講座・グループは全て予約制です。大阪本社にお電話をいただくか、メールでお問い合わせ、お申し込みくださいませ。



子育てのコツを学ぶママのためのやさしい心理学講座

京都支所：毎月第2水曜、10:30～12:00

大阪本社：毎月第2水曜、14:00～15:30

料金：1回 1,000円 担当：津村 薫

次回は6月9日(水)

女性心理学フリートーク（大阪本社）

『母は娘がわからない』を読む：毎月第4月曜、10:30～12:00

料金：1回 1,000円 担当：津村 薫、下地久美子 次回は6月28日(月)

女性心理学フリートーク（京都支所）

日時変更しています。ご注意ください。

『心的外傷と回復』を読む：毎月第3火曜、10:00～11:30

料金：1回 1,000円 担当：渡邊佳代、村本邦子 次回は6月15日(火)

2010年度キッズ・サポーター・スキルアップ講座（大阪・京都）

保護者対応、ストレス対処、困った場面での対応、聴く技術、援助者の思考・行動パターンを見直すなどをテーマとした子育て支援者対象スキルアップ講座。受講料：10,000円（2日間8講・前納制・教材費込）

会場：【京都】8月5日(木)・6日(金) 9:30～16:50 「女性ライフサイクル研究所京都支所」

【大阪】8月19日(木)・20日(金) 9:30～16:50 「エル・おおさが(大阪府立労働センター)」

女性ライフサイクル研究所20周年記念イベント

女性ライフサイクル研究所20年の歩みとこれから

～人生の楽しみ、事業の喜び～

日時：2010年10月31日(日)13時～

場所：クレオ大阪中央・音楽ホール(地下鉄谷町線四天王寺夕陽丘下車/徒歩5分)

参加費：予約500円/当日600円(電話・メール・ファックスでお申し込みください。)

お支払いは当日、受付にて)

内容：【第一部】13:00-15:30

20年の活動報告

鼎談 村本 邦子(女性ライフサイクル研究所所長/立命館大学教授)

ゲスト：多田 千尋さん(芸術教育研究所所長/東京子ども美術館館長)

乳幼児教育、子ども文化、高齢者福祉、世代間交流について研究・実践。早稲田大学で「福祉文化論」を教える。「日本の社会起業家30人」の一人に選出。

上田 理恵子さん(株式会社マザーネット代表)

ワーキングマザーが、仕事と家事・子育ての両立をしていくうえでの問題点を解決し「仕事を続けてきてよかった」と実感できる社会を創造することを理念とし、起業。

【第二部】16:00-16:40

ピアノ・コンサート 演奏：パールノート(長川歩美+村本邦子)

曲目：ショパン「プレリュード」から

ラフマニノフ前奏曲「鐘」

ガーシュイン「プレリュード」ほか



Tel : 06-6354-8014

ホームページ : <http://www.flcflc.com>

E-mail : jyoseilife@flcflc.com



〔援助者向け〕〔女性・家族〕〔子育て～乳幼児から思春期まで〕〔ジェンダー・セクシャルハラスメント・性〕〔コミュニケーション・生き方・ストレス〕などをテーマに、講師派遣をいたしております。何なりと、お問い合わせください。

形づくる 人々

第1回 自己紹介

柳川正賢

(やながわ・まさより)

中央法規出版 企画部企画第4課

喝！

はじめまして。私は書籍の出版事業に携わる「編集者」です。“対人援助”そのものを生業とする専門家ではありません。世の中には、専門外の間人が専門のことを言って、それなりに支持されるということが現実に行われていますが、こういう人が言っていることの中には受け取り手がその後活かせるものがほとんどないのが通例です。はじめにその話をさせていただきます。

私は“編集”という職業柄、人の話をまと

めて記事にすることがあります。例えば、ある研修会の模様を講演内容とともに報じるといった記事。ここでたびたび矛盾に出会います。聞き手の反応はよいのに、話の中身に聞き手が歓迎しそうな要素が見当たらない、ということです。疑問を解明すべく、何人かの参加者に声をかけると、たいていは「話がおもしろかった」で一致します。“おもしろい”が向学心につながることを考えれば、研修主催者のねらいはある部分で達成されているのですが、「参加者へ届けるべき内容を届ける」という第一の目標に照らせば、未達成に違いありません。ここで問題なのは、参加者も主催者も、本来の目的が未達成であることに気づかずに通過してしまっていることです。パフォーマンス（この場合は話術）にカモフラージュされて、目的そのものを見失っていることに気づかない。

ただし、例外があります。受講者が強い目的意識をもっている場合です。「このことを学びたい」と強く思っている人は、それとは異なるものが現れたとき、「求めている内容ではない」とか「そこまではわかっている」、あるいは「そもそも言っていることが間違っているようだ」などと反応します。

では、そのことを、このマガジン連載に置き換えて考えてみたらどうなるでしょう。複数の筆者がそれぞれテーマを決めて執筆する。専門分野・活動領域の幅広さとテーマの自由さが内容の多様性や奥行きを生み出してくれそうです。期待大です。ただし、本作りの基本に則ったとき、異例の要素があります。それは、「読者対象を設定していない」「読者ニーズに応えることから出発していない」の

2点です。初めから販売が目的となっている書籍の場合、読者対象を明確にすることとその対象が求めている内容にすることは必須です。それを抜きにしたら売れませんから。

この2点を外しているということは、先ほどの「研修受講者」、イコールここでの「マガジン読者」は、仮に書き手がパフォーマンス重視(この場合は筆術)で押していても、内容の稚拙さや不整合、誤りがあった場合に鋭く反応できないでしょう。そのことは、読み手と書き手の相互交流から何かを作り出していこうとしたときはデメリットです。たとえば、そこに“楽しい”“おもしろい”“ありがたい”などの実感があっても、読み手に有益とはならない、場合によっては害にもなる、というのが私の考えです。

記事は読み手の主体的な動機(これを知りたい、読みたい)から出発していないので、書き手の「何を届けるか」を意識するパワーも大きくないと、うまくは届いていけません。加えて、私自身が文章の専門の端くれだったりしますから、うまいことを言いながら、それなりに楽しんでもらえながら、でも実際には何も届けていないということを、しようと思ったらできてしまいそうです。

これらはすべて、連載を始めようとしている私自身への「喝」です。なぜなら、私はこの連載を通し、読み手とも書き手とも交流したいと思っているからです。にしても、対人援助の専門家ではない者が、専門本体を語らずに何を伝えようとしているのか。もう少し詳しく自己紹介します。

出会い

私は現在41歳。今の会社に入社したのは平成11年の12月。介護保険制度が始まる4カ月前です。その前は7年間、某新聞・某週刊誌で編集記者をしていました。福祉とはまったく別の業界です。福祉に関心をもったきっかけは、親戚の介護問題とそれと連なって生じた不幸な出来事にあります。日本の社会保障がどんな仕組みになっているのか、これからどうなっていくのかを知りたい、そんな漠然とした好奇心が募っていた折に、たまたま中央法規という会社の募集要項を目にし、転職したというわけです。

今思うと、一過性の“熱”だったような気もして、採用されなければ元いた業界で仕事を続けていたと思います。そちらはそちらで魅力にあふれる世界でしたから。

しかし、私は出会ってしまいました。「対人援助」の世界と。初めは数年でやめることになるだろうと思っていました。もともと、社会保障にかかわる見聞を広めながら、自らの好奇心や問題意識を追究することが目的でしたから、ある程度納得がいけば離れていくのが自然です。事実、日本の社会保障に対する自分なりのとらえ方ができるという意味では、転職して2年ほどで目的はほぼ達せられました。とらえたのは、社会保障のなかのほんの一部である「高齢者福祉」のさらにほんの一部ですから、そんなのは知ったうちにも入らないのですが、私にとって大事なものは、心に在った直接の問題意識を自分なりに解明し納得できることでした。仕組みとそこにある構造、そこに関係する人々から紡ぎ出されてくるものを見ていくなかで、ああそうか、

ふうんそうなんだという感触を得る。まだ自分が見ていない部分も、それまで見てきたことの延長線上でおおむね理解できる、推察できる。そこへ至ったということです。

ところが、いつ頃からか、私には心を強くとらえて離さないものが生まれていました。それが「対人援助職」です。ここでいう対人援助とは、相談業務を行う専門職のみを指すものではなく、介護や医療といったサービスを直接提供する職種や、専門資格化されていないけれども同様の営みに携わっている人々（ボランティアやボランティアとまではいえない人）を含んでいます。すなわち、何らかの形で人を支援している人の総称です。

なぜ、心をとらえたのか。それは、「ふつうに生活をしていると出合えないもの」、だけどそれは人間という存在を知る上で抜きにできないもの、がそこにあったからです。

援助を必要としている人は世の中にたくさんいます。でも、援助を必要としていない人は、社会生活をおくるなかでそういう人たちの存在を知ることがありません。情報としては知っています。介護を必要としている人がいる、病気で苦しんでいる人がいる、経済苦で悩んでいる人がいる、と。でも、それは当事者のリアリティとはかけ離れたものですし、ある面ではそこへ排他的な視線が無意識のうちに注がれていることもあります。「ああなったらおしまいだ」「ああはなりたくない」というように。

そう思うのは、人間であれば当たり前だと私は思います。そう思うことが必然とされる社会で生きているのですから。どういう社会かといえば「競争社会」です。受験も就職も

結婚も出世も、大多数の人が人生のルール上に置いているこれらを決する基本原則は「競争」でしょう。ただし、そこには必ず「ルール」があります。ルールは、受験のように形式を決めるものもあれば、恋愛のように人を尊重する気持ちや倫理からおのずと決まってくるものもあります。そのルールを犯して新聞やテレビで報道される事件も少なくありませんが、全体に占める割合でいえば、ルールは機能しているといえそうです。

ルールが機能している（＝競争原理のなかで生き、そのことが常態になっている）と、それとは異なる原理にふれる機会は減ります。必要性が低いのでそうなるでしょう。“それとは異なる原理”とは、先ほど挙げた「ふつうに生活していると出合えないもの」で、それが「対人援助」であると私は感じたのです。競争社会においても、目の前の困っている人を助けるなどということはいくらでもある、というより、それもルールに含まれていると考えられますので、そのこと自体は「対人援助」の専売特許ではありません。私が感じたのは「人との向き合い方」でした。

相手を理解しようとする、思いを汲み取ろうとする、そこへ寄り添っていかうとする、まるごと受けとめようとする。こういうことを仕事にしている人たちを見ていて、最初は「これが“福祉”というやつだな」「こういうのを技術とみなすのか。変わった専門性だな」と思っていました。ところが、知っていくうちに「専門の資格を持っているから、その職に就いているから、という理由だけで役割をまっとうできる仕事ではないらしい」ことに気づきました。

例えば、“相手を理解しようとする”というのは、それが仕事の内容として設定されていればできるかといったら、それだけではできないと思います。相手を理解しようとしている人は、第一に“相手を理解したい”と思っているはずで、理解したいと思って初めて、真の理解に近づける。そういうものだと思います。では、相手を理解したいと思う気持ちは、その職が専門性として求めたら、もてるでしょうか。“理解したい”は自己の内面から起こる主体的な欲求です。外部から求められて湧き起こるものではありません。

ということは、「対人援助」にかかわる仕事はその「専門」の中核に、きわめて人間的なものがある。かかわる人同士の“人間としてのつながり”が最重要ファクターとなる世界。このことが私をとらえたのです。

応援

やがて私は、「現場の実践者を応援したい」と強く思うようになりました。仕事の専門性の中に人間的な何かがあるということは、その仕事を見続けていくなかで、人の人間的な部分を確かめられるということです。確かめられた大きな一つは「人間愛」でした。今日の前で苦しんでいるこの人をなんとかしてあげたいと思う気持ち。それをもちながら頑張っている姿に胸を打たれたのです。

一方では、煮え切らない思いが出てきました。「対人援助」はそこにかかわっている人以外、周囲には見えない世界です。そこにどれだけの価値があるかは当事者たちしか知りません。つまり、外部からは評価のできない

世界です。一面的には、例えば“要介護状態が軽減された”“虐待がなくなった”などのように外部評価が可能な部分もあります。しかし、それはあくまでも“部分”であって、そこだけで対人援助の価値をはかることはできない。少なくとも、私が現場取材のなかで目にしてきたものは多くがそうでした。

周囲から見えないということは、その価値に見合った評価が困難であると同時に、価値や意味（対人援助の真髄）を知る機会そのものが乏しいということです。ああこういう援助があるんだ、この援助によってこんなことが生み出されるんだ、という一つひとつの価値がその場かぎりのもので、周囲の誰もそこにあるものを受け取らない、あったことすら知らずに過ぎ去っていく。これは悲しいことです。

私はいつしかこう考えるようになっていました。この人たちがしていることをきちんと社会のもとに照らし出さなくてはいけない、少なくともそのことの価値を多くの人が考えられる場をつくらなくてはいけない、と。その場こそが、私が携わってきた雑誌『ケアマネジャー』です。

雑誌『ケアマネジャー』

『ケアマネジャー』は、介護保険制度における介護支援専門員をメインの読者対象とした月刊誌です。平成11年7月に創刊しています。こちらの『対人援助学マガジン』の読者のなかには、ケアマネジャーがどんな職種かをご存知ない方もいらっしゃると思います。簡単に言うと、ケアマネジャーとは「要介護状態

にある高齢者の自立を支援する相談援助職」です。雑誌の中身に関しては、次回以降の内容と関連して登場してきますので、ここでは置いておきます。



私はこの雑誌の製作を通じて、数多くの現場取材してきました。現場は大別すると、市町村行政、援助実践者、利用者（クライアント）、の3つです。

現在、全国には市町村の数が約1700あります。私はこのうち約550の市町村行政、主には介護保険や高齢福祉の担当課と接点をもってきました。現地（市町村の庁舎等）を訪れて直接取材したのは168市町村です。私がこちらの業界にやってきた平成11年当時は約3300市町村あり、合併前後の両方を取材している市町村もありますから、単純に1700分の550ということではありません。だとしても、かなりの数だと思います。もし、日本に私と同じくらい市町村行政取材されている方がいたら、ぜひお知り合いになりたいです。きっと濃密な情報交流ができるはずですよ。

援助実践者は数え切れません。事業所の数にして、現地・電話取材や原稿依頼が成立するというレベルで600～800事業所、現場の状況を調査するためのアトラダムなヒアリングなどを加えると、ゆうに2倍は超えます。

「はじめまして」という言葉を3日も続けて発さないと、仕事を満足にしていけない感覚にとられる、そんな頻度のアクセスです。機関属性は居宅介護支援事業所を筆頭に、介護保険の在宅サービス事業所（訪問介護や通所介護、訪問看護、福祉用具など）、入所・入院施設の特別養護老人ホーム、老人保健施設、病院、行政所管かそれに近い性格をもつ保健センター、社会福祉協議会、地域包括支援センターなど。

利用者（クライアント）の取材は、援助実践者の取材の過程で利用者の自宅や入所施設の居室を伺い、援助者のかかわりを通して間接的にそこに在るものを受け取る形が多く、この頻度は月に1～2回程度。利用者の生の声を直接聴きたいときは、紹介者（主にはケアマネジャー）を介して1対1、あるいは家族が同席する形でインタビューをします。こちらの頻度は年に1～2回と少ないです。

なお、現在の所属についてですが、今年4月に部署を異動し、約10年務めた『ケアマネジャー』の編集部を退任しています。今の仕事は、社会福祉士や精神保健福祉士などの資格取得を目指す人のための書籍づくりが中心です。といっても、現場の視点をもって臨むこれまでのスタンスは変わりません。

これらを細かくお伝えしているのは、私が何者であるか、言い換えると「本連載に何を期待できそうな人間か」のイメージをもって

いただくためです。私は本稿の冒頭で、「専門外の間人が専門のことを上手に言っても、受け取り手の役に立たない」と言いました。この持論にしたがい、私は自らの“専門”で連載を展開していこうと思います。私の専門、それは「情報」です。

連載の目的も挙げておきます。一つは、「情報を通して読者をつなぐこと」。つながると新しい何か生まれる、そのことをいくつもの事例から確かめています。2つや3つ、それ以上を媒介する中継点になりたいと思っています。

もう一つは、「すべての現場実践者へのエール」です。私は先ほど、現場実践者を応援したいと思った理由のなかに、頑張っている実践者の姿に胸を打たれたと挙げました。もしかしたら、こう思った方がいるかもしれません。「そんな志の高い人は少数だ、実際はひどいのが多いんだから」と。そんなことは百も承知です。数を知っているということは、そういうことです。でも、たとえ100人いるなかの99人が“ひどかった”としても、残った1人の“すばらしかった”は絶対不変のものです。“悪いもの”は目立ち、また排除の対象となるため、その割合が多い場合も少ない場合も、全体の傾向としてとらえられがちです。だからこそ、たった1つの輝きのほうに目を向ける。それが、やはり先述した「この人たちがしていることをきちんと社会のもとに照らし出す」ということです。照らし出されたものを見て知って、“ひどかった”といわれていた側が変わる可能性もあるでしょう。“ひどかった”には理由もありますから、私はこちらにもわりと好意的です。

*

長い自己紹介になりました。「理解」と「興味」は大概不可分です。次回からの内容を受け取っていただくために、私自身に少しでも興味をもっていただく必要がありました。ここまで読み進めた方は、少なくとも何者かさっぱりわからないという状態ではなくなっていると思います。しかし、長い文章は好まれない昨今の風潮を考えると、第1回から失態を演じたかもしれません。今、気づきました。

タイトルの『形づくる人々』は、長大な自己紹介から内容をご想像ください。

次回より本編です。楽しみにしててください。

ちょっと長くて くどい編集後記

学会スタート以前

二〇〇九年秋に発足した学会ですが、その前、二年余り、京都キャンパスプラザで月例の「対人援助学会準備会」を開催していました。ここには毎月、ヒューマンサービス分野のいろいろな人にゲストスピーカーとして来ていただきました。そこで見てきた地域社会のディテールの構築性をとても興味深く思っていました。マガジンでは、そこを更に掘り下げたものが生まれると良いと思っています。月例会も又、再会したいと準備中です。お楽しみに。

創刊

会員112名(2010/5/25現在)の小学会ではありますが、技術革新の恩恵を受けて、こんな形の雑誌が出せることになりました。まず連載を引き受けて下さり、締め切り日に原稿がいたただけた執筆者の方々に感謝します。

ご覧の通り、様々なジャンルからの多彩(多才)な顔ぶれによる一冊に仕上がりました。まだまだ展開途上(完成形は全く考えていないので、ずっと展開途上誌です)ですので、学会員のみならず、読んでくださった方々から、幅広く感想やご意見を伺いたいと思っています。

編集長メールアドレス

danufufu@osk.3web.ne.jp

また、新規連載参入の意思表示もお受けしたいと思います。編集者として採否判断はさせていただきますが、多領域から広く捉えた「対人援助学」の花が咲き乱れるといいと思っています。

季刊誌の位置づけです。創刊第二号は三ヶ月後、9月中旬発行予定です。したがって8月末が原稿締め切りになります。連載を開始された方々、心に留めておいてください。

マガジンへ

思いつきは瞬間でした。ニューズレター編集担当の千葉君と話している最中、最初に考えていた印刷物のNLから大きく展開してしまいました。そのことで負担は増えましたが、楽しみも増えました。この着想から考えはじめたら、話題のFreeのことや、iPadがとてもしっくり来ました。

80頁程の雑誌だというのに、総ページ数も印刷費も発送コストも考えなくていいのです。バックナンバーの在庫管理も、売れ行きも、収支決算も要らない刊行物になりました。表紙のデザインや基本レイアウトのことを、あれこれ楽しみに考えていただけでした。校正が緩いかもしれないのはお許し下さい。まあ、素人ですから。

「学会誌」(本マガジンとは別です)を完全にWEB上の発行にしようと言っていた望月さん、サトウさんの意図がやっと理解できました。

ところで、世の中は、ますます短く、簡潔なものへの指向を強くしています。私の愛読誌「月刊クーリエ JAPON」も何度かのリニューアルを繰り返して、どんどん記事は短いコラム誌のように変身しています。

そんな中だからこそ、長く書かなければ伝わらないこともあるのだというマガジンにしたいと思いました。専門的ではあるが、読者対象に排除的姿勢をとらない。どなたにも「今、この世界では！」とお伝えできるもの満載になったのではないかと考えています。

雑誌(印刷物)として手にするのが馴染む方は、ご自身でプリントアウトして、ファイルしていただくと、雑誌らしさが出るかもしれません。(その場合、出来ればカラー印刷で)。

今後の課題は、会員を増やすための宣材として考えていたニューズレターの役割問題です。無料で誰でも読めるマガジンにしたら、入会するメリットがないという意見。私も長年そう思ってきましたが、ネット上の無料ソフト開発者のモチベーションの在り方のことを考えると、この思い込みはオールド世代のビジネスモデル発想かなと思うようになりました。新しい学会を作った目

的に見合う活動は何なのか。そこに向けてどう行動すべきなのかが問われています。

執筆者

雑誌の基本コンセプトが出来ると私の回りで、様々な対人援助世界で活動する人に、執筆を呼びかけてみたくなりました。

「出来るだけ自由に、何でもいいから書いてください。ただし連載です。最低でも一年、できればそれ以上延々と。季刊発行ですので、年4回。最低でも2頁、出来ればもっと長く」、こう書きました。

長く書いて下さいということは、その方の世界の一部がある程度の深さをもって提供されることを求めています。業界の専門用語や慣用概念で解説をして終了なんて原稿は登場する余地の少ないことになりました。

この要望に応えるものを書くためには、それなりのキャリアも必要かもしれません。でも、年配の人にしか書けないというものでもありません。いろんな年代の、いろんなジャンルの経験智が集まるといいと思っていました。

また、一分野から一本というコントロールをかけるのではなく、似通った実践が出てくるのも容認しようと思っています。細部に神宿るといいます。そんなディテールの差異こそが私たちが見るべき物なのかもしれません。

もっとも冗長がすぎれば読み手はうんざりして離れてしまうだろう事も戒めに、筆者、編集者共に、この営みを開始します。(編集長 団士郎)

理事会で、対人援助学会のニューズレターを担当することになった。あれこれ編集長と話しているなか、「ニューズレターではなくて、マガジンにしよう！論文や授業で、よく出てくるような話ではないものが出てきたら、おもしろいやる。」それは、確かに、オ・モ・ロ・イ。

「マガジン」という言葉も、なんだか懐かしいやら、新しいやら。マンガ世代の私には、マガジンというと、まず少年マガジン、テレビマガジン！昔わくわくして書店へ発売日に駆け込んだ思い出とともに、陽性の感情を伴う。

四十代で復活し、楽しみまくっているバンド、ユニコーンの復活後に出た書籍もそのあたりの「マガジン」をカメオにしていた。そして、プラモデル世代の私には、マガジンというと別の意味を思い出す。マガジンというと銃の弾倉だ。映画などでよく観る、銃器類の弾切れでガチャッと外して新しいのとガチャッと取り替える、アレだ。

編集会議の中盤、著者の方々の連載第1回原稿を手にする。データ刷りだして100ページ弱の厚みや重さ、面白そうなタイトル、対人援助業界のみならず、社会への火薬的な役割は、まさに「マガジン」なのだ。

編集長の仕事場で複数回、延べ10時間以上にわたる編集会議。(もちろん皆様のご想像通り、たくさん脇道にもそれて、アレヤラ・コレヤラ会議！)。初回は、理事の川原氏、乾氏、会員の多田氏のご協力をいただきスタート。

数回目、原稿データを持ち帰って作業開始！微力ながら、ページのデザインを十種あまり作って検討。そのうちの一つのデザインに絞って、組みなおす作業を担当。また、ネット上での著作権侵害に関することに関して、弁護士の方に教えてもらったり、ネットによくある「何でも質問箱」も初めて利用して、調べてみたり。

その一方で、原稿を読み進めていったのだが、クオリティの高さに打ちのめされる。いづれも対人援助の現場が内包してきたものでありながら、社会に表現できていなかった部分であり、欠かせないポイントとなることが含まれているように感じる。

これを人々に届けるということは、是非やりたいことだ。というか早速、私が伝えられるところでは、既に告知済み。「電気自動車 日産リーフ 月×日 発売！ 先行予約受付 開始！」という感じ。一つ一つの内容は、それぞれについて考えたいことであり、知っておきたいことであり、取り上げたいテーマである。

うちの業界は、そうみられているのか?!
その業界の人の自己評価はそんな感じだったのか! そんなことがあるのか...、早く続きが読みたい! 時には、その立場の人に、そうは言われたくない!なんて思いも浮かぶ。

様々な思いで読み手を射抜き、頭と心に火薬的ともいうべきスピードで何かを動かす。そんなふうに、いろんな意味でのマガジンなのだ。

連載の二手目に著者の方々は何かを持ってくるのか、新連載はあるのか? 子どもの頃、マガジンの発売日に百円玉と十円玉を握り締めて近所の書店に駆け込んでいた。次号を待って、やっと手にできるそんな気分を久しぶりに思い出させてくれる、対人援助学マガジンに乞うご期待。(編集員 千葉晃央)

表紙の言葉

表紙は毎号、変えようと思っています。登場するのは、一度はどこかで役目を果たした作品になる予定です。創刊号の表紙は、連載執筆者の一人である岡田隆介著「家族援助のレシピ」金剛出版の裏表紙に使用したものです。

装画を依頼された時、すぐに「家族援助のレシピ」の言語連想で思いついた登場人物(コック)。あの帽子は記号としてとても効果的です。TV番組「ビストロ SMAP」が話題になっていたこともあって、表紙は数人のコックを描きました。

これは裏表紙でしたので、バーコードが入った縮小されたものを購入者には見ていただくことになりました。今回はそのままに近いものです。タイトルや書名は、入ることを前提に描いているので違和感ないのですが、バーコードには異物感がぬぐえません。かつて、イラストレーターの和田誠さんが装丁したある本では、購入者が後から剥がせるように、貼り付けシールのバーコードにしてありました。

対人援助学マガジン

No. 1

2010年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

学会入会規定

入会資格は特にありません。対人援助学会に関心のある方ならどなたでも会員になれます。

会員の特典は、電子媒体の学会誌や年次大会のプログラム、その他本会の発行する資料の配布を受ける。

年次大会および学会誌上での参加・発表資格、ならびに対人援助学マガジンの執筆資格を有する。

入会年度は、毎年9月1日より新年度になります。

詳しくは学会ホームページをご覧ください。